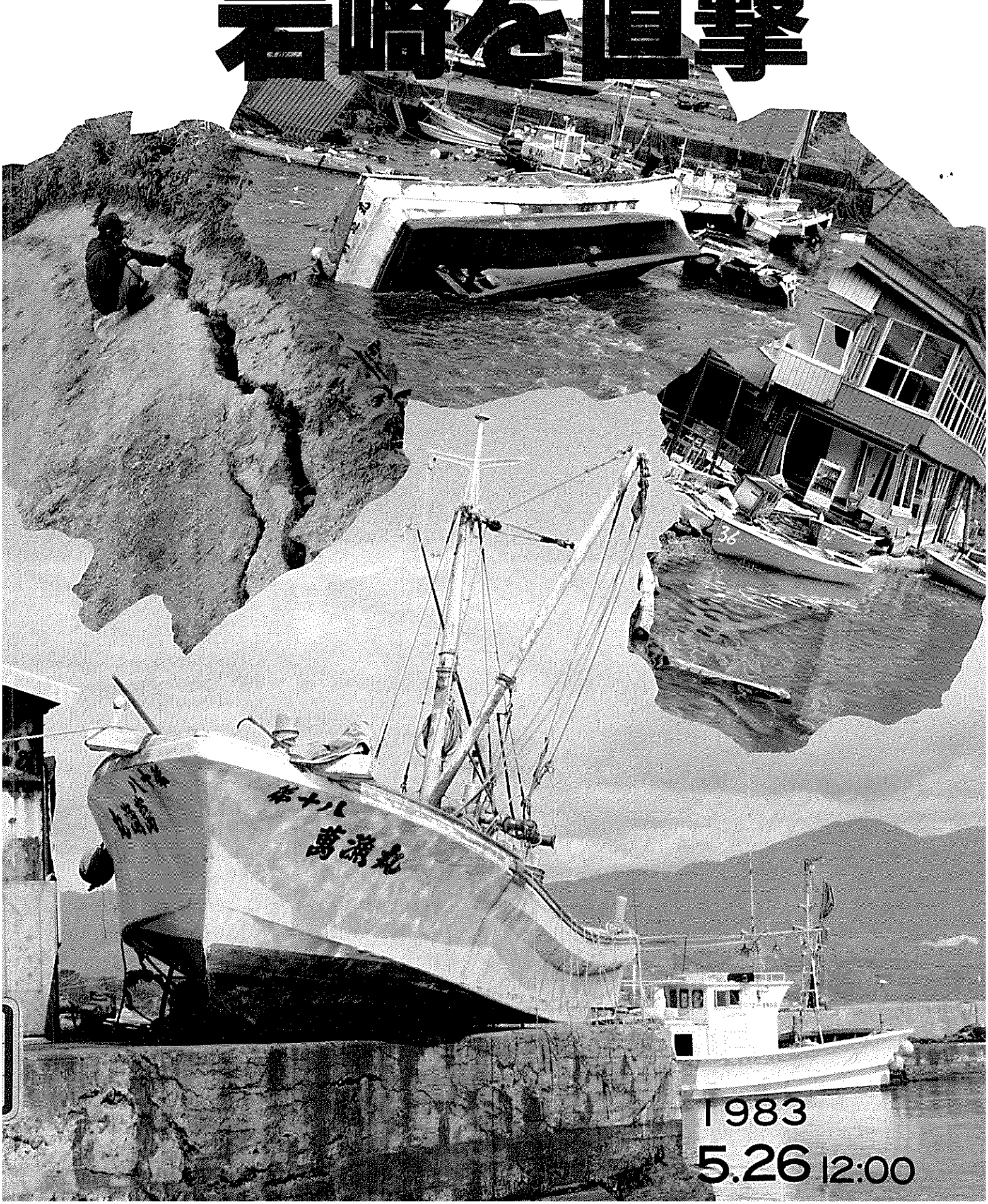
日本海中部地震 M7.7

岩崎を直撃



写真編

津波の悪夢 岩崎漁港

目次

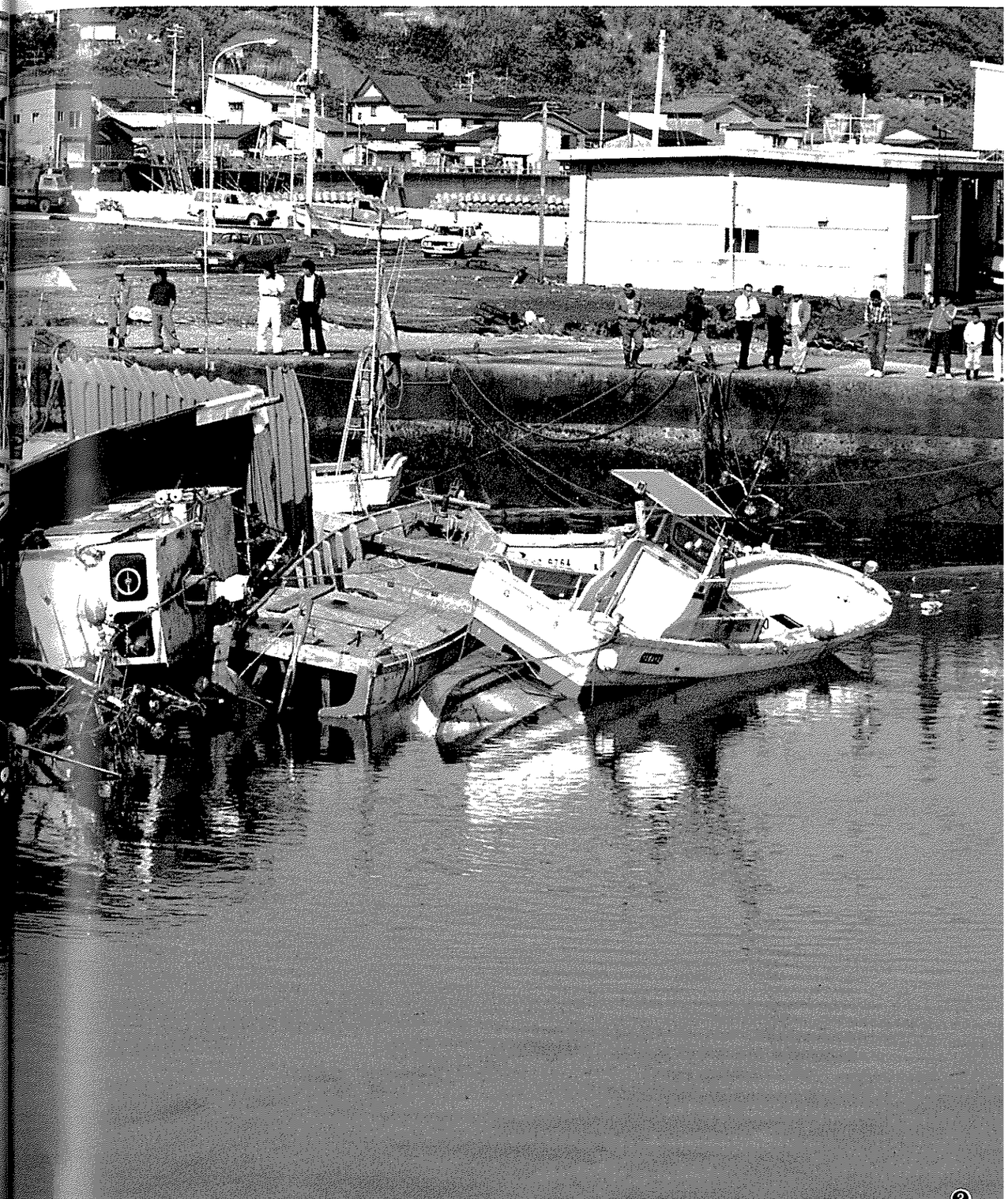
■写真編　1〜77

岩崎漁港
沢辺漁港
森山漁港
大間越漁港
道路関係
河川関係
国鉄関係
建築物関係
水田関係
観光施設関係
水道施設関係
給水関係
被害調査関係

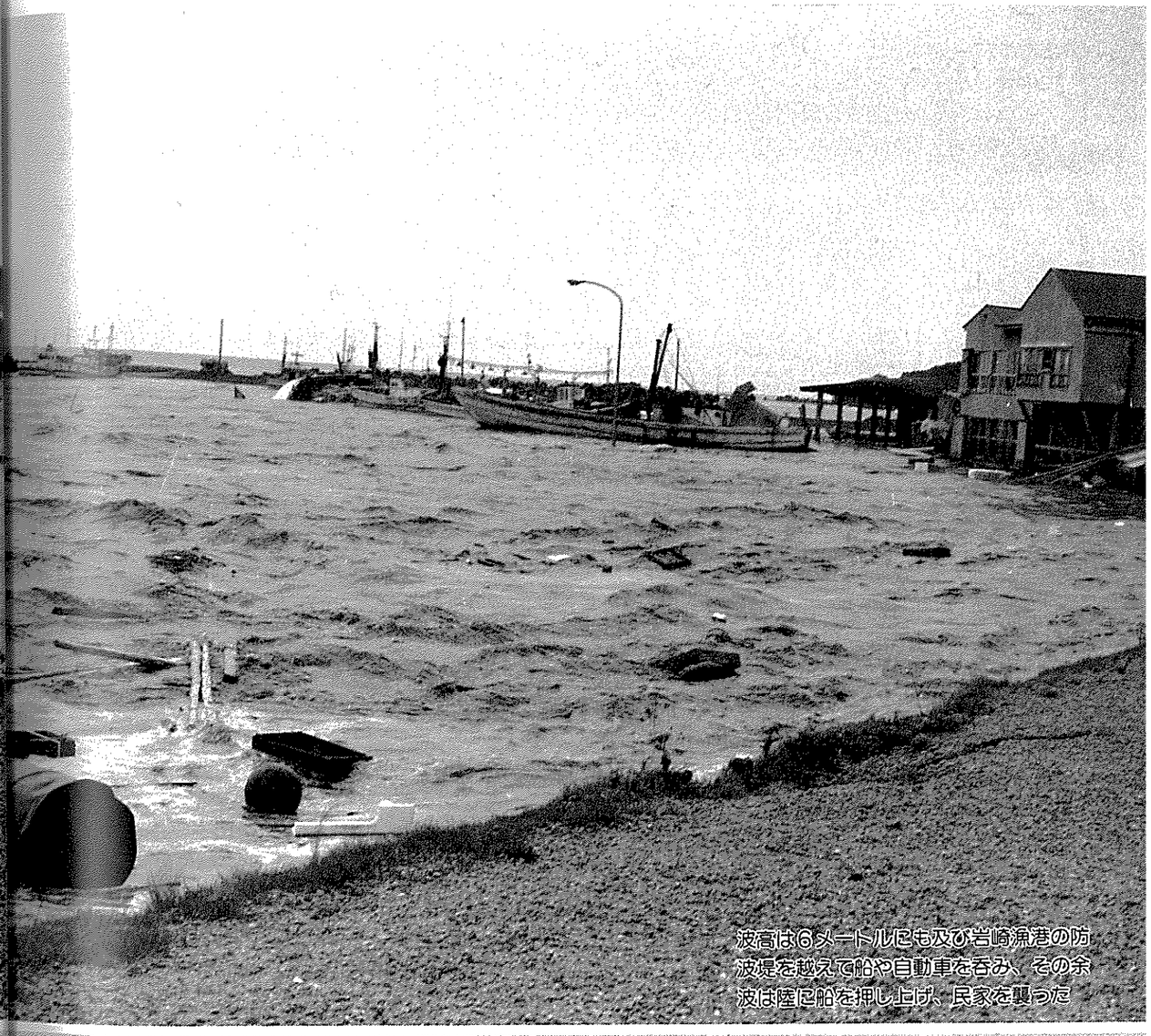
■体験談編　78〜100

岩崎南小学校
岩崎小学校
岩崎中学校
一般

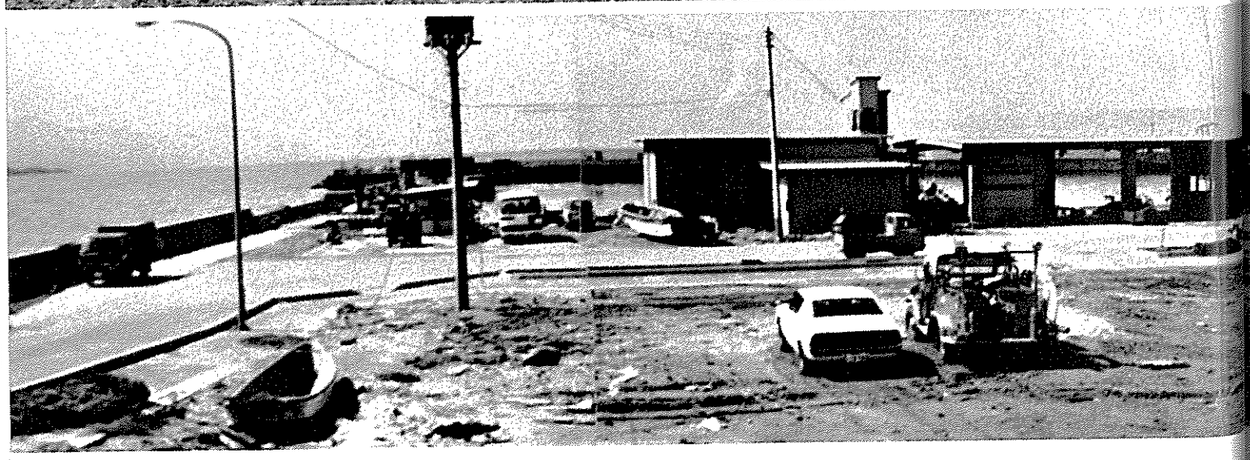
■資料編　101〜124

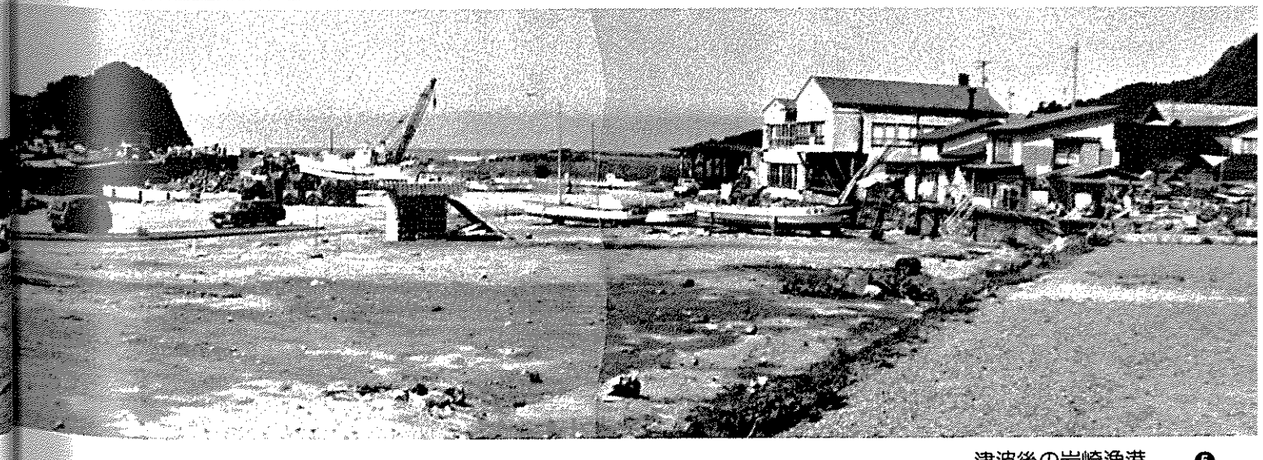


津波襲来時の岩崎漁港

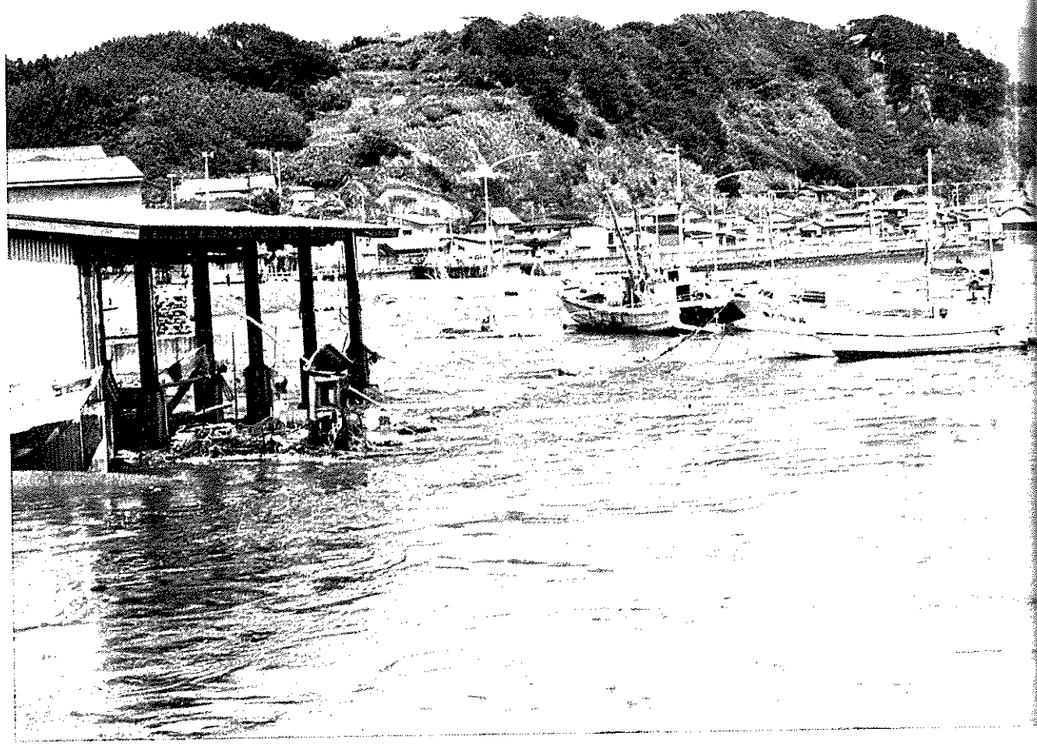


波高は6メートルにも及び岩崎漁港の防
波堤を越えて船や自動車を呑み、その余
波は陸に船を押し上げ、民家を襲った

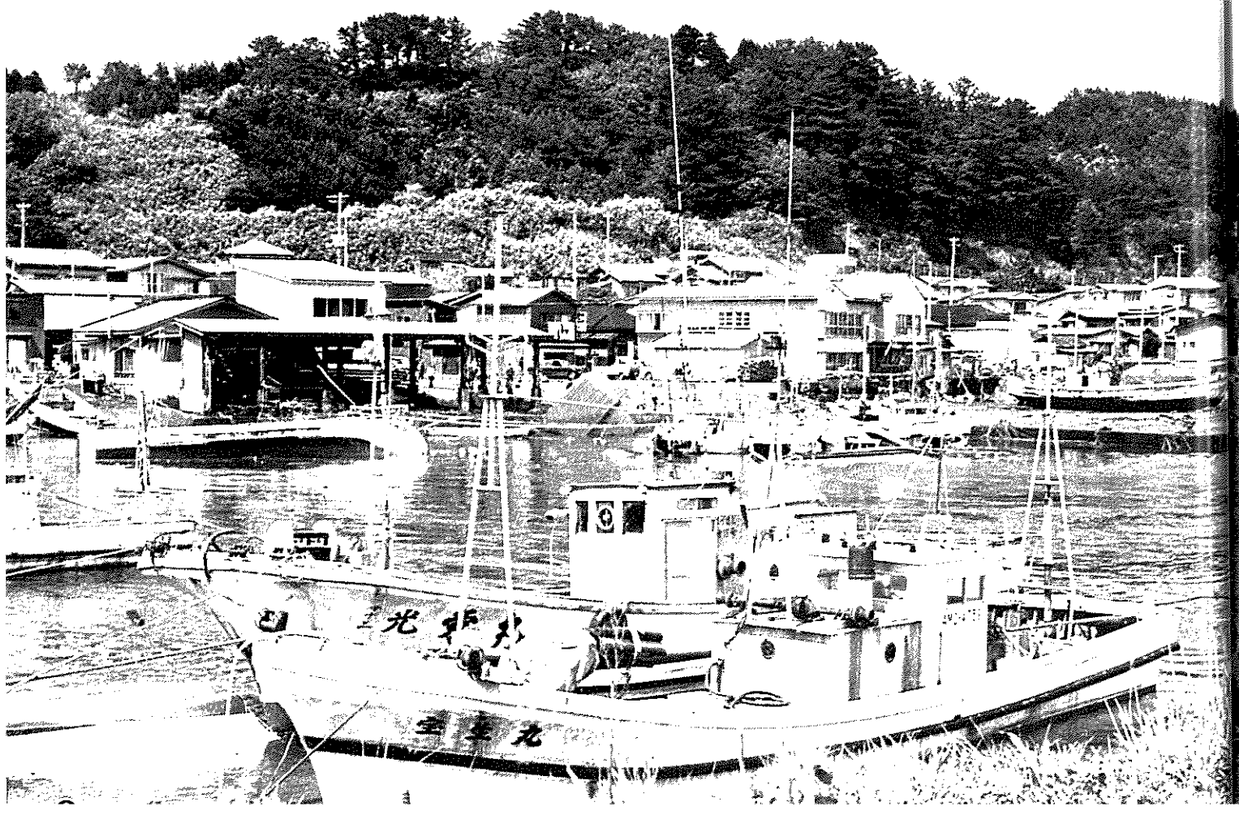




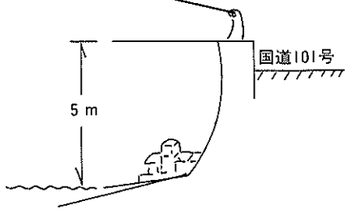
津波の脅威



岩崎漁港



落差

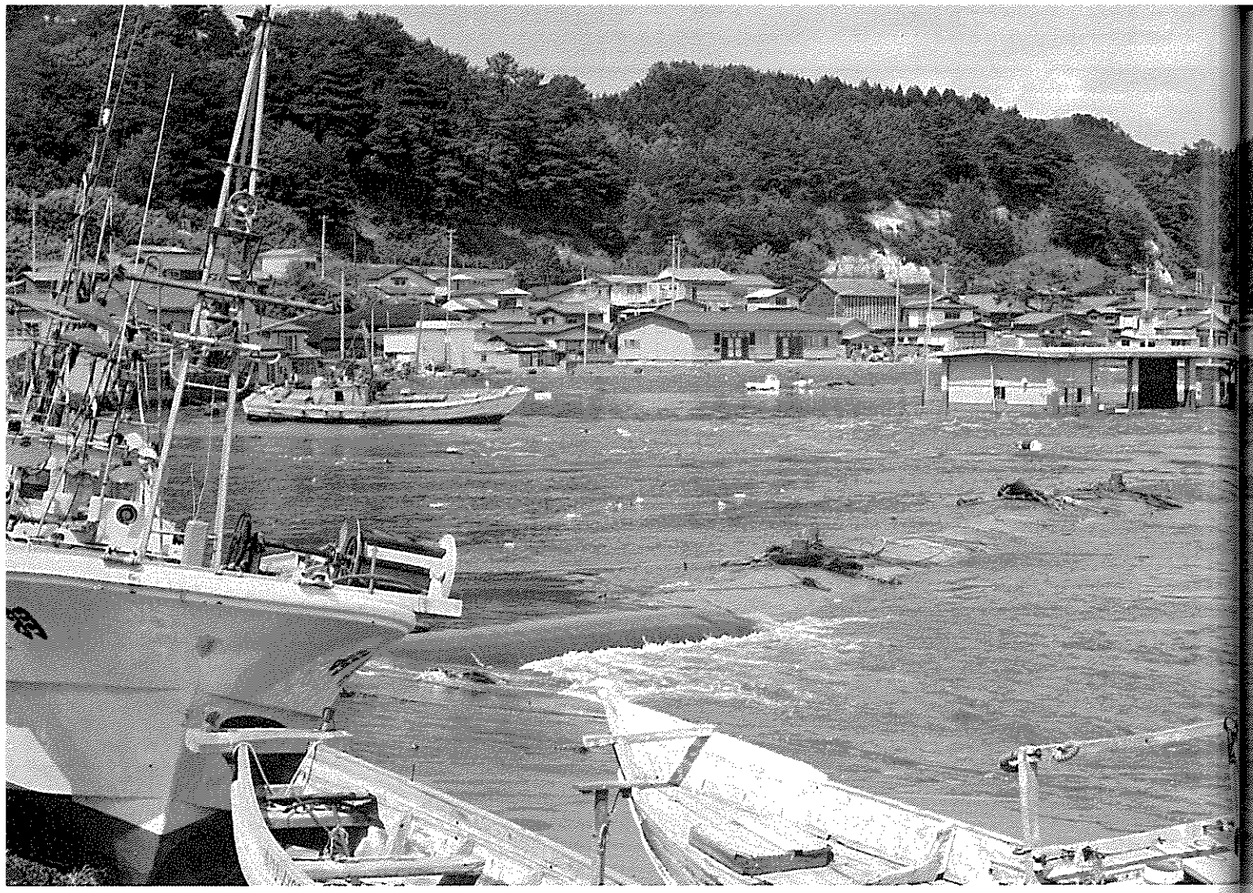


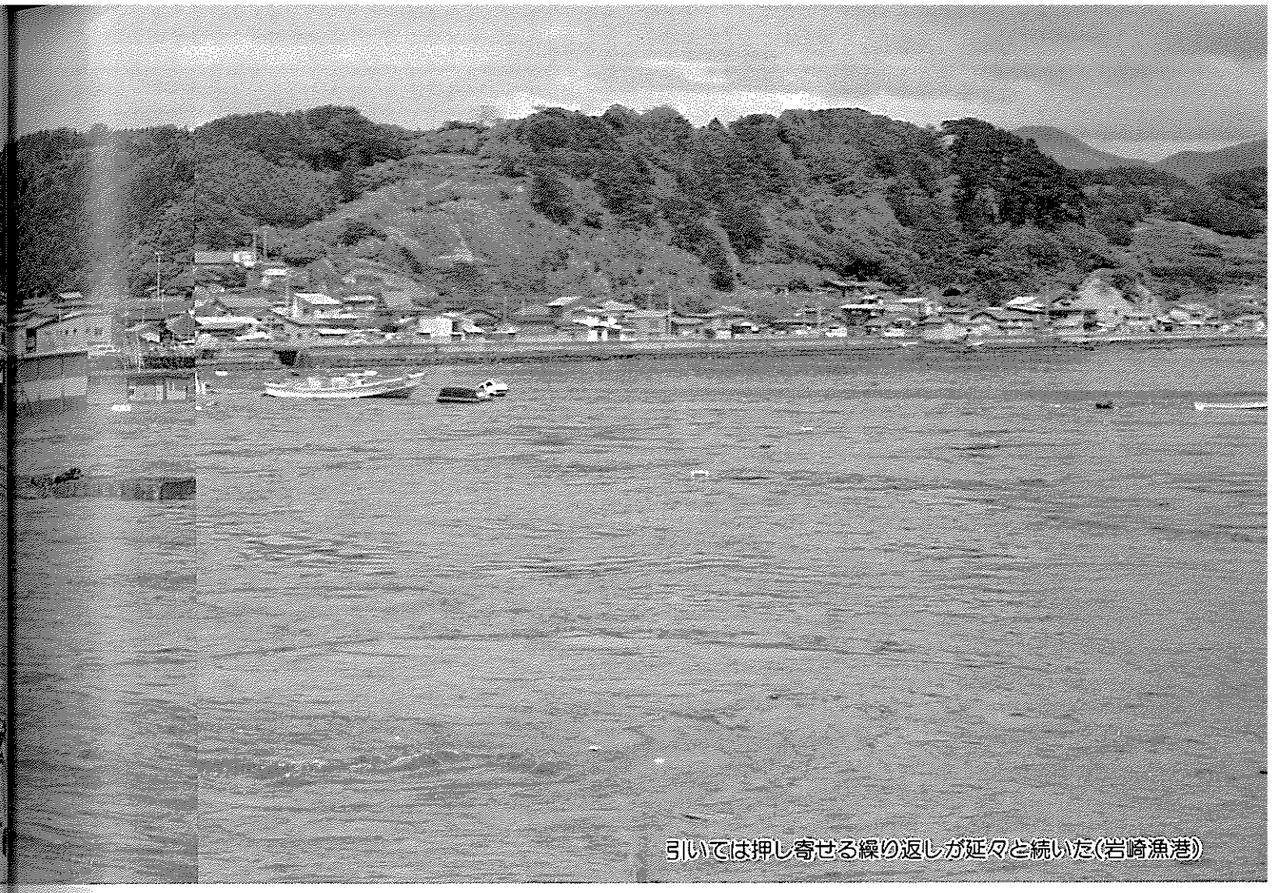
7メートルの防潮堤を越え国道101号線へ怒濤が入りこむ(岩崎)

引潮が始まった。そしてさらに7分後、二次津波となって岩崎沿岸一帯を荒れ狂った(岩崎)

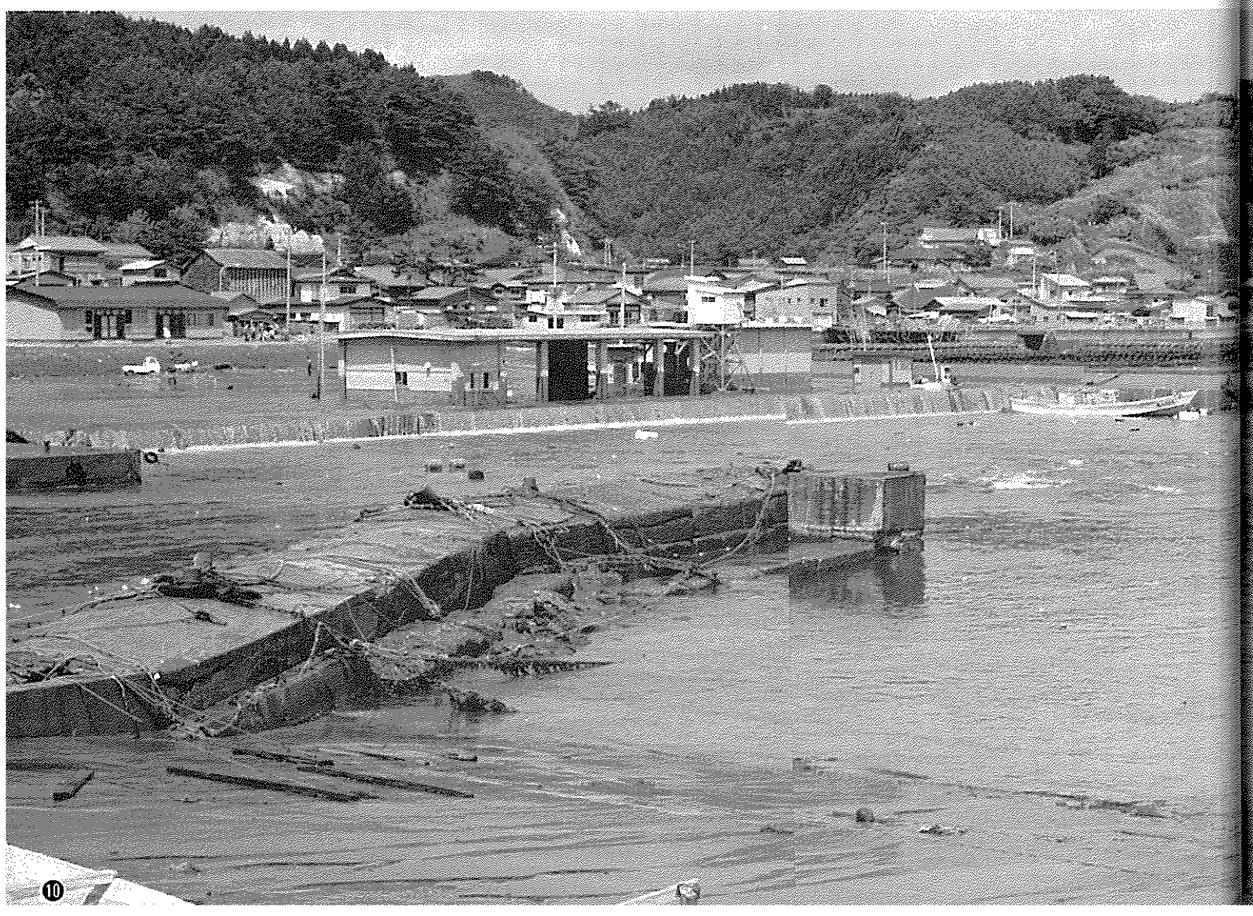
←平常水位

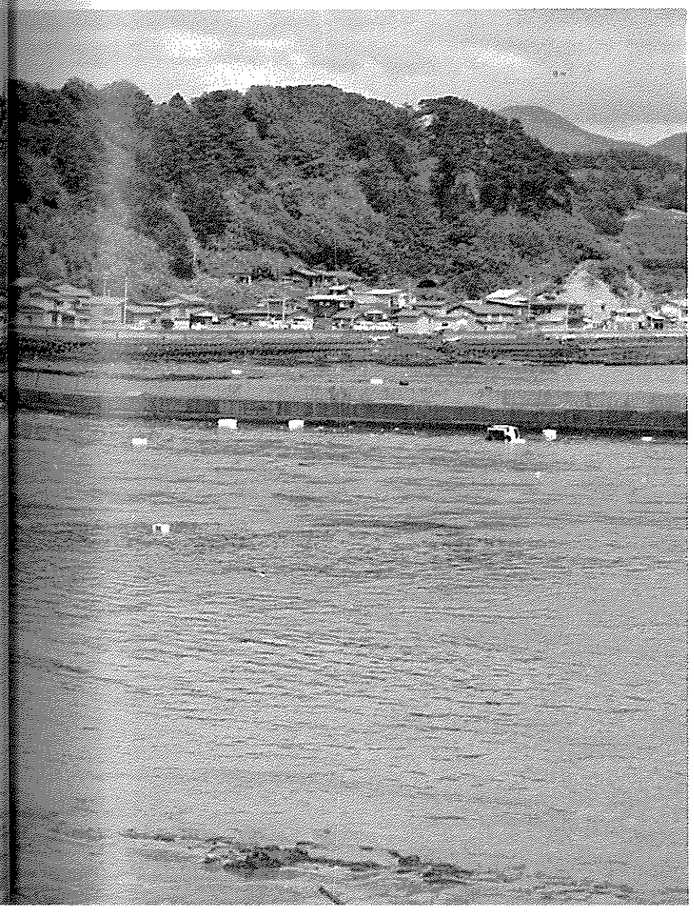
引潮時





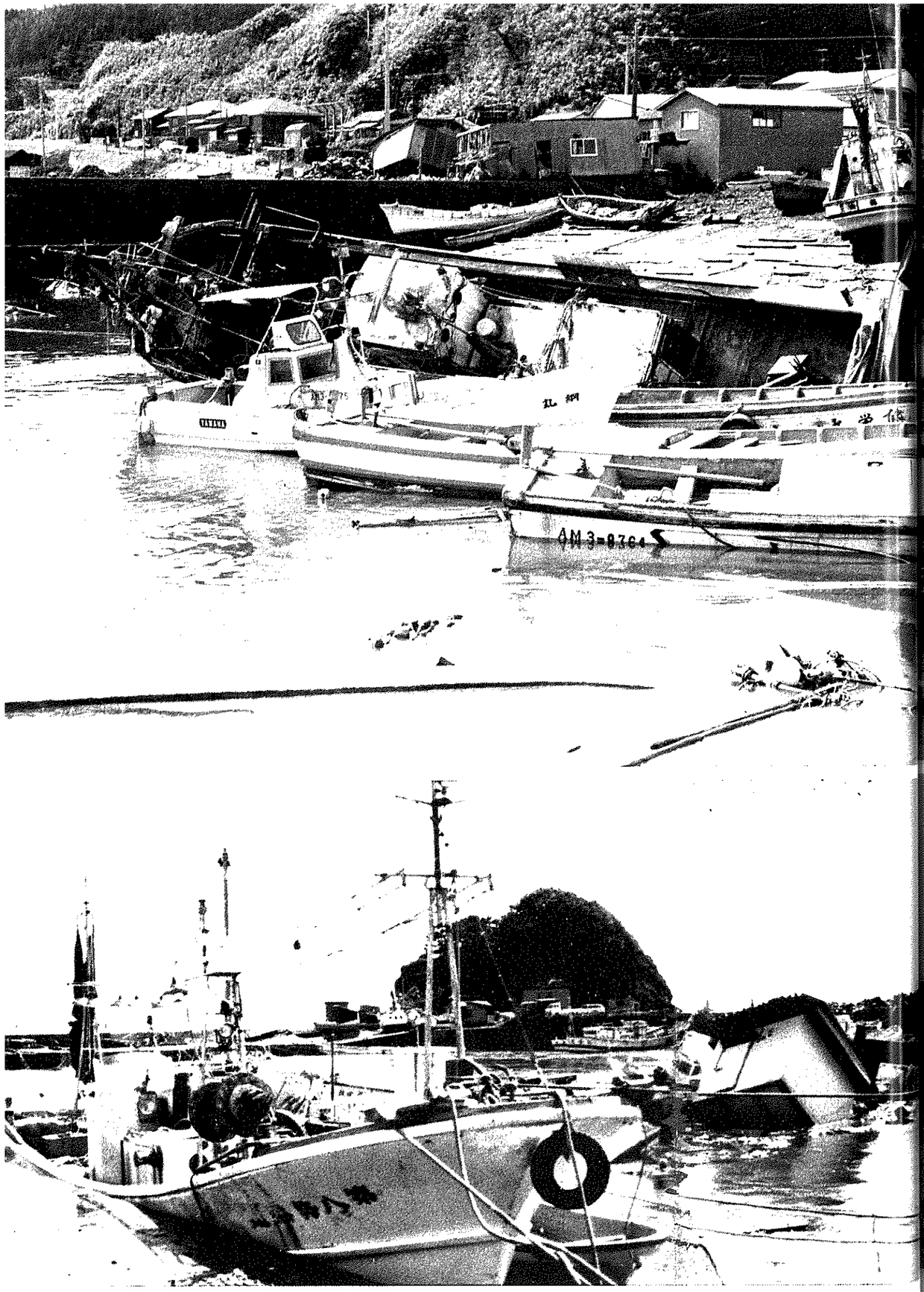
引いては押し寄せる繰り返しが延々と続いた(岩崎漁港)





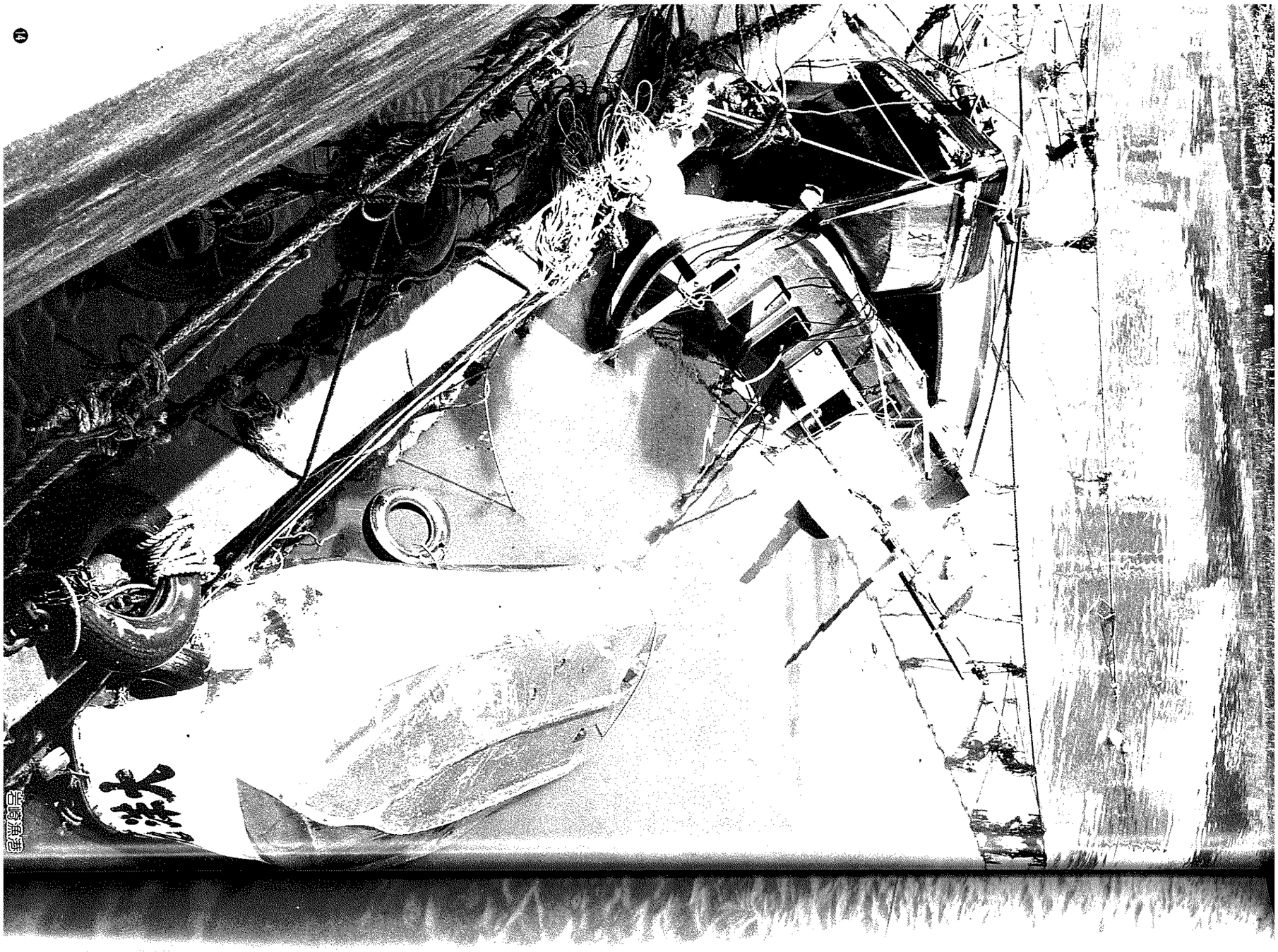
被害状況

漁船被害	66隻
●滅　失	16隻
●流　失	20隻
●破　損	30隻



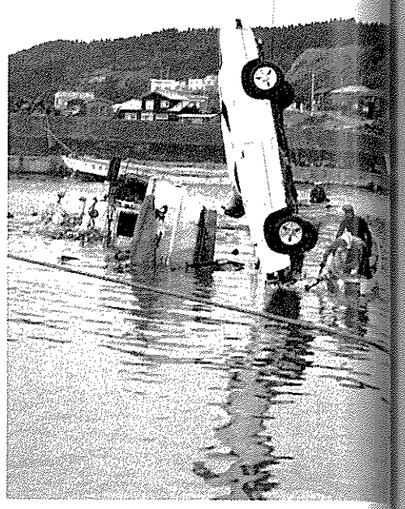
岩崎村漁業協同組合の冷蔵庫も海上を浮遊

漁船の状態から津波のエネルギーの
大きさが推測される(岩崎漁港)



14

15



傾いた小屋・破壊された漁船・車のあとかたづけを急ぐ人々（岩崎漁港）

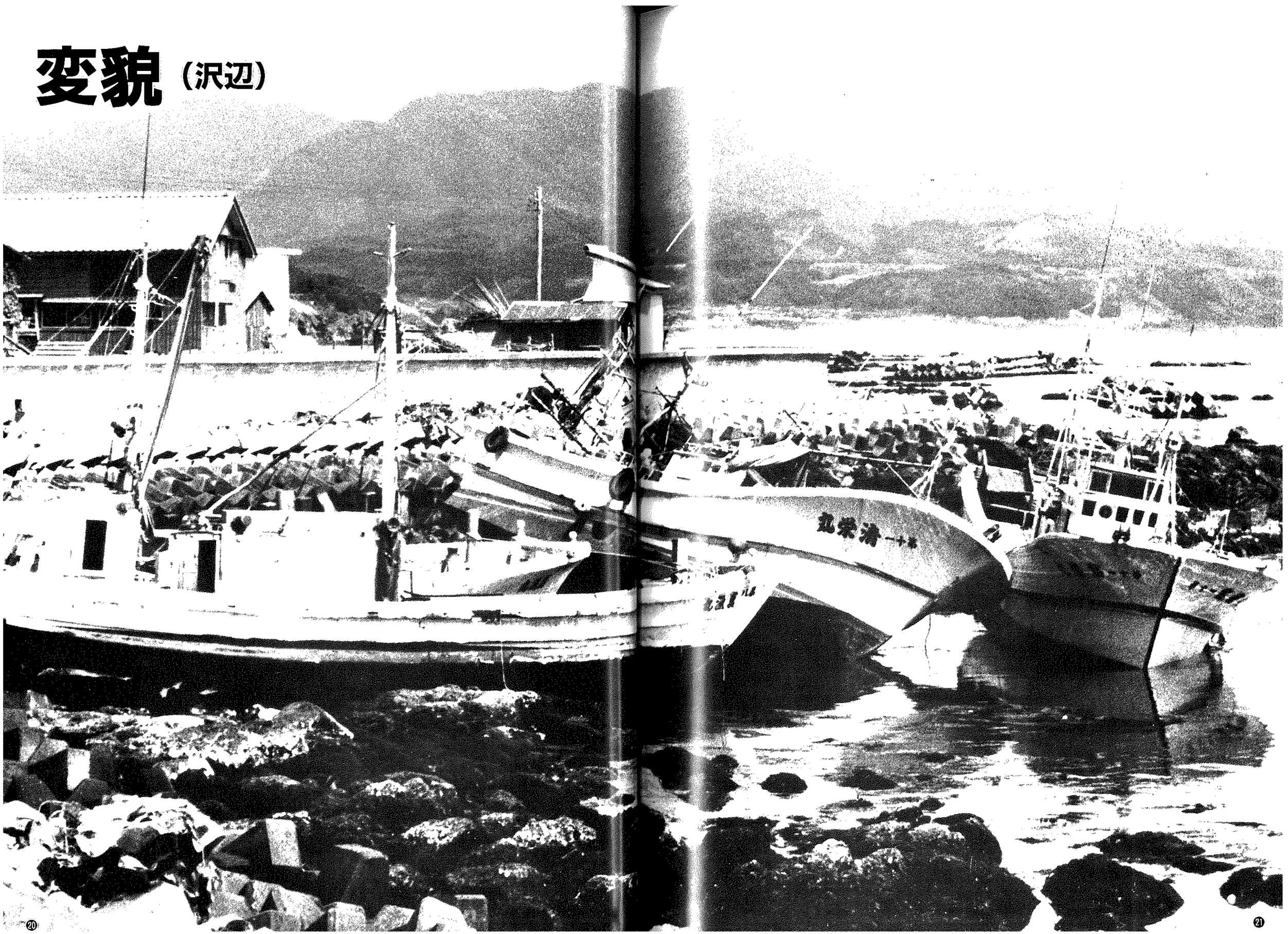
津波にはぎ取られた漁港内の舗装道路（岩崎漁港）

コンクリートの岸壁も崩壊（岩崎漁港）

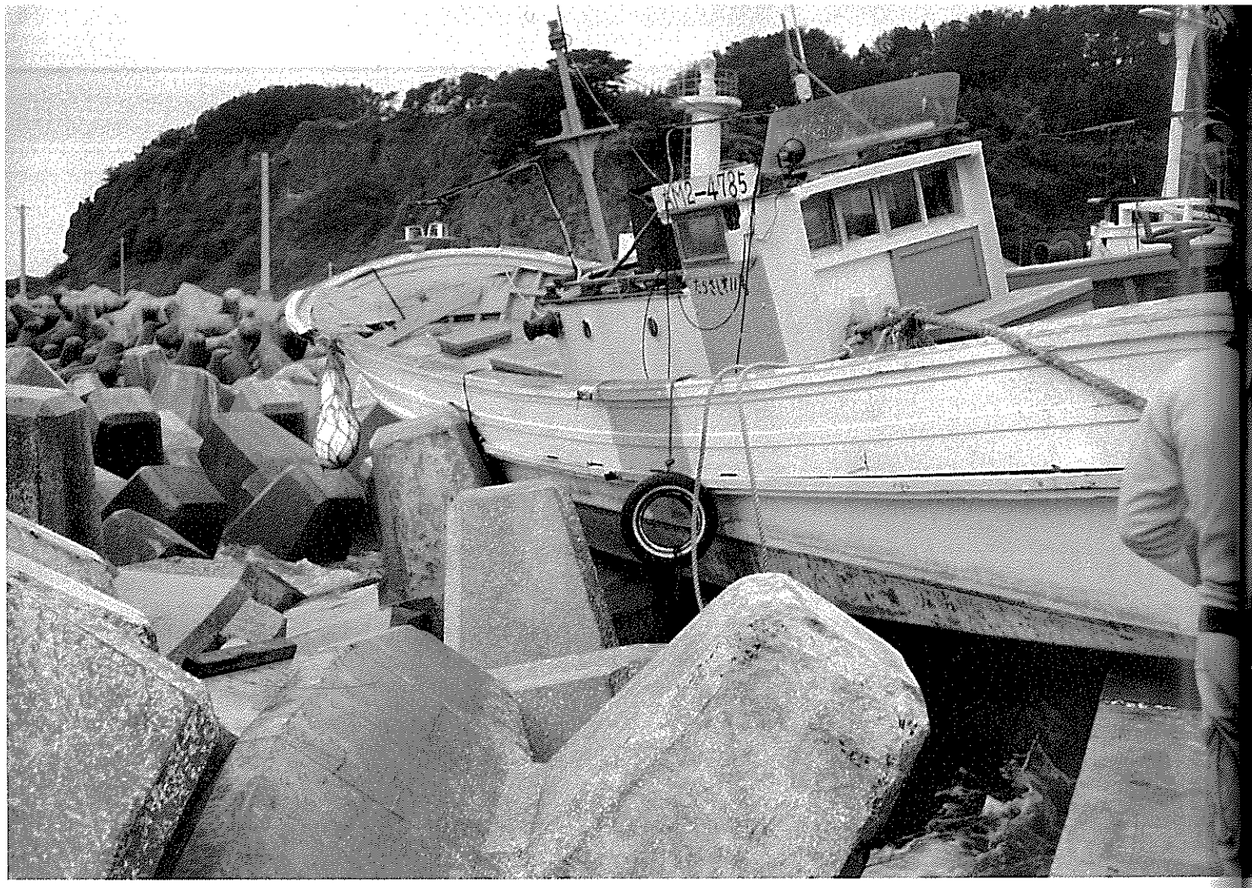
トラック横転（岩崎漁港）

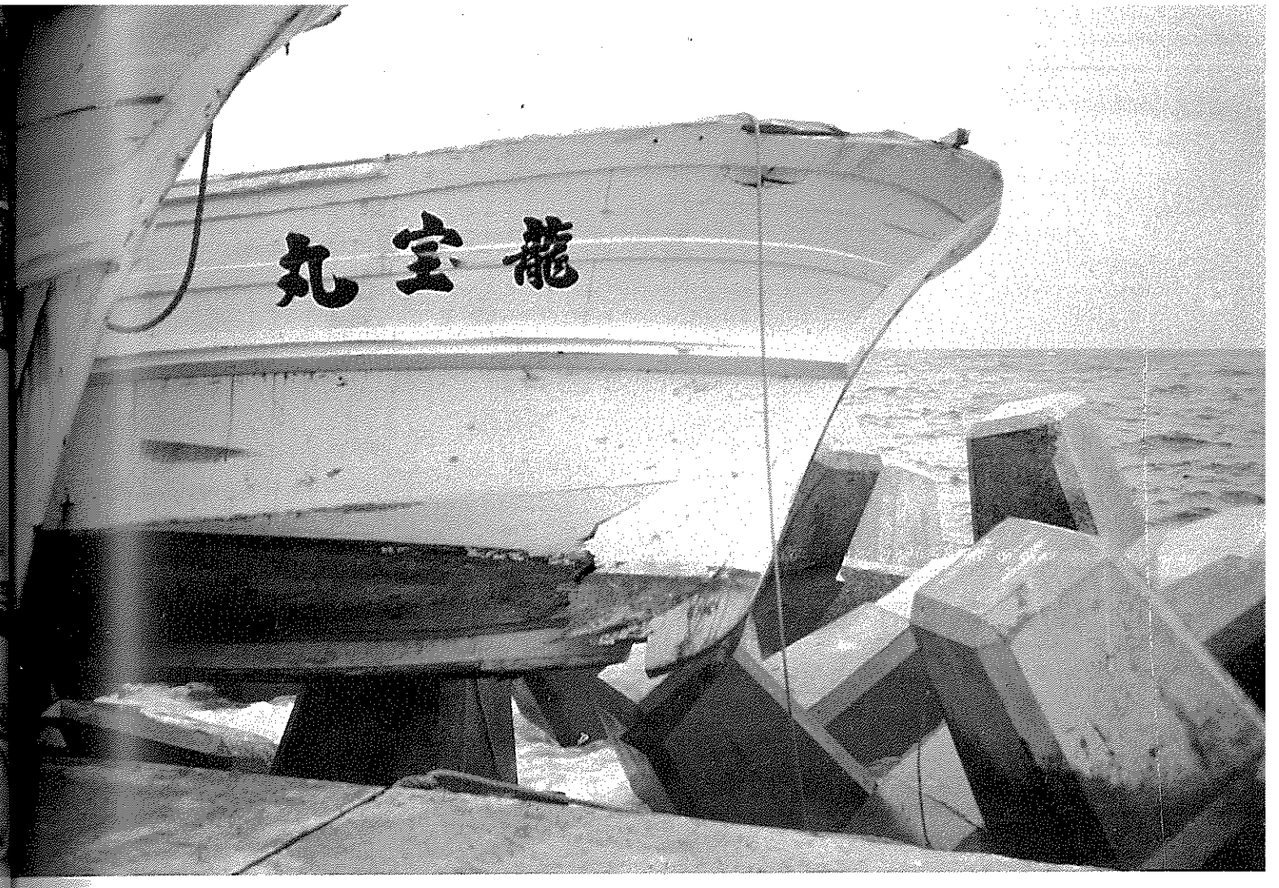
漁港敷地内に打上げられた漁船（岩崎漁港）

変貌（沢辺）

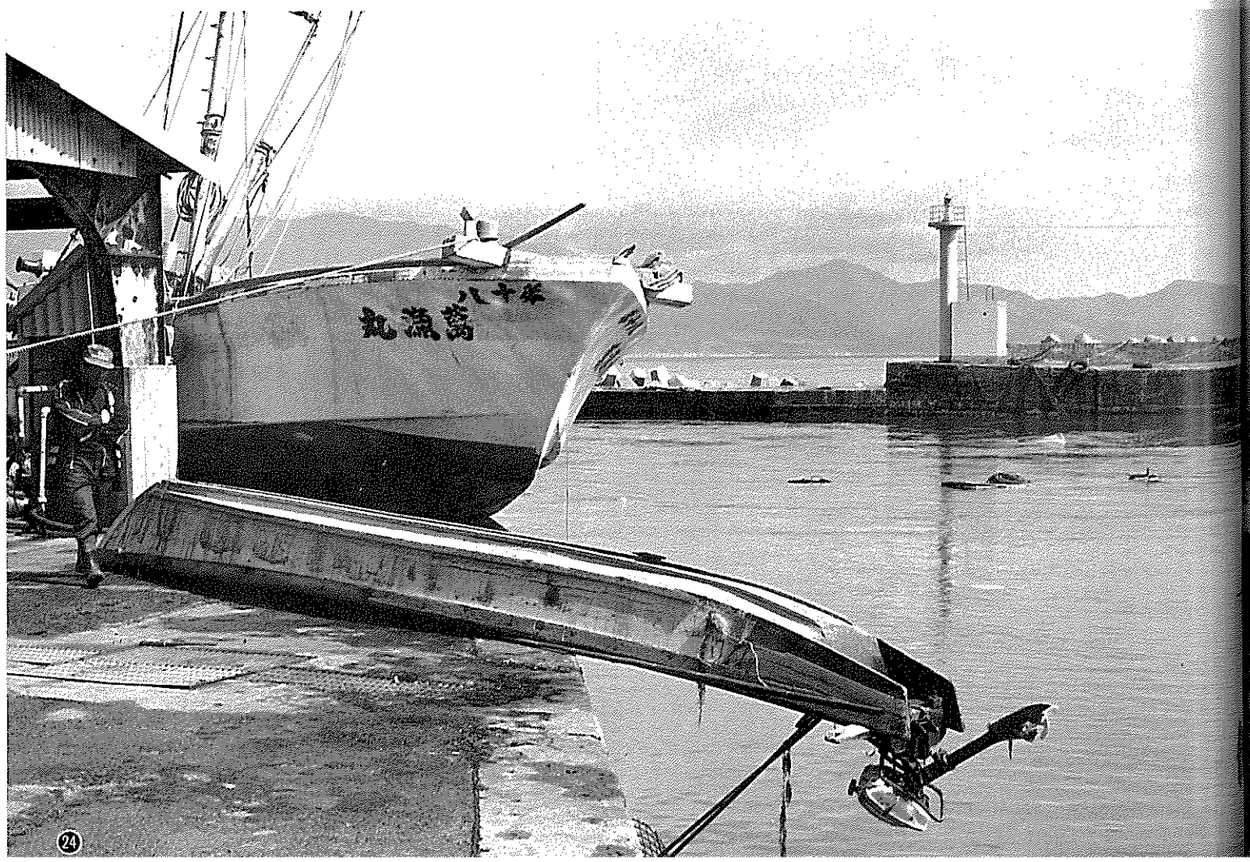


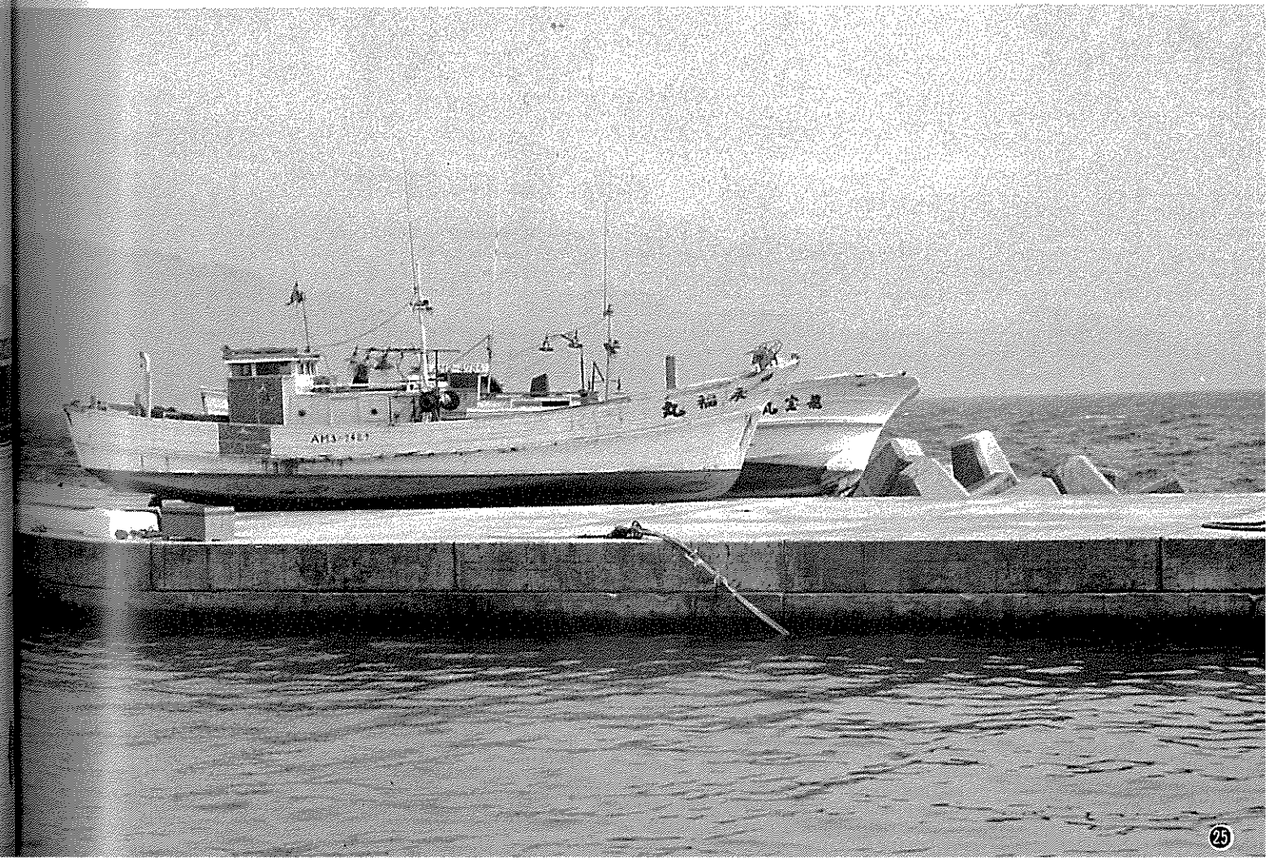
寸前ノ　船が岸に車が海中へ……（沢辺漁港）

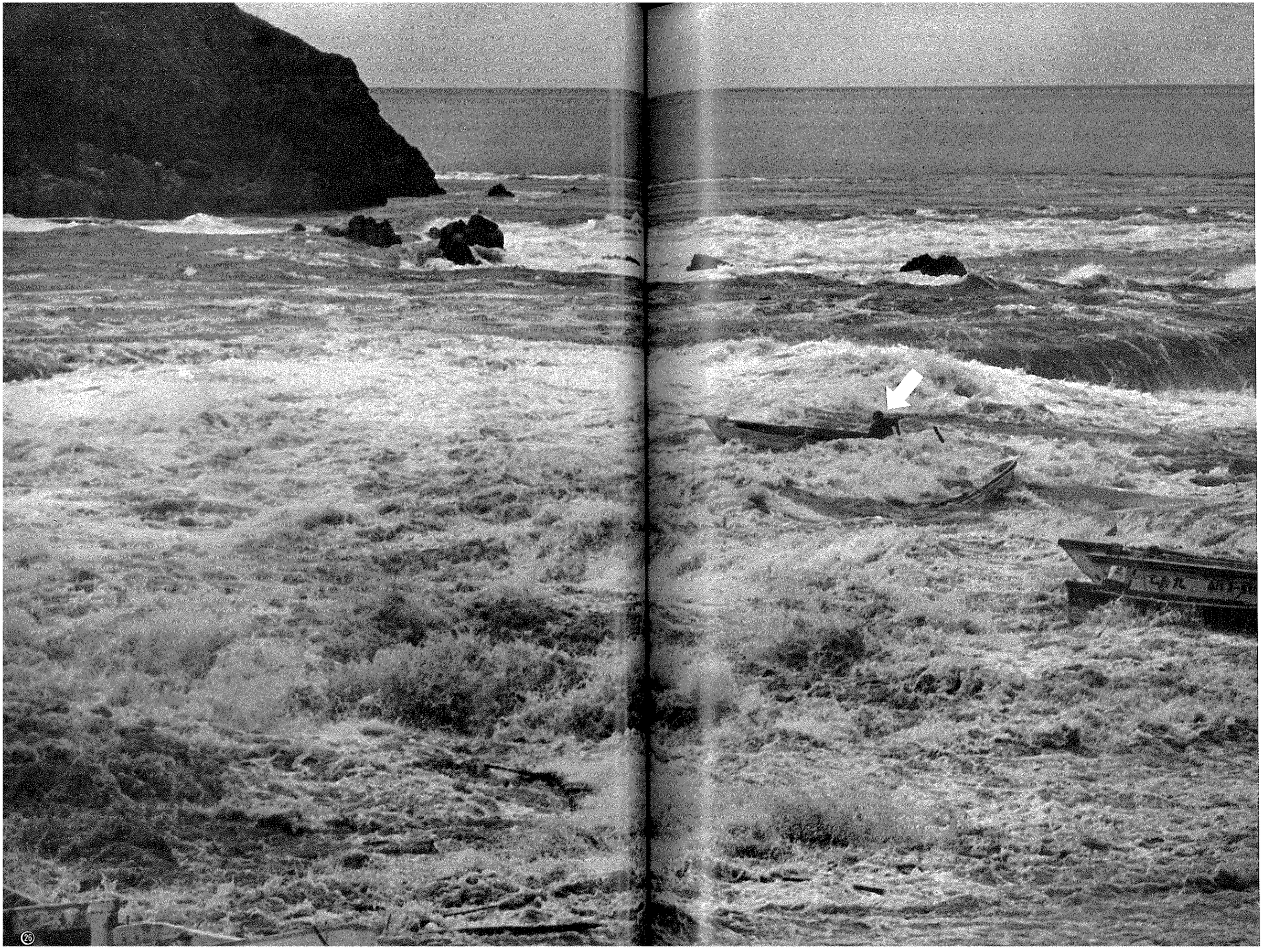




港内から防波堤や　テトラポットに!!（沢辺漁港）

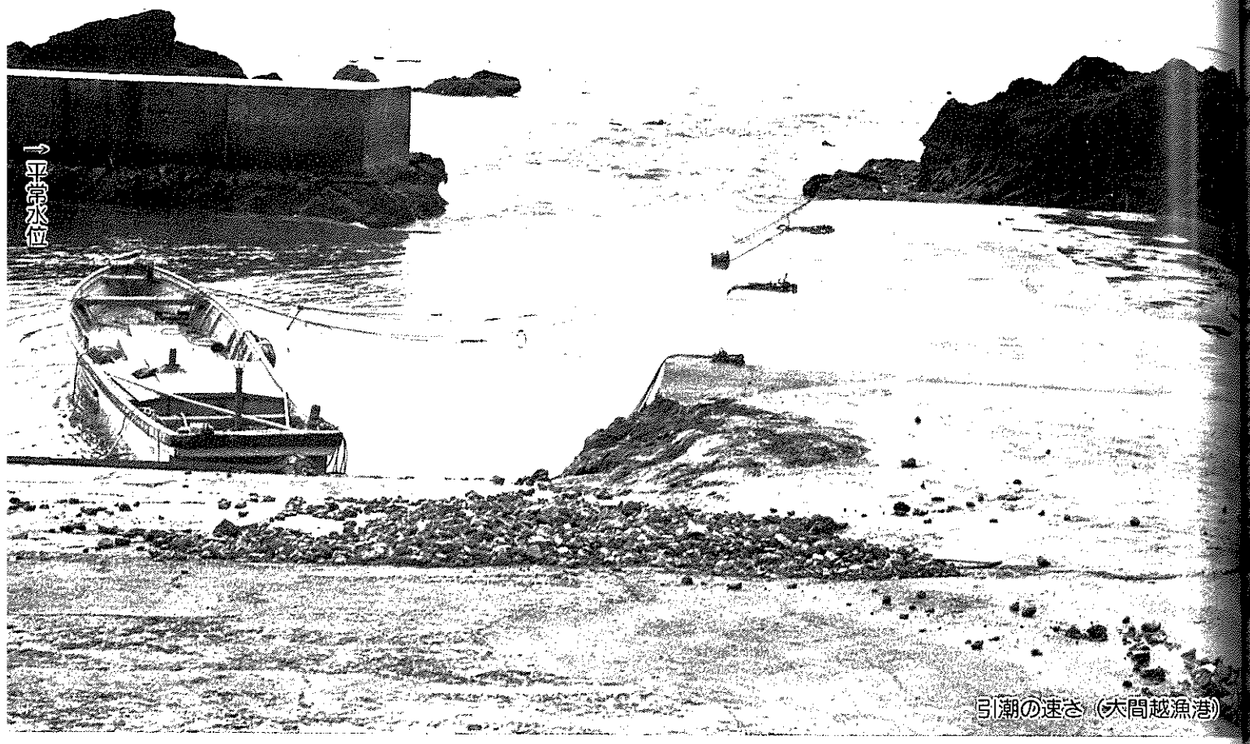






あっ！ 津波が漁船を人を（森山漁港）（⇩印の人は無事救出された）

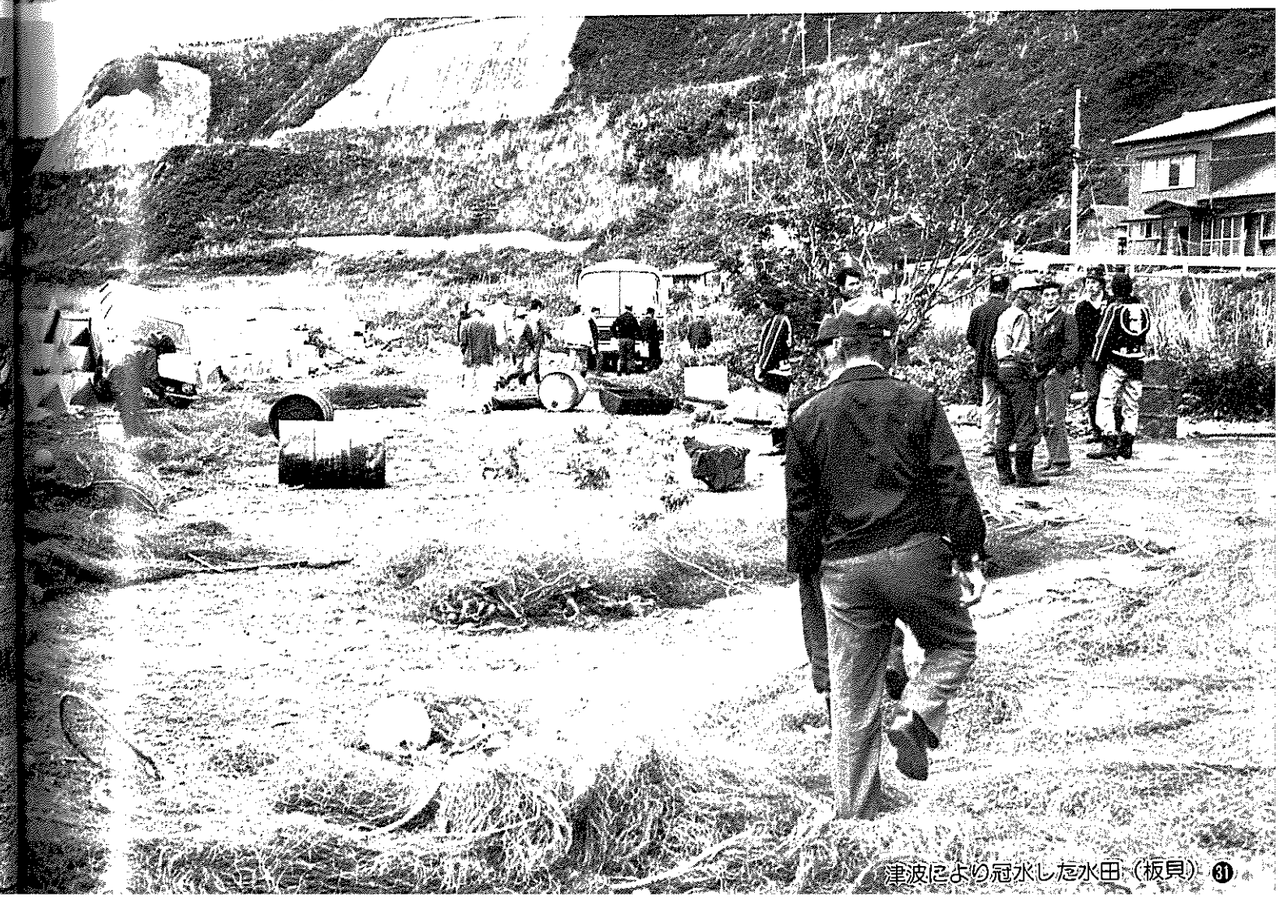
津波襲来（森山漁港）



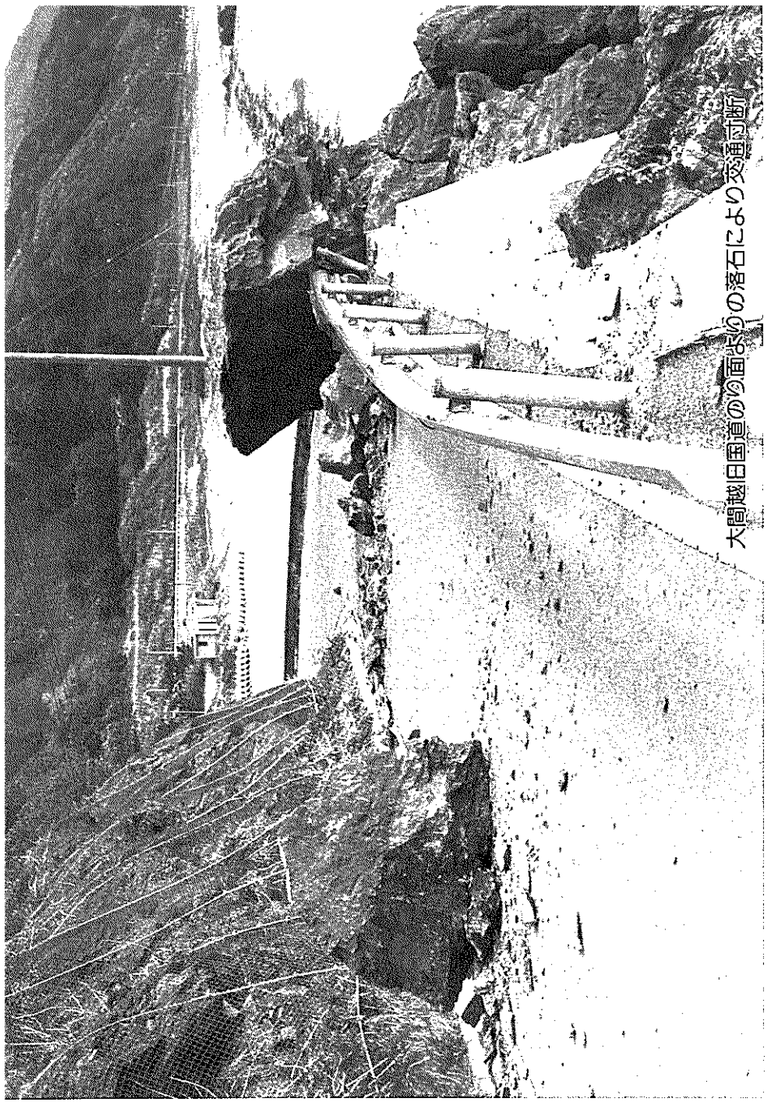
引潮の速さ（大間越漁港）

津波に破壊された小屋（木蓮寺）

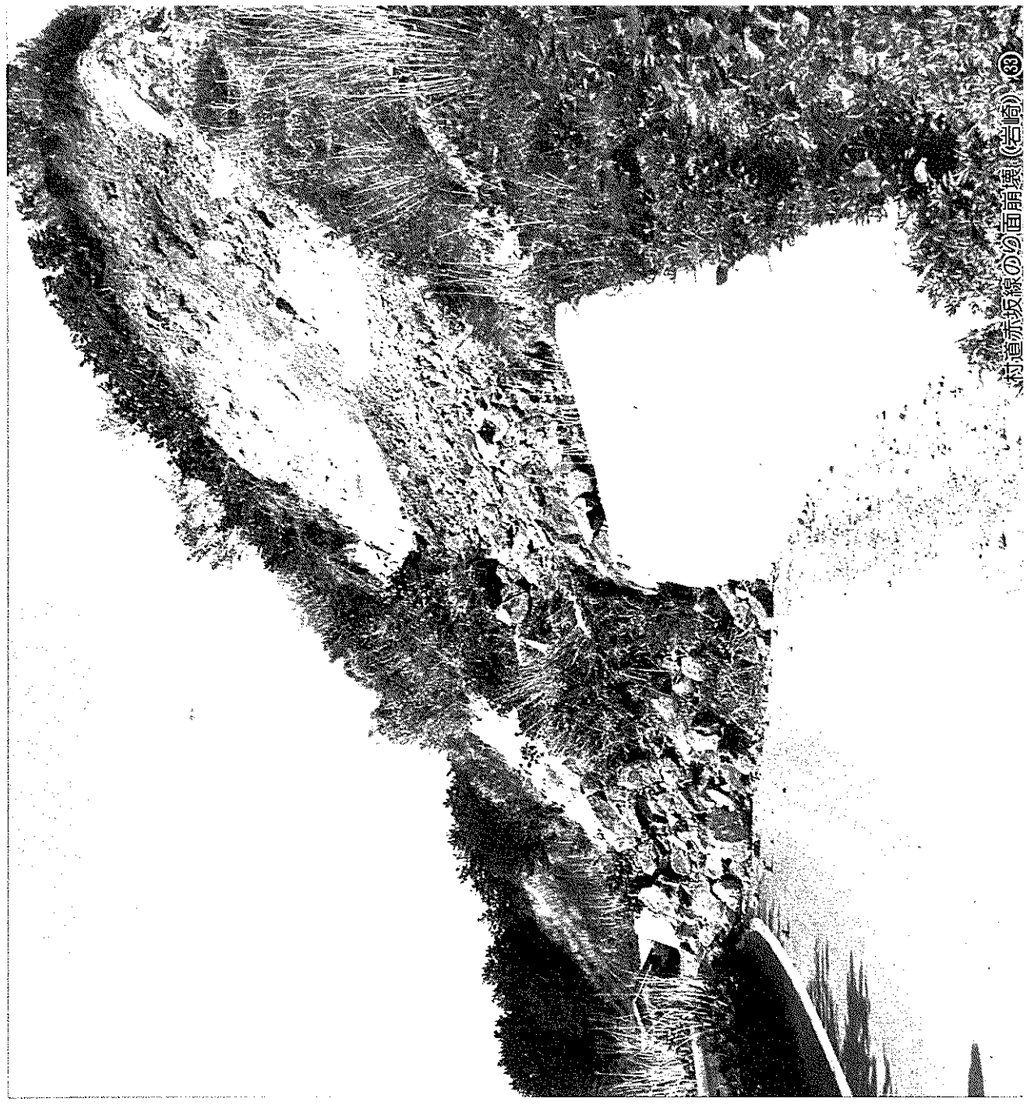
津波によりテトラポットに打ち上げられた釣人の車（板貝）



津波により冠水した水田（板貝）



大間越旧国道のり面よりの落石により交通可断



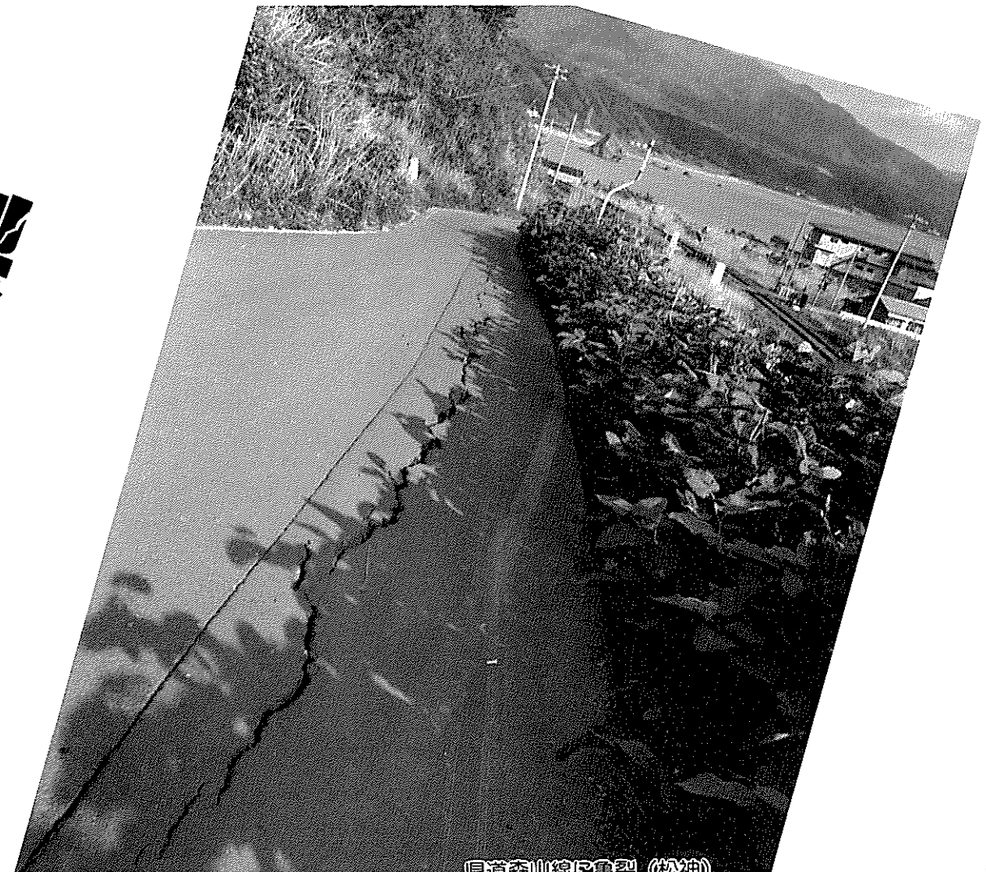
村道赤坂線のり面崩壊(岩間)㊸

路肩と亀裂の入った村道中学校線(正道沢)㊷

村道学校線のよう壁に亀裂（岩崎）

村道仁瀬線各所に亀裂（岩崎）

農道白神平線の亀裂（大間越）



県道森山線に亀裂（松神）

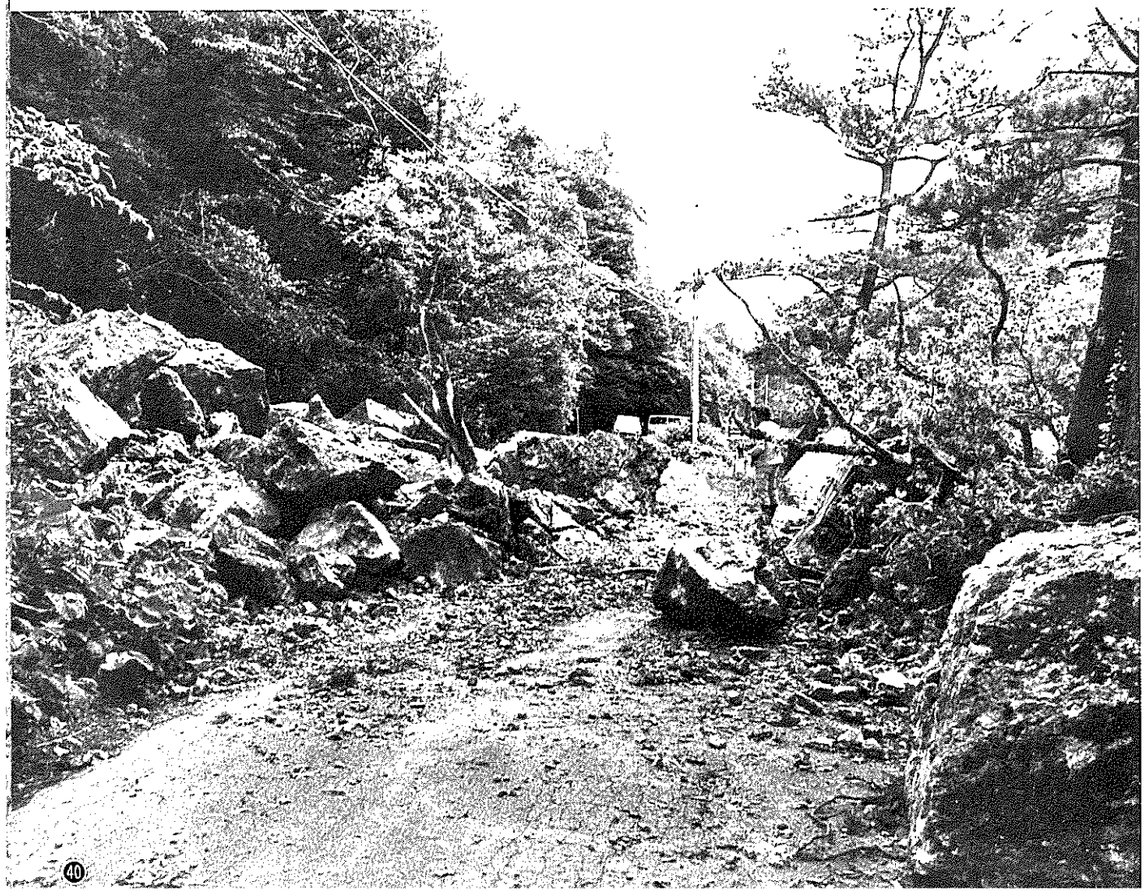
十二湖・欠壊

県道十二湖線無数の亀裂・落石・路肩欠壊により通行不能となる

落石のため交通遮断

無数に亀裂が走る

交通を阻まれた観光客

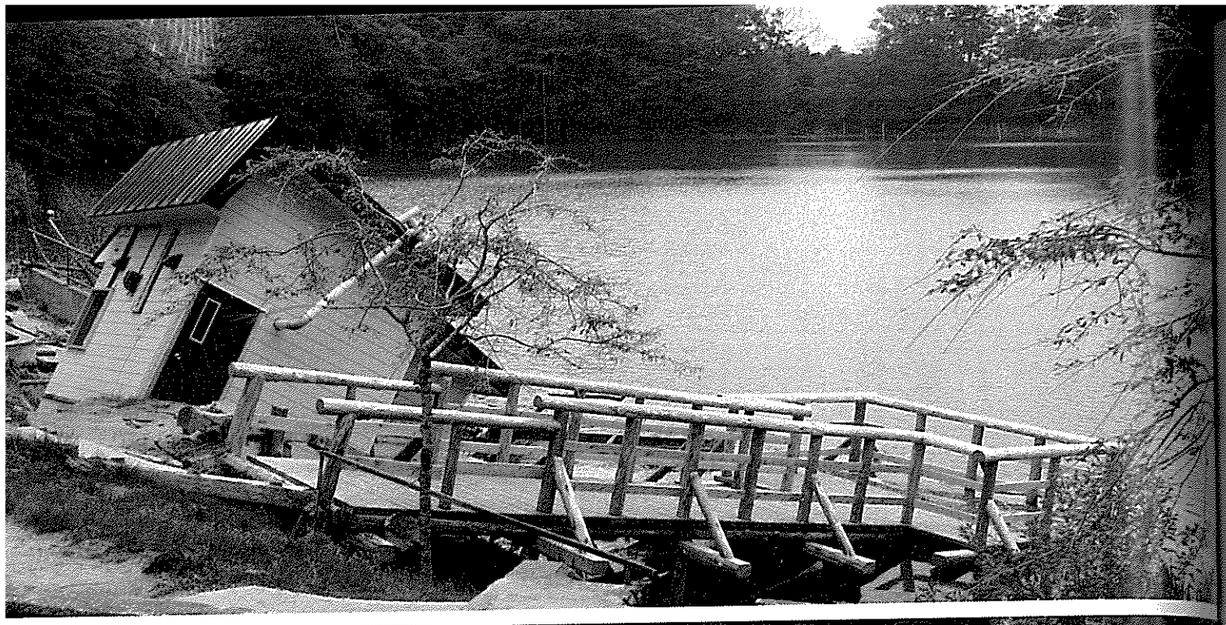


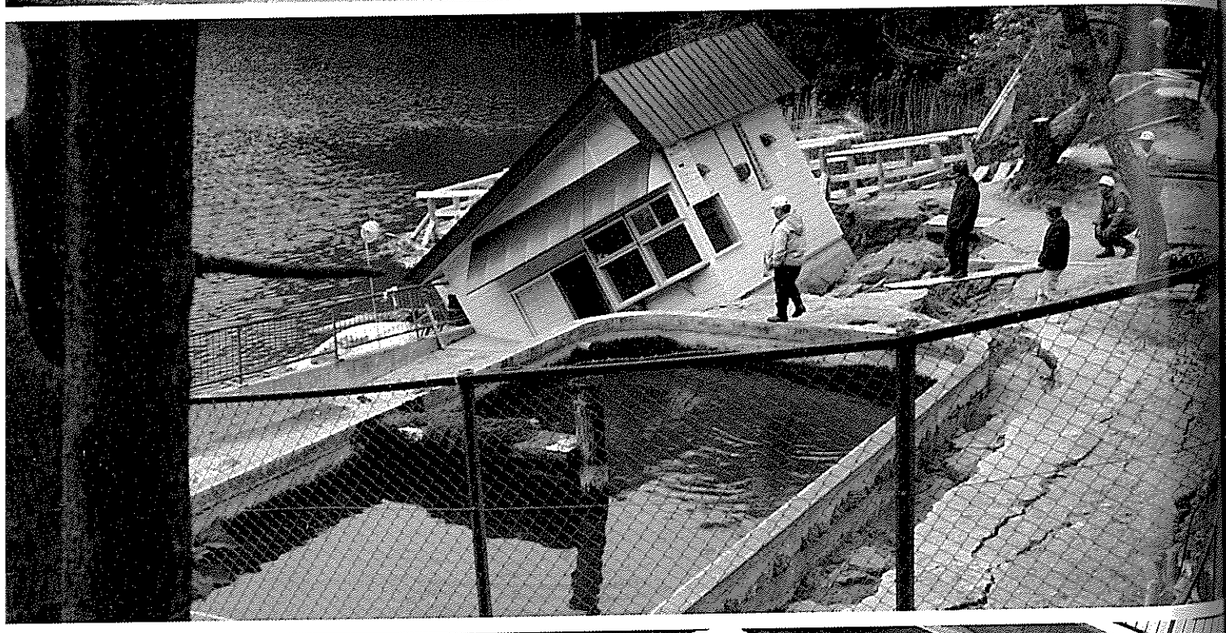
交通が遮断された道路

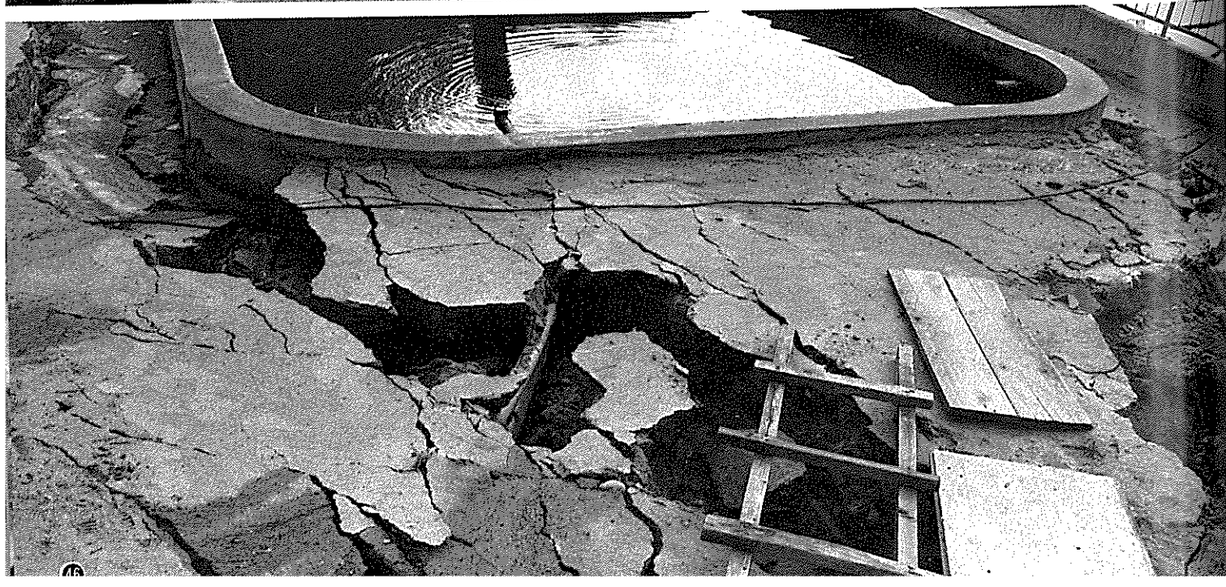
管理棟・釣り堀・大打撃

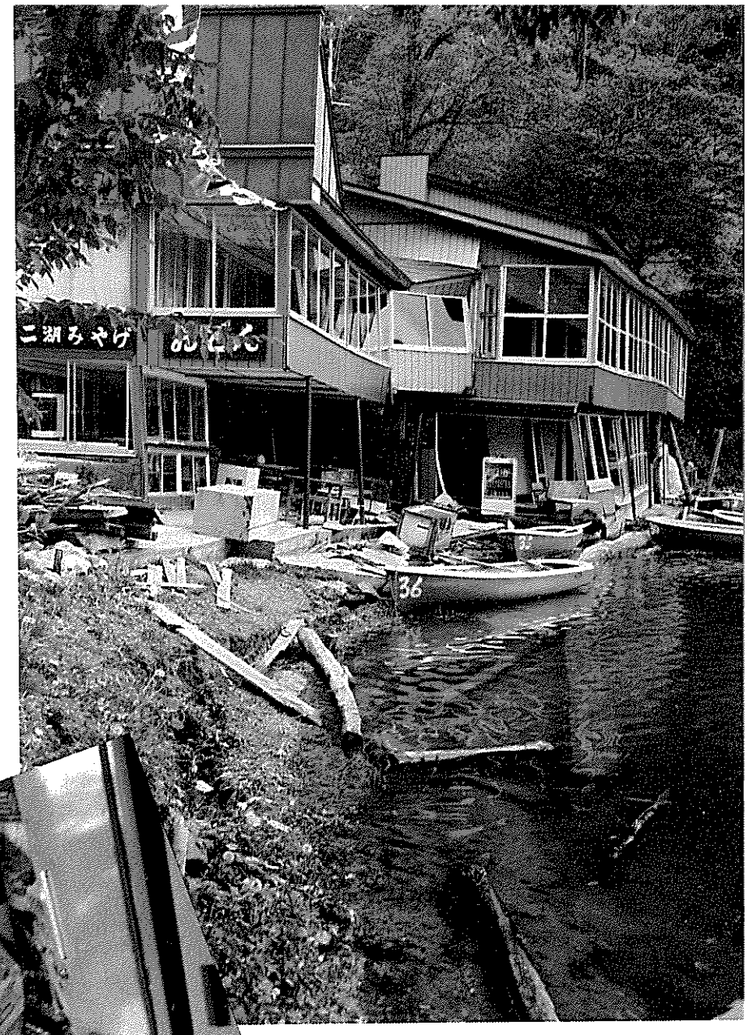
落口の池・オームリ　展示室破壊される

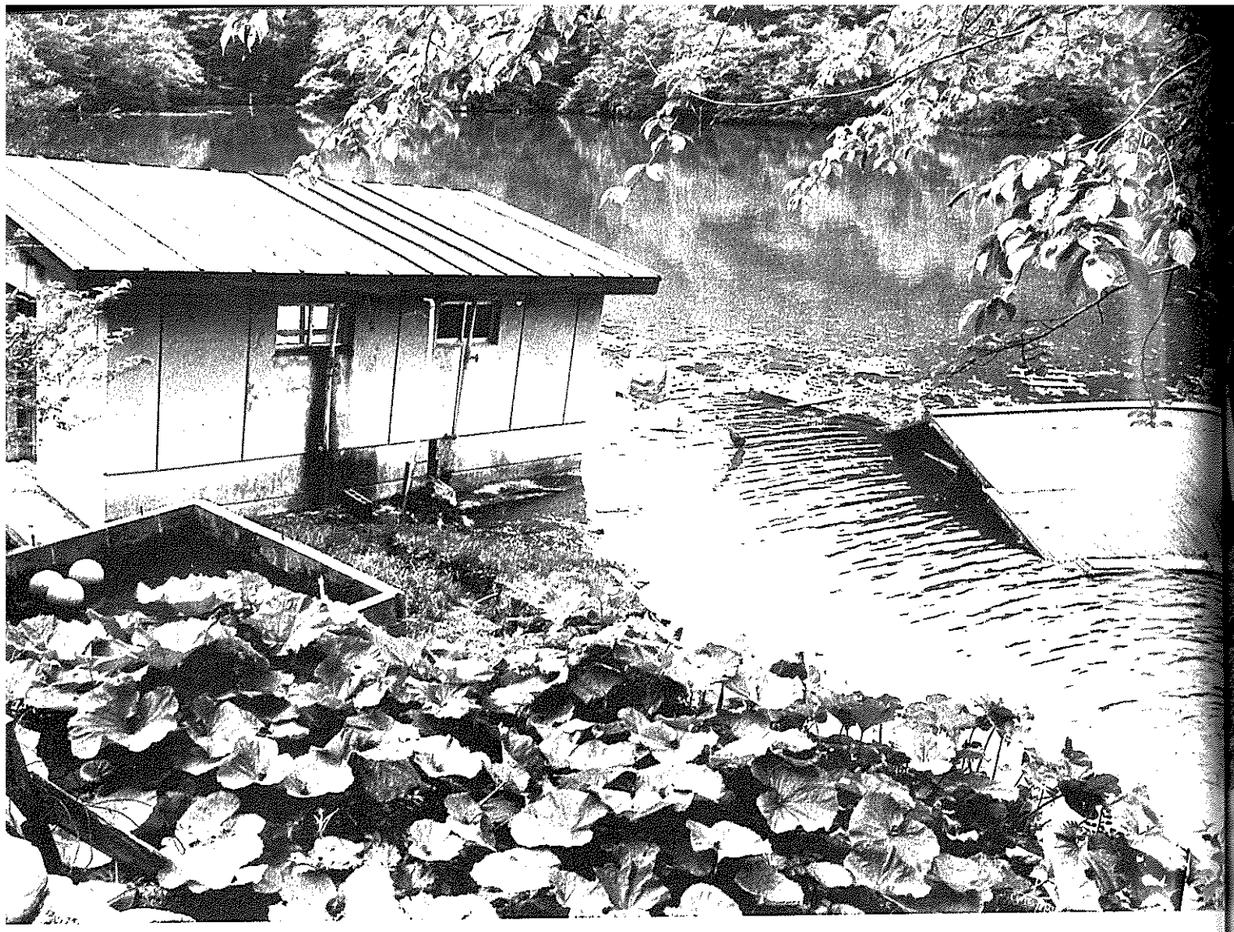
十二湖の各施設は特に被害が大きかった



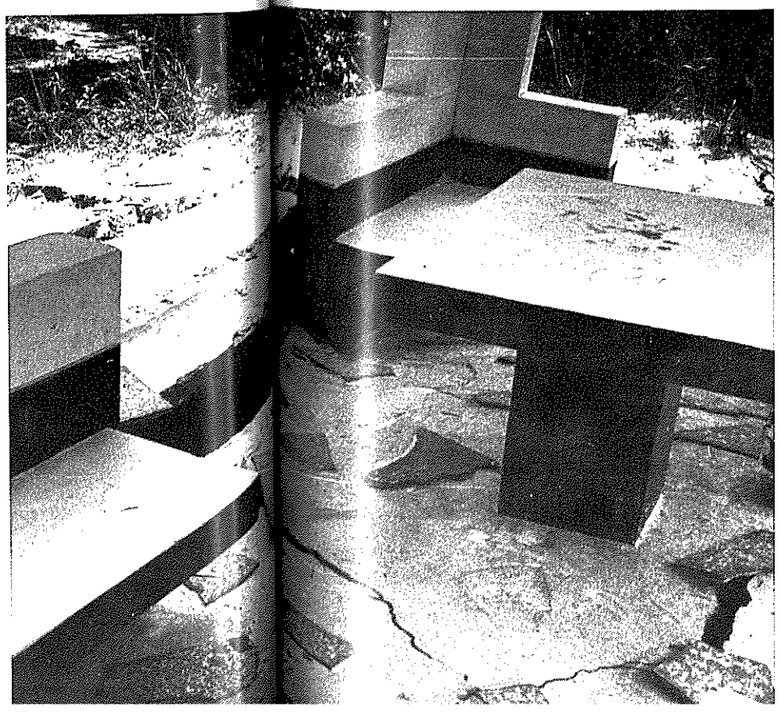


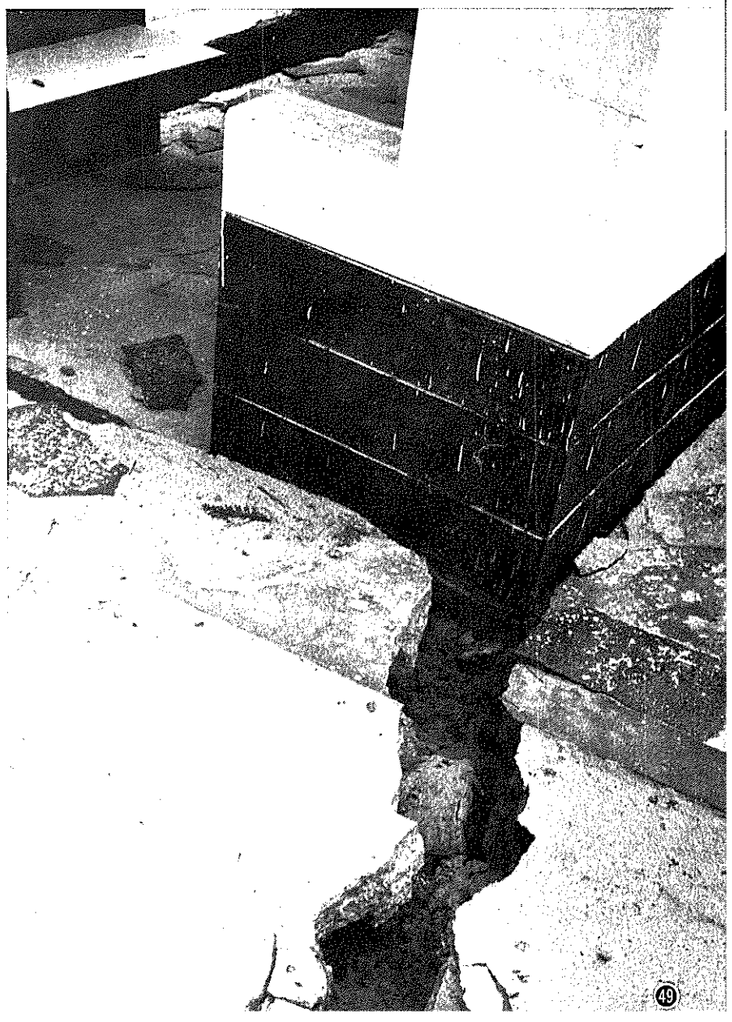




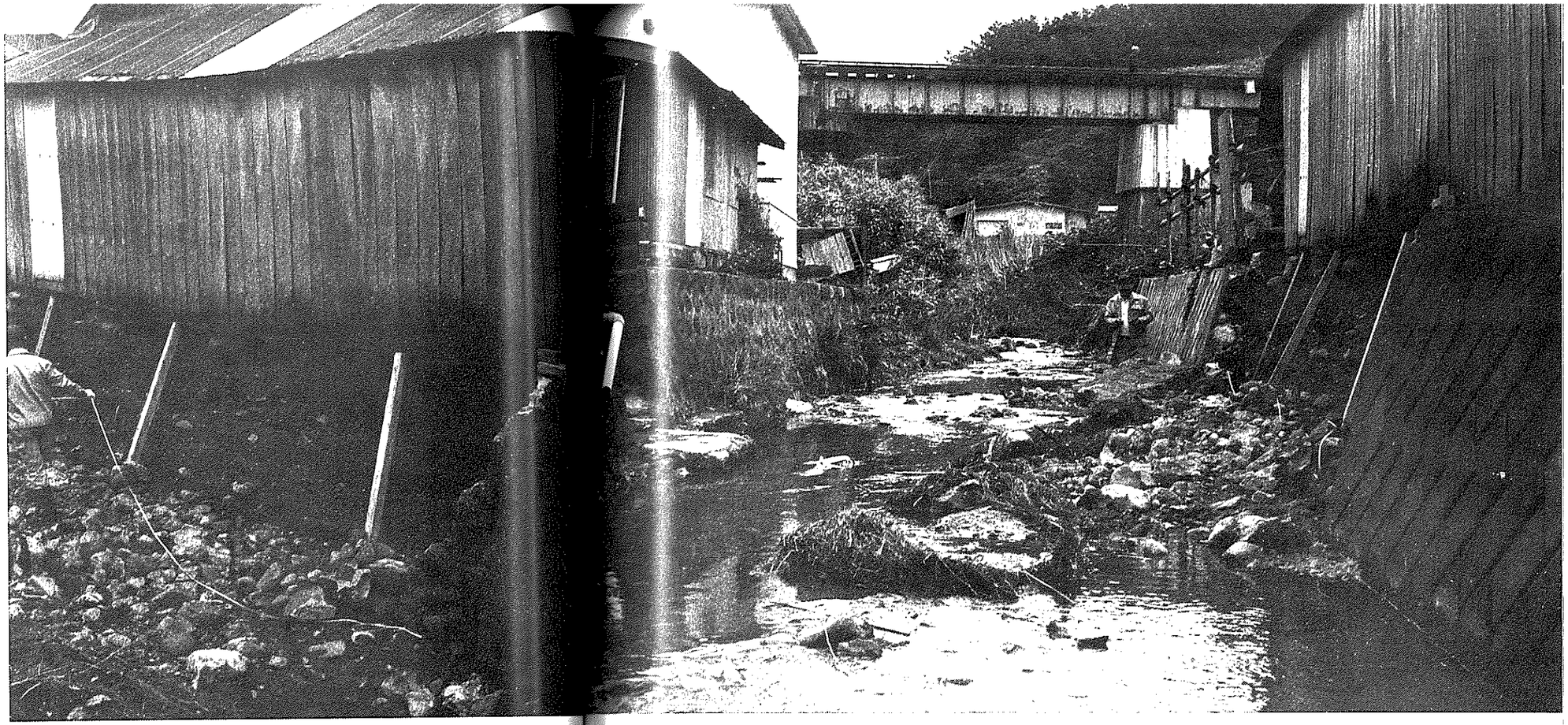


十二湖の観光施設も被害が甚大であった





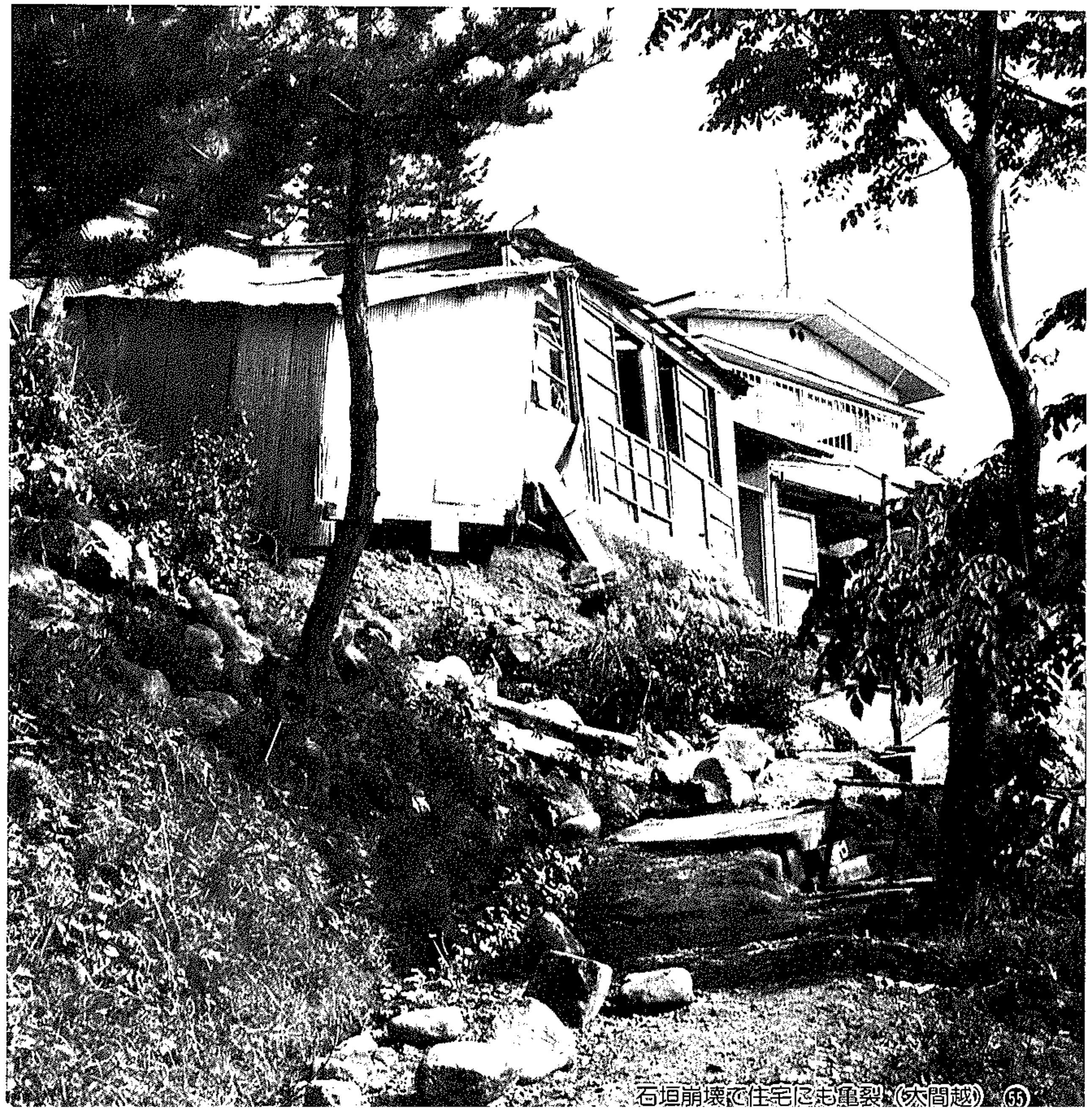
地震と川に逆流した津波によって削りとられた護岸（岩崎）



国鉄五能線
運行不能
（22日間運休…岩崎）

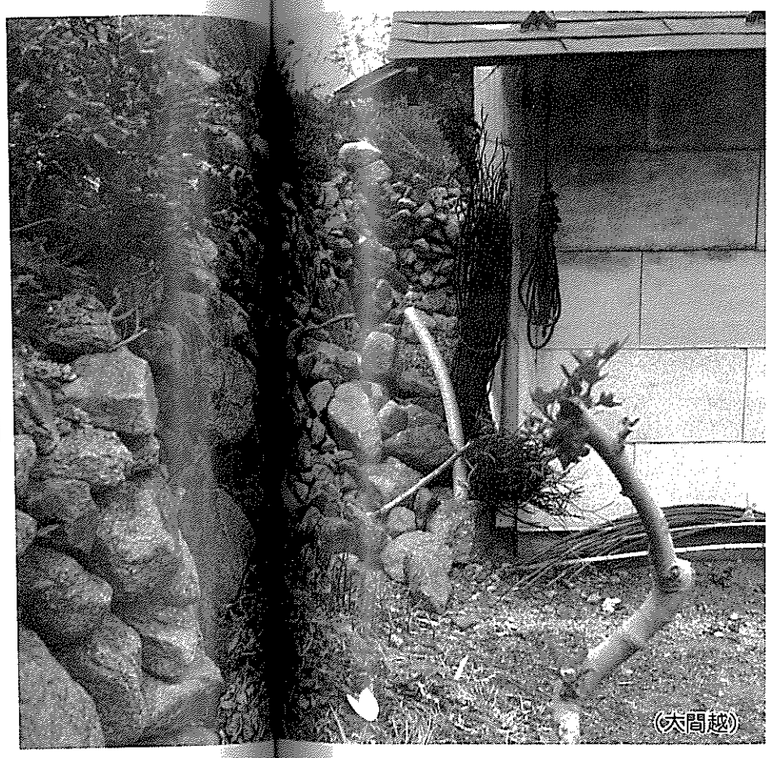
民家の屋根を突き破り寝室に落下した70㎝の大きい石（岩崎）

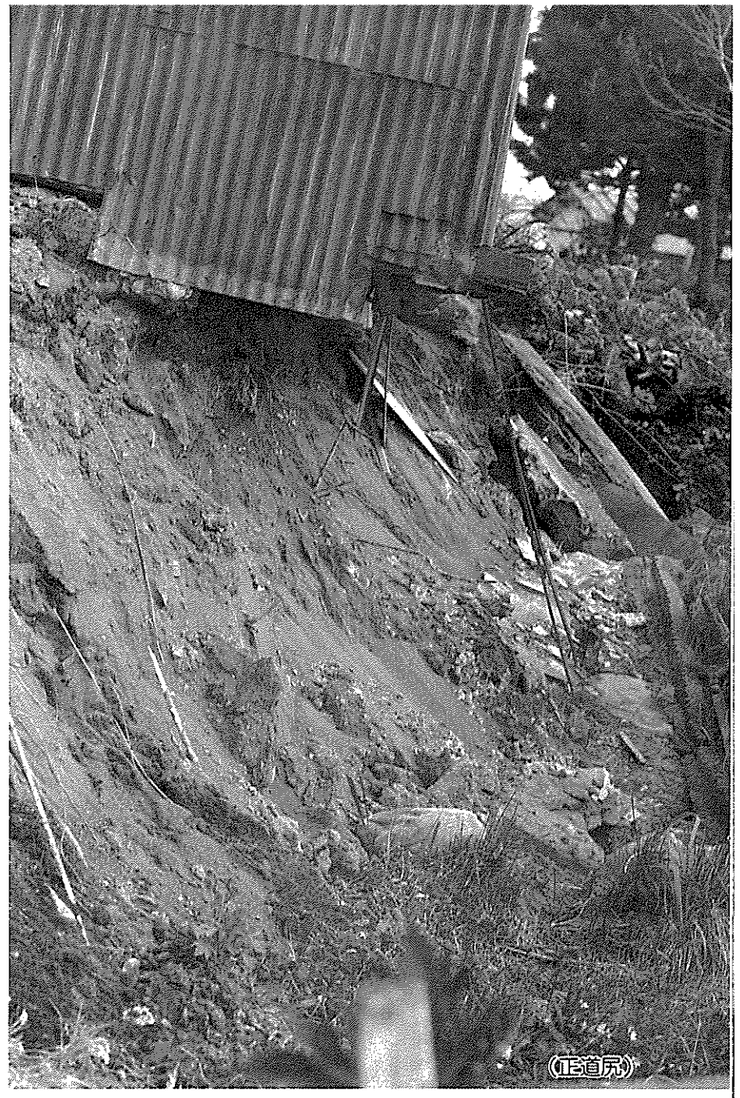
長年の風雪に耐えた土蔵も一瞬のうちに外壁が剥離（岩崎）

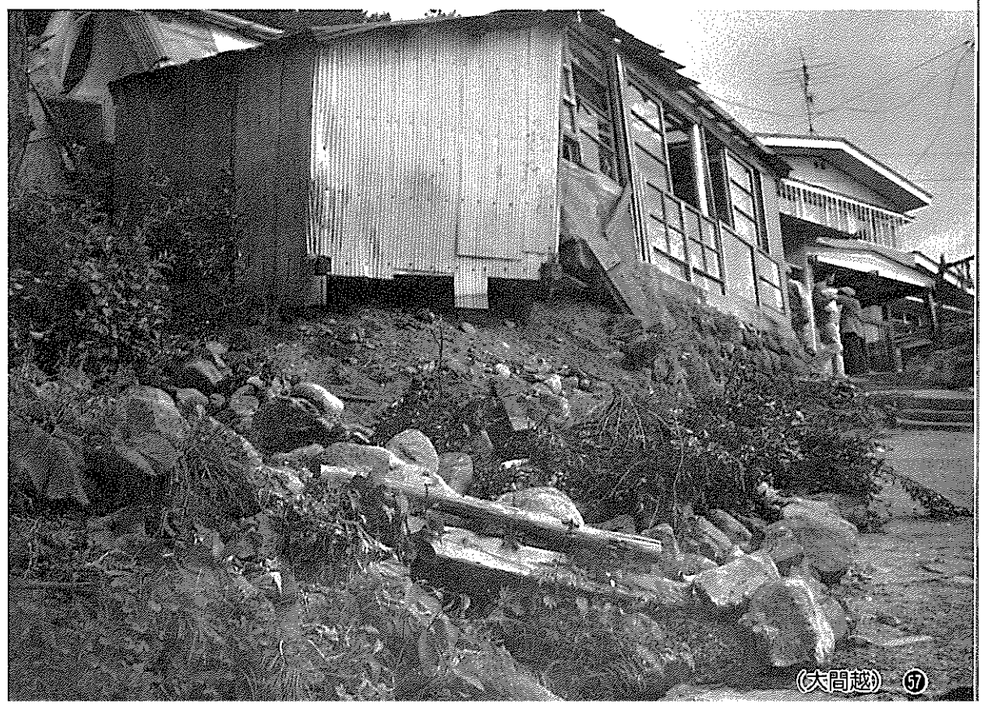


石垣崩壊で住宅にも亀裂（大間越）

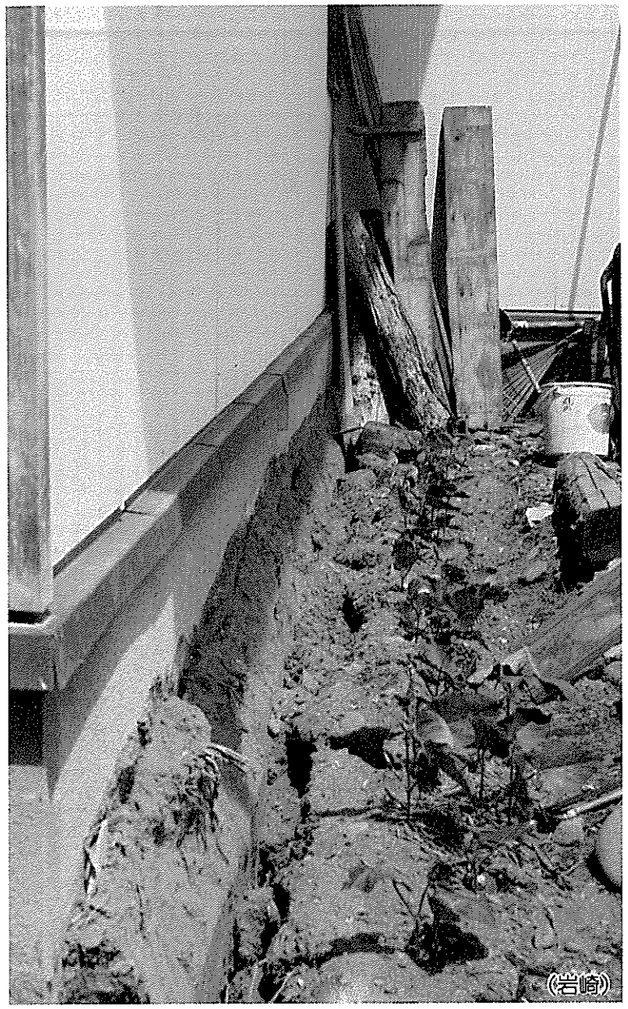
崩壊

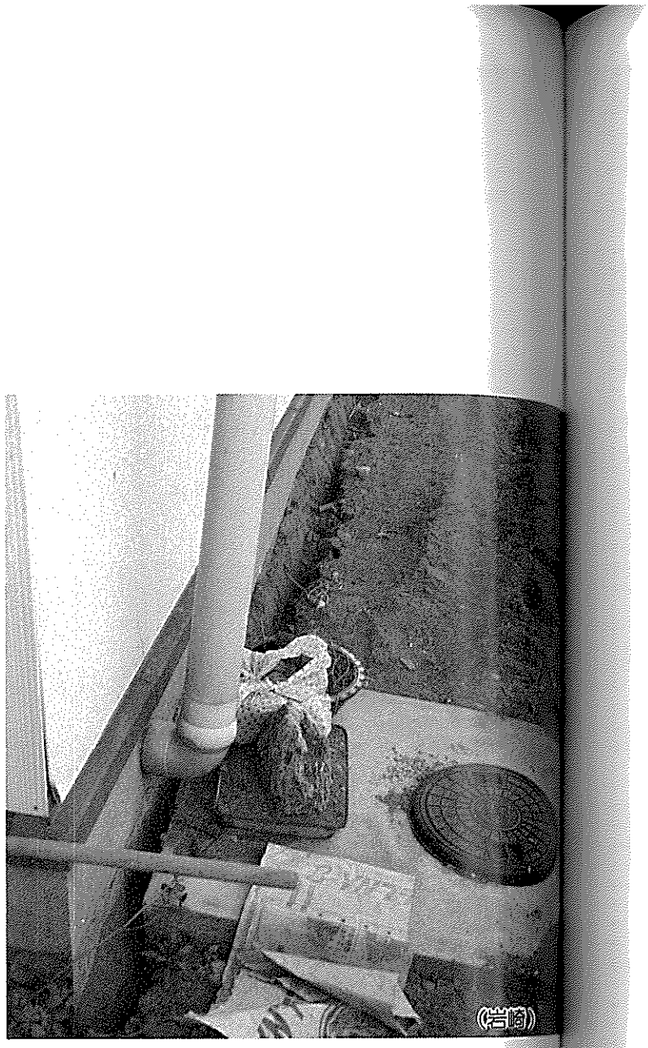






住宅損壊


(岩崎)


(岩崎)

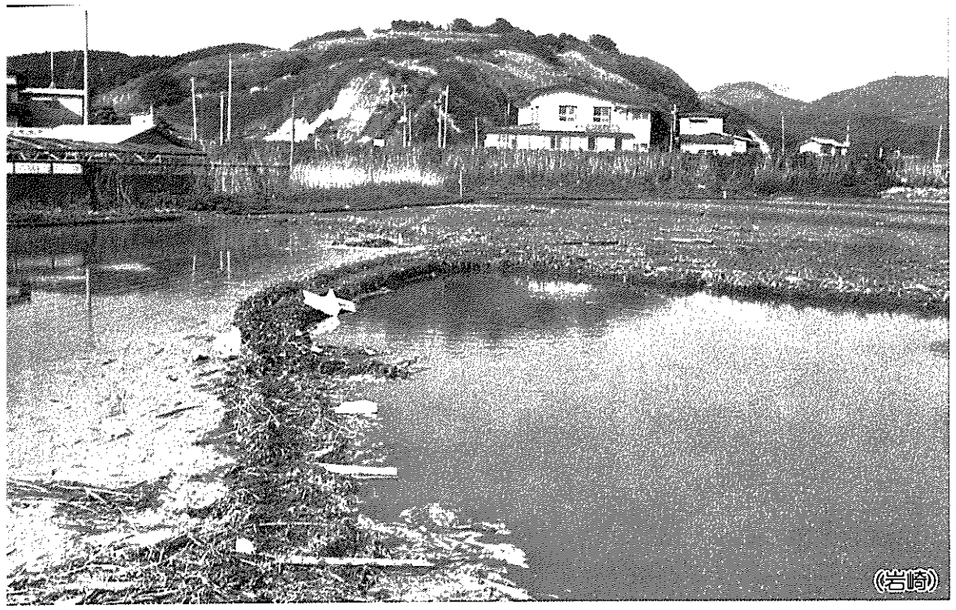
(十二湖)

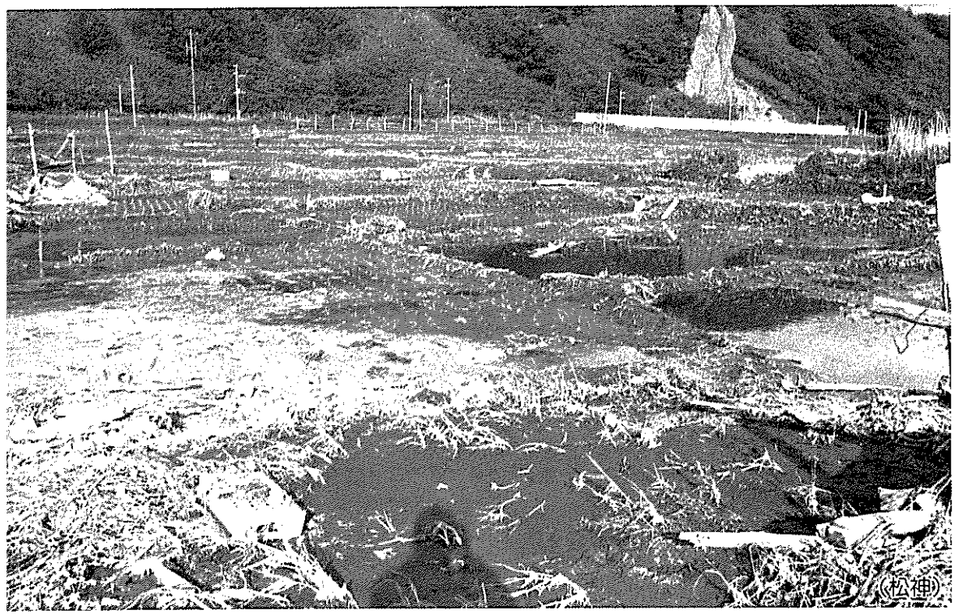
(岩崎)

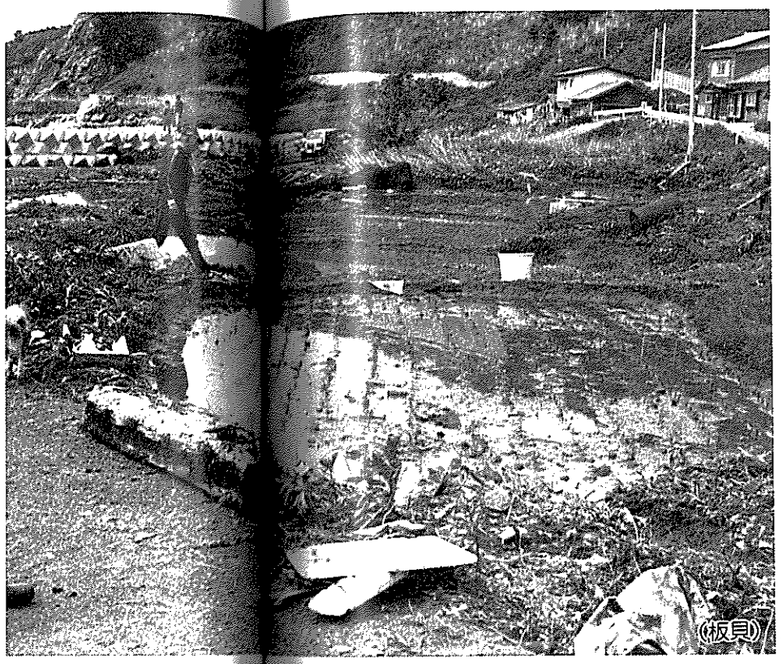
(正道尻)

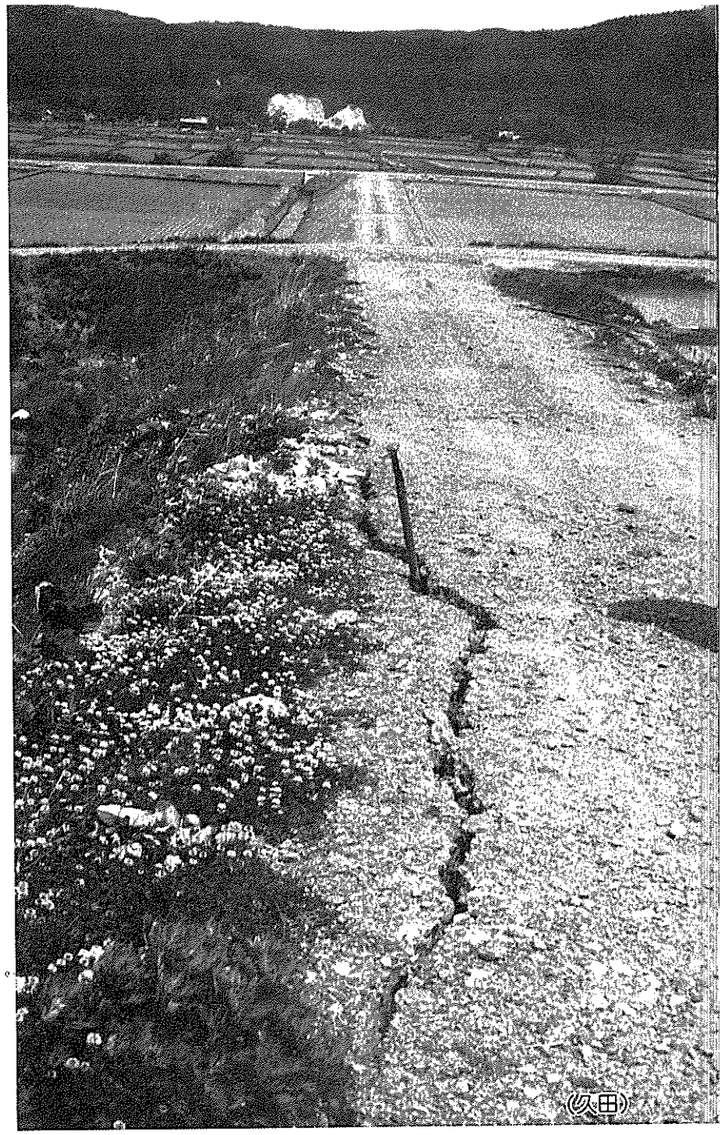
津波来襲により冠水した水田（松神）

水田の惨状


(岩崎)

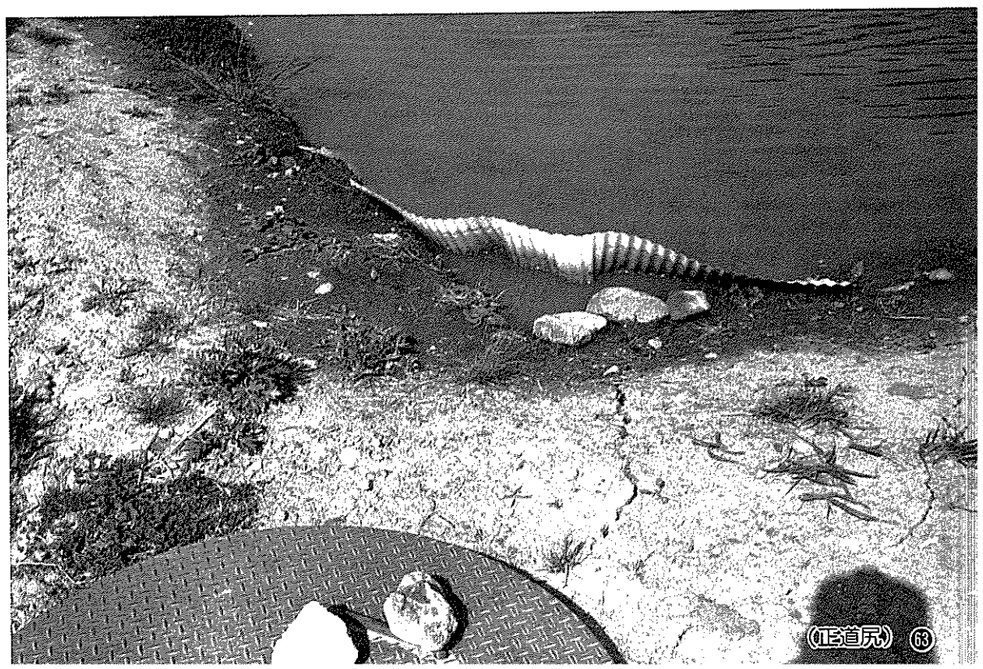

(松神)


(板貝)


(久田)

(岩崎)

(久田)

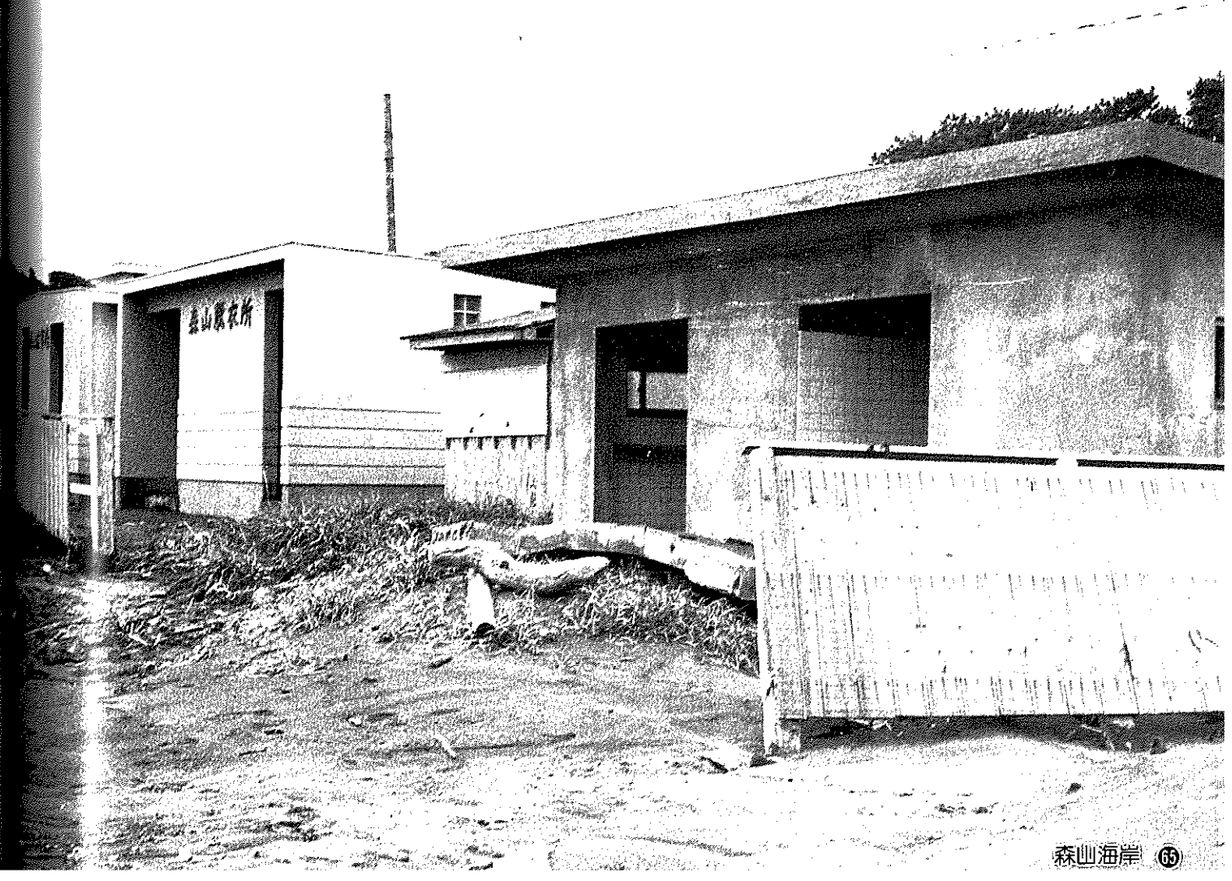

(虻首尻)

津波の水位

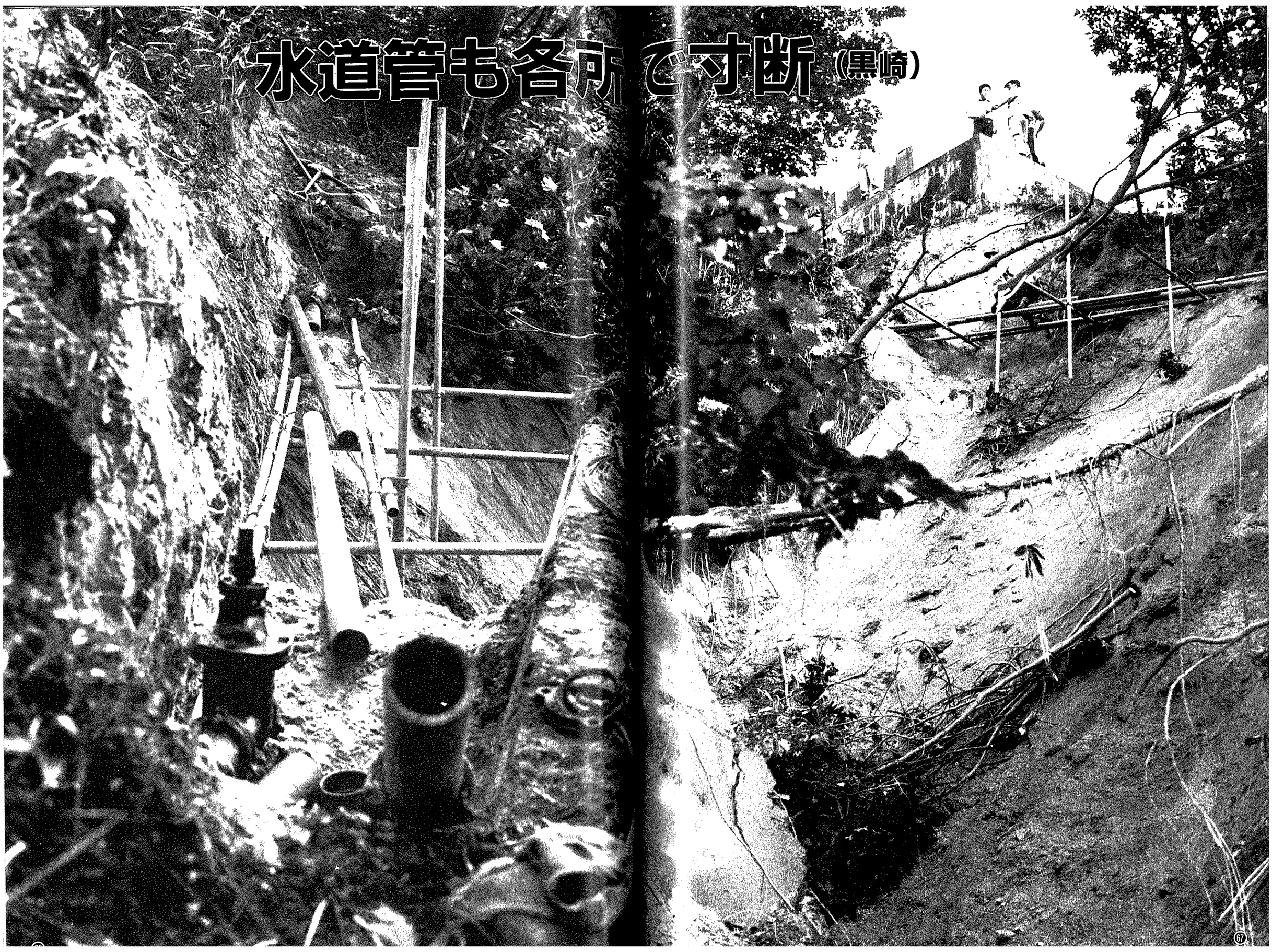
大間越海岸

津波に襲われた観光施設

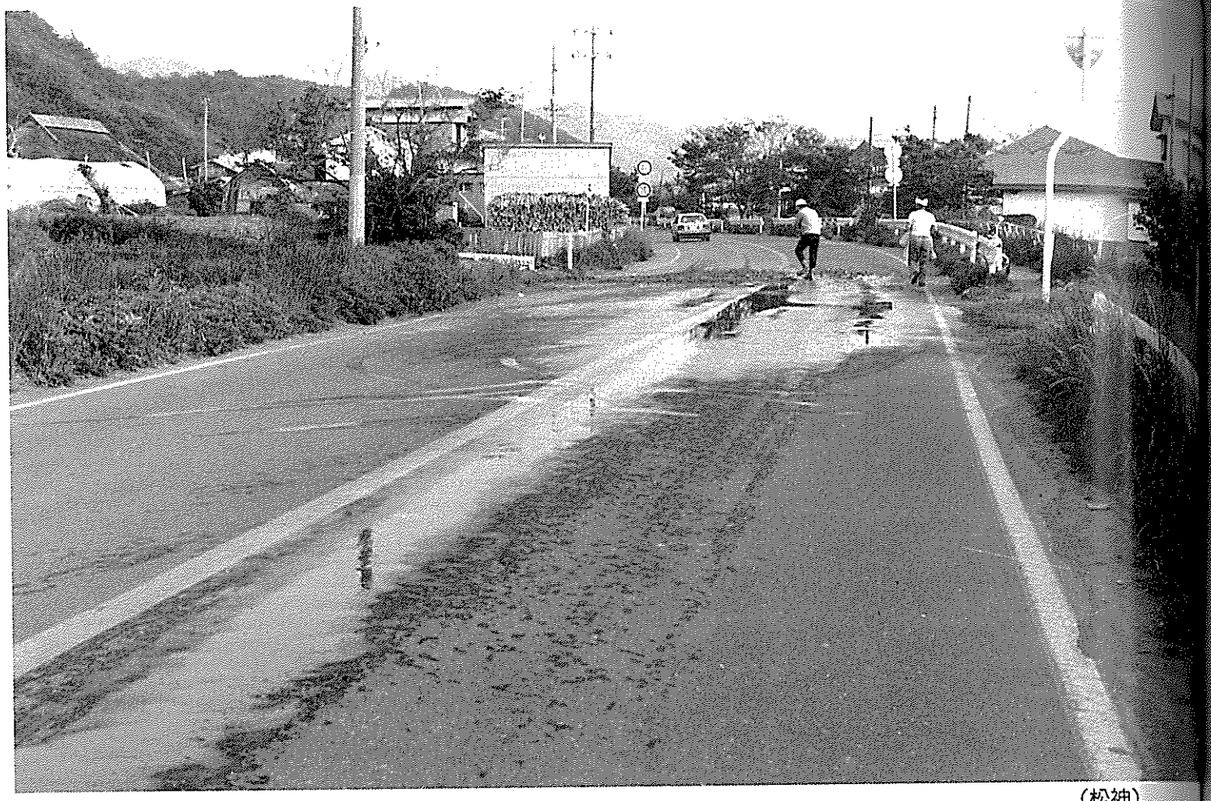
森山海岸



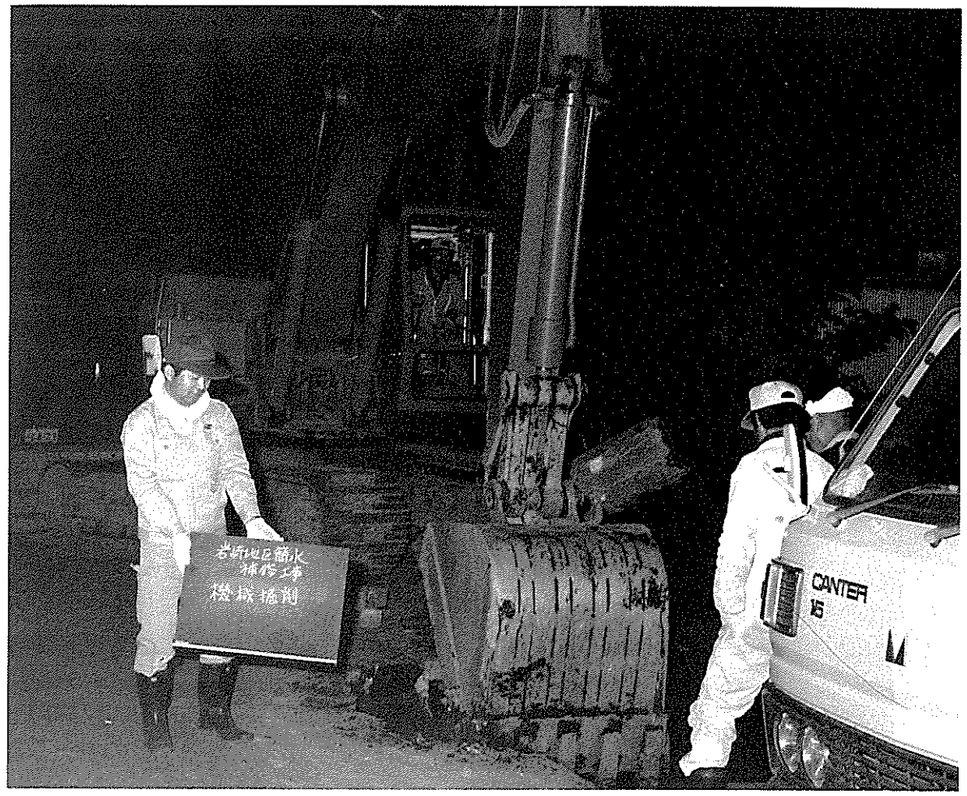
水道管も各所で寸断（黒崎）



水道施設の復旧作業は昼夜を徹して行なわれた



（松神）



（松神）

（松神）

（黒崎）

（松神）

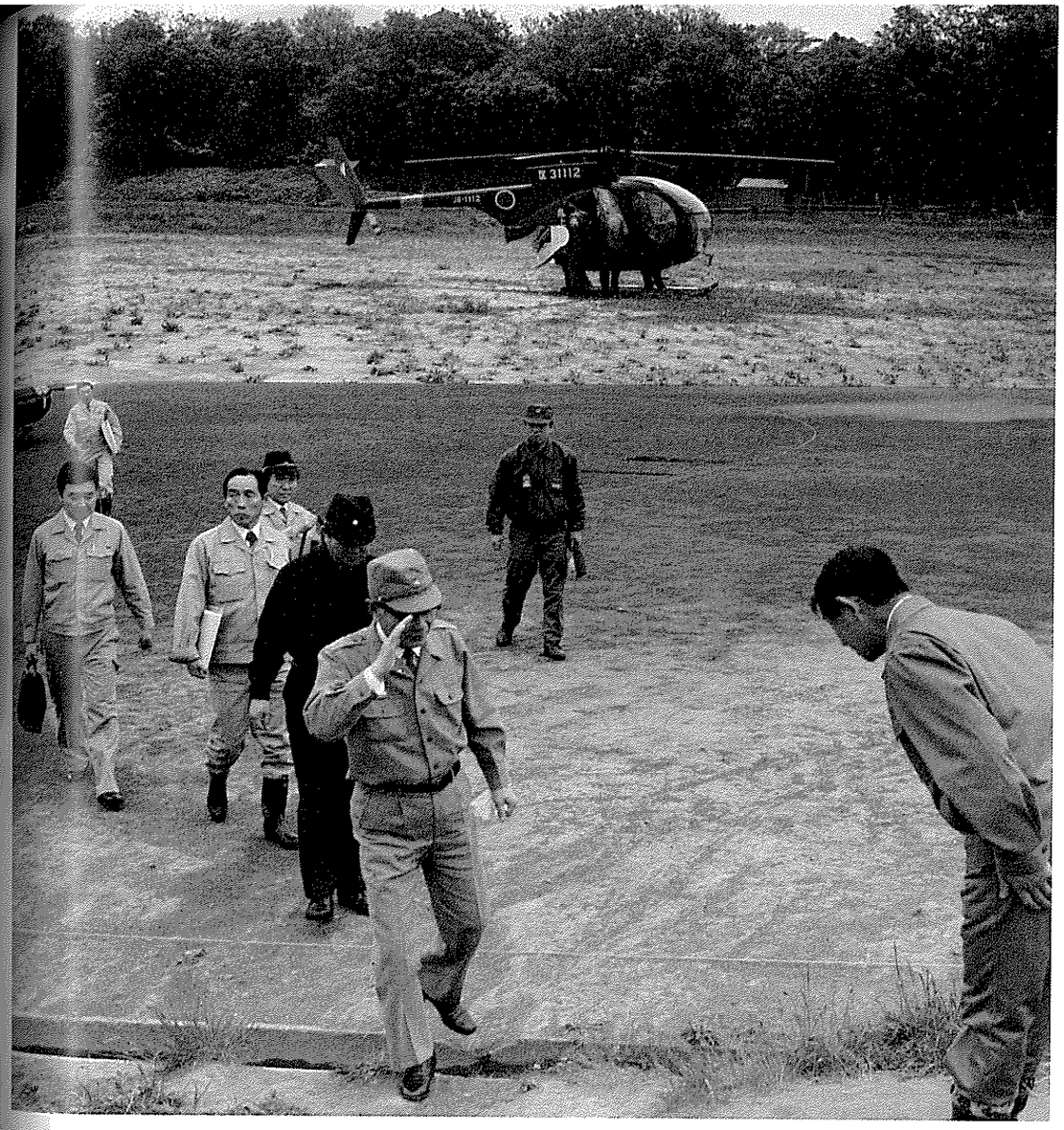
陸上自衛隊給水車の救援

（松神）

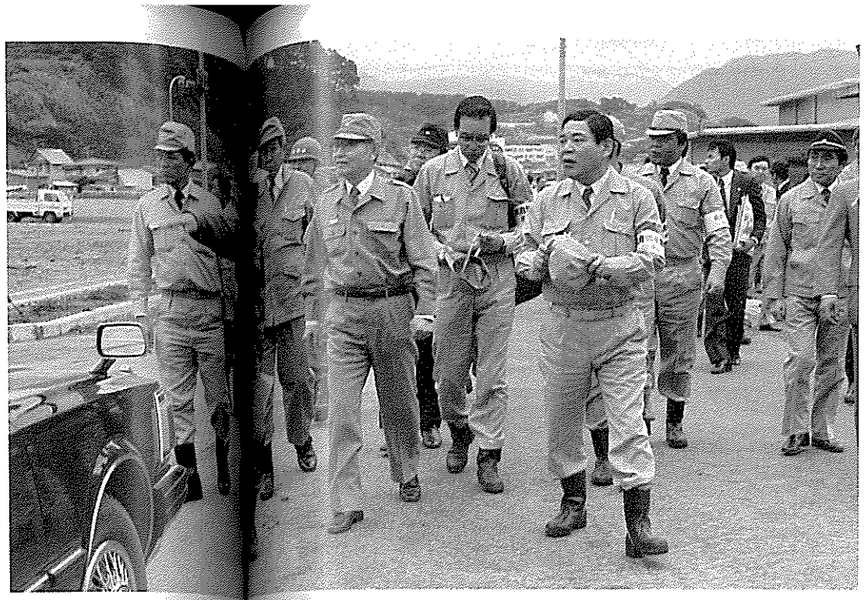
（沢辺）

（沢辺）

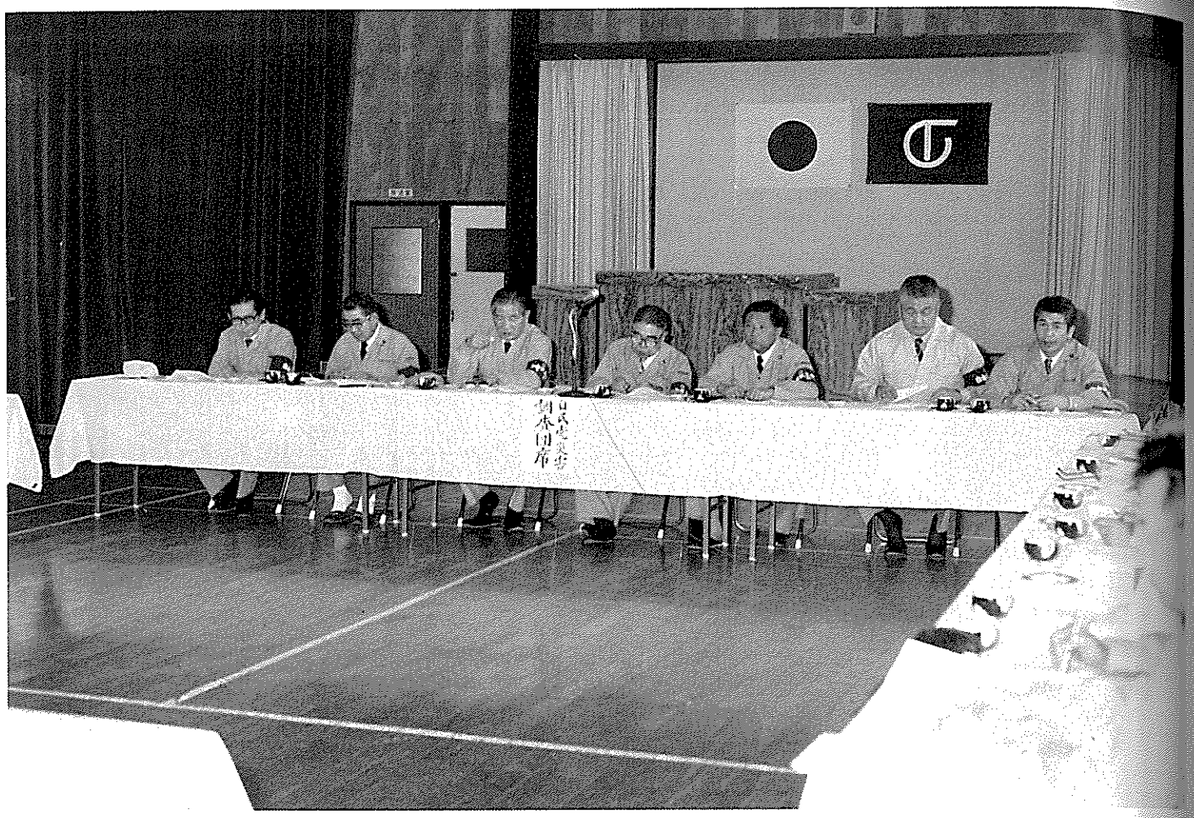
（正道尻）



災害視察のため北村青森県知事がヘリコプターで来村（岩中グランド）



加藤国土庁長官をはじめとする政府調査団の被害視察（岩崎漁港）



各調査団一行に対しての 被害報告と陳情(岩崎村中央公民館)

体験談編

目次

1. 岩崎南小学校

- 1年　くどう　みなこ……80
- 1年　しちのへ　みちこ……80
- 2年　しちのへ　ひろし……80
- 2年　くまがい　めぐみ……81
- 3年　秋　元　孝　之……81
- 3年　板　谷　育　子……81
- 4年　蝦　名　美　香……81
- 4年　工　藤　ゆかり……82
- 5年　菊　池　隆　行……82
- 5年　加　藤　登喜子……83
- 6年　七　戸　宏　信……84
- 6年　大　屋　元　子……84

2. 岩崎小学校

- 1年　さかい　みちこ……85
- 1年　きくち　ゆりこ……85
- 2年　いずみや　あや子……85
- 2年　西　田　春　男……86
- 3年A組　平　沢　ま　き……86
- 3年B組　西　川　清　美……87
- 4年　境　勇　次……88
- 4年　泉　谷　純　子……89
- 5年A組　早　坂　和　子……90
- 5年B組　塩　谷　雅　俊……90
- 6年A組　笹　森　寧……91
- 6年B組　萱　森　貴　子……91

3. 岩崎中学校

- 1年B組　熊　谷　敏　博……92
- 1年B組　伊　藤　幸　子……93
- 2年B組　神　林　友　広……93
- 3年A組　布　施　則　昭……93
- 3年A組　大　屋　節　子……94
- 3年A組　白　崎　美智代……94
- 3年A組　堀　内　孝　子……95

4. 一　般

- 鶴田中学校3学年　加賀谷　孝　子……96
- 能代市上町　関　戸　広　司……97
- 岩崎村大字大間越　蝦　名　理三郎……98
- 岩崎村大字岩崎　七　戸　　猛……98
- 岩崎村大字沢辺　堀　内　和三郎……100

『こわかったじしん』

1年　くどう　みなこ

おべんとうを、たべて、いたときに、きゅうに、じしんがあったので、びっくりしました。わたしは、たべものを、くちにいれたらきたので、つくえのしたにかくれながら、たべました。そとへ、ひなんして、すこしたったら、つなみだというのが、あったので、山へ　ひなんしました。それからも、ぴんぽんばんーとなったら　つなみがきたと　わたしはおもってしまいます。つなみが、おさまったので　山からおりてきました。それで、せんせいが、「おしっこがでるひと。」と　きいたらいちねんせいはしちにんともでした。それから　せんせいもおしっこでした。

それでおしっこが　おわってから、そうじをしてから　いえへ　かえりました。

『大きいじしん』

1年　しちのへ　みちこ

ごがつのにじゅうろくにちのじしんがこわかった。そしてしんどごだった。それでつくえにかくれていました。つくえのなかは、まっくらです。そしてこわかったです。そしてひなんをしました。それでだいぶおっかなかったよ。そしてきょうしつはそんなにこわれなかったです。それでもじんくんははしをもってきていました。そしてにねんせいの人がぞうきんをもってきていました。

『じしんのこと』

2年　しちのへ　ひろし

5月26日に、日本かいちゅうぶじしんが、ありました。

そのとき、2年生は、そうじが、おわって、かたつける、ころでした。ぼくが、きょうしつに、入いったら、きゅうに、じしんが、きました。そしたら、ぼくは、すぐおさまると、思って、いました。

そしたら、だんだん、ゆれが、はげしく、なって、きました。

そして、みんな、つくえの、中にかくれました。そして、先生が、きて、外に、出ました。はじめは、しばふに、にげました。こんどは、グランドに、にげました。

そして、ぼくたちが、おしゃべりを、していたら、さいとう先生が、「そんなに、おしゃべり、するなら、今に、しぬぞ。」と、いいました。

そしたら、ぼくたちは、しずかにしました。先生がたが、車を、しばふの、ところに、もって、きました。ほいくしょの、先生が、「にげろー。」と、いいました。

そしたら、みんな、走って、スキー山に、いく、はたけに、にげました。そして、ずっと、すわって、いました。

そして、じしんが、おさまって、学校に、かえりました。

とても、いい、たいけんでした。

『地しんのこと』

2年　くまがい　めぐみ

5月26日に、日本かいちゅうぶ地しんがありました。2年生は、そうじを、していました。わたしは、ゴミバコのゴミを　なげに、行くところでした。ろうかにゴミバコを　おいてきょうしつに入って、つくえの下に　かくれました。わたしは、こうじを　しているのかと思いました。そして、ゆれが　おさまると　きょうとう先生が「にげろ！。」とさけんだので　にげました。そして、しばふの　ところに　6年生から1年生まで　かたまって、すわりました。そして、しばらくすると、つなみけいほうが　入ったので4年生がせんとうになって6年生が　後ろに　なって、ならんで　山の　ほうに　にげました。うみの　ほうを　みていると　つなみが　ひいていきました。うみの色がおかしくなりました。みかこさんは、なかないで、女4人ないてしまいました。ほかに　ないた人もいました。つなみは、こわいなあ。

『日本海中部地震』

3年　板　谷　育　子

五月二十六日大きな地震が、おきました。

はじめての、大きい地震でしたので、とてもびっくりして泣いてしまいました。

地震がおさまったので、ほっとしてグランドに出ると、こんどは、つなみなのでまた、泣いてしまいました。

みんなは、ひっしでにげるのに、わたしだけは、歩いて家の人の名前をよびつづけていました。

一人の人が、わたしをはげましてくれたので、なんとか山にひなんしました。

山の畑にいて、海の方を見ているとつなみの、一回目が来ると、家の人のことを思い出して、泣いてしまいました。

すこしたったら、つなみけいほうが、かいじょされたので、学校にもどり、おそうじをして、家に帰りました。

そして、おばあさんの顔を見ると、ほっとしました。

おばあさんは、まだ家の中にいるとゆれるから、こわいと言って外に出ていました。

五時ころやっと家の中に入っていつでもにげられるように、じゅんびしました。

その夜、みんなかたまって、もうふーまいをきてざしきにねました。

その日一日は、ずっとよしんがきていました。

あの時のことは、いまでもわすれずに、おぼえています。

『地　震』

3年　秋　元　孝　之

五月二十六日のお昼ごろ、震度五の大きな地震がありました。その時、ぼくたちはごはんを食べていました。すると、急にゆれはじめました。ぼくはとてもおどろきました。

「下にかくれろ。」と先生が言ったので、ぼくはす早くつくえの下にかくれました。

それからしばらくして、ゆれが少なくなったので、急いで外に出ました。そして、しばふにならびました。けれども、たて物がたおれて来るといけないので、グランドにならびました。横や後ろを見ると、泣いている人もいました。そこへほいくしょの先生がやって来て、「つなみ、来たんだよ」とさけんだので、みんなびっくりして、あわてて山の方へ走って行くと、しまむら先生に止められました。その時、どうしてだろうと思いました。

すると、しまむら先生は「車にひかれたらどうするんだ。」とみんなをしかりました。

ぼくも走ったので、あぶなかったなあと、心の中で思いました。

そのあと山にひなんしました。そこでつなみを見て、ぼくの家はだいじょうぶかなと思いました。そのあと、じゅぎょうしないで家へ帰りました。とてもこわかったです。

『自分で体験したおそろしい地震』

4年　蝦　名　美　香

私は、十一時五十分にごはんを食べ終りました。そして、理科室のそうじをして、体育館に修子さんたちと行ったら、六年生の、男の人がそうじをしていて、体育館の外の方でまっていたら、ガタガタと音がして、六年生のせいとが、「地震だにげろ。」

と、言いました。そして、私もいっしょににげようとしたら、防火とびらが一つしまってみんなが、かたほうのとびらからにげていって、私だけがのこって六年生の人の方に走っていったら、しばふがよこに大きくゆれて、六年生の人に、つかまりました。二、三分したら先生がきて、こうていに、あつまって、ほいくしょの、工藤先生が大きな声で、

「もう、つなみきたって。」

と、言ったらみんながいっせいに、走りました。先生が、「とまれ。とまれ。」

と大きな声でさけんではんぶんの人がとまったけれどさきにいってしまった人もいました。そして、先生がせんとうになって山にあがったらつなみがきました。

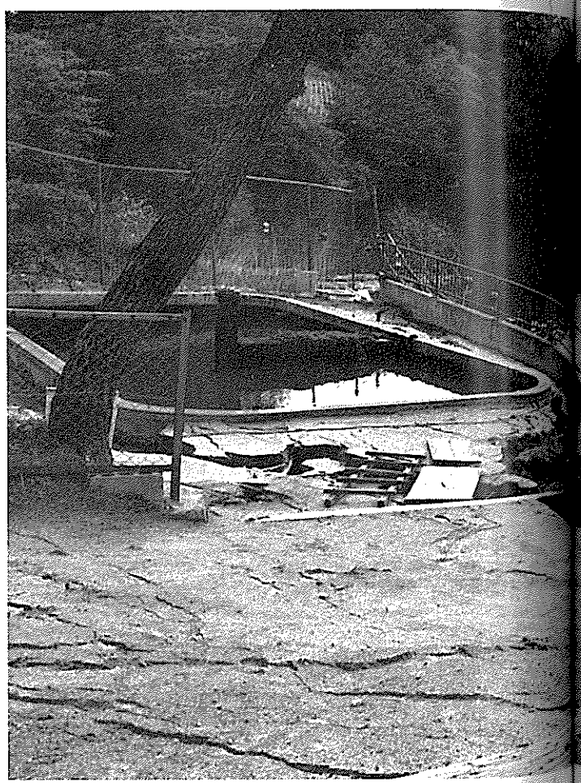
私はすごくこわかったです。

おばあちゃんのことが心配でなみだがでました。

『自分で体験した おそろしい地しん』

4年　工　藤　ゆかり

きのう、理科室の　そうじが、終わって　体育館のろうかに、行ったら急に　ぐらぐらして、立っていられなくなりました。(地しんだ。)と、思ったらぼうかとびらが　しまりそうに、なりました。理科室の方へ来ていた、ひろし君が
「しまるぞー。」
と、言ったので　ぼうかとびらが、しまる前に　にげていきました。美香さんだけが、のこったので　心配になりました。だから、(早く地しんが　おさまればいいな。)と、思ってかいだんまでくると　急に、ぐらぐらぐらぐらとなったから　前を走っていた潔君が　ころんでもがいていました。わたしが　走って教室に、行ったら先生が、
「頭、出すなー。」
「さわぐなー。」
「声、だすなー。」
と、言っていました。わたしの　つくえには弘君が、入っていました。弘君の　つくえには、欣幸君が　入っていました。わたしは、入る所が、ないのでわたしの　つくえの、あいている所に　入りました。わたしは、まだ美香さんのことが　心配で、なりませんでした。しばらくして、きくち先生が、
「にげろー。にげろー。」
と言ったので　島村先生が、
「ならべー。いくぞー。」
と、言ったので　ならびました。そして、ならんだら先生が　走りだしたので、わたしもあとについて走りました。かいだんを、おりて　ろうかにでるとぼうかとびらが、しまっていました。先生が、ぼうかとびらを　ひらいて、
「にげろー。にげろー。」
と、言いました。わたしたちは、非常口へ　行ったら、そこもしまっていました。島村先生が、
「と、あけろー。」
と、言いました。それで、一番近い　友和君が、非常口のとを　あけたら　みんなが、いっせいに　とびだしていきました。島村先生が、やっとわたしたちの所へ来ました。
「ならべー。ならべー。」
と、言ったので4年生は　ならびました。しばらくして、全校が　ならんだら、
「学校が　たおれるかもしれないから、グランドへならべー。」
と、言いました。グランドに　ならんだら、ほうそうが、ありました。終わったら先生が「あと、3分でつなみが　あるぞー。」
と、言いおわらないうちに、
「わー。」
と、言いながら　道路へ、とびだしていきました。そしたら、先生が
「止まれ。止まれ。」
と、言ったので　止まりました。先生が、先に立ってせんろの　方へ走りました。せんろを　よこぎって国道を　通ったら　小道が　ありました。そこを上ったら　バスの、運転手の、熊谷さんの　畑に、なりました。そこにひなんして　そこで、ラジオを　きいたり、ほうそうを　きいたりして、一時間半ぐらいたちました。地しんや、つなみが　おさまったので、学校へ　帰りました。



『ぼくの地震体験』

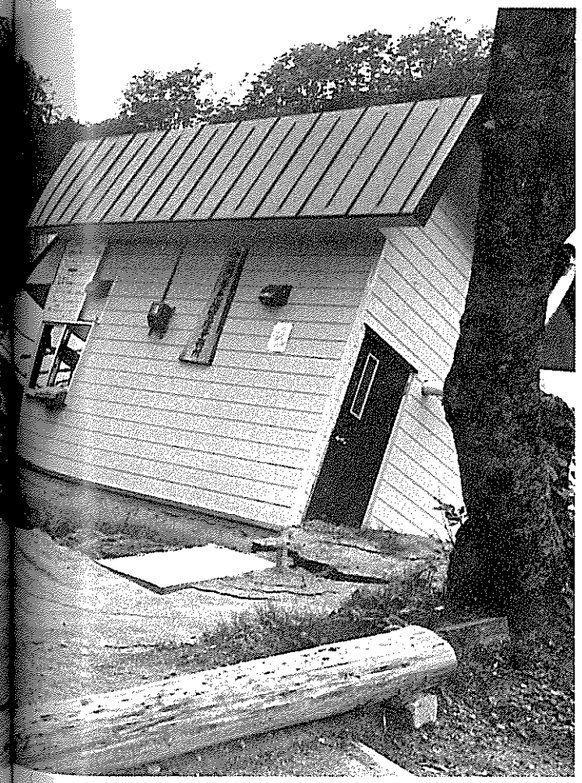
5年　菊　池　隆　行

五月二十六日の、昼ごろ、とつ然、グラグラと　ゆれた。
ぼくは、あわてて、近くの机にかくれた。五分くらいゆれが続いた。
ゆれがおさまったので、教頭先生が、
「みんなーにげろーつ。」
と言ったので、外へにげた。
外へ出ると、泣いている子も、何人かいた。すると放送で、
「津波警報」
が、出たので、急いで近くの山へ登った。山へ着くと、また、グラグラとゆれた。
ぼくは、
「家にいる、お母さんとお父さんは、大丈夫かなあ。」
と思いました。
そして、海を見回すと、「しおさい」の所に、津波が、見えた。
ぼくは、びっくりした。何時間ぐらい山へいただろうか、ぼくたちは、やっと山からおりた。
すると、先生の机は、めちゃくちゃになっていた。
ぼくたちは学校のそうじをした。
図書室では、地球ぎが、落ちて、われていた。保健室では、花びんがわれていた。
そして、そうじが終って家に帰った。
お母さんの顔は青くなっていた。
家のポチは、なんともなかったような顔をしていた。
この、五月二十六日におこった、地震は、とてもこわかった。

『私の地震体験』

5年　加　藤　登喜子

五月二十六日、0時すぎごろ　そうじが終わって図書室の　ろう下の所で、遊んでいたら、急に、グラグラ　と地震が来ました。
私は、教室に走って来ました。
でも、教室は、まだそうじが　終わっていなかったので、後ろの方の机は、はこんでいませんでした。
私は、そのばで、座ってしまいました。
まだ、地震はおさまっていませんでした。やっところで机の中にかくれたと　思ったら、ゆれが、少しおさまったので、いそいで、外に、にげました。
もう　何人かの人は、ないていました。
放送で、津波が来るので、ひなんして下さいと　いったら、みんな、いっせいに、にげました。
もう女の子は、たいていの人は、ないていました。
でも私は、ないていて、前がみえなくなったりすると、ころんでしまうから、私は、がまんしました。
国道をこえて、山の畑にひなんしました。ラジオなどを聞いたりして、海を見たら、岩が　見えていて、もうすこしたつと、砂が見えていました。
そして、二、三時間たって、やっと、学校に帰りました。
でもまだ、よしんは、ちょくちょく、きていました。
学校に帰って来ると、すごいもんでした。図工室は、人形などがおちてきて、首がとれてある人形もありました。
図工室の、じゅんび室は、すごかったです。図書室は、地球ぎがおちて、われていたり、本がおちたりしていました。
それから、あとしまつをしました。
そして、家に帰りました。
家の中は、げんかんからもうめちゃくちゃでした。
中にはちを　おいてあったので、土が、ちらばっていました。
一番びっくりしたのは、電気が、おちて、われていたのでした。
十二湖の方も、岩などが、くずれていて、お父さんやお母さんが、これなかったので、おばあちゃんが、きてくれて、やっとのことで、かたずけました。
今でも、大きな、岩が、あります。
生れて、はじめての、大きな地震なので、こわかったです。
また大きな、地震が、きたら、けいけんしたことを、おもいだして、ひなんなどをしたいと　思います。
いい体験でした。



『恐しい地震』

6年　七　戸　宏　信

地震発生時、友達と一緒に掃除をしていました。ゆれたとたん「何が起こったんだ」と思いながら、心の中では、とてもびっくりしました。

地震はだんだんと強くなり、この場所に立っていられなくなりました。

この場所から教室まで近かったのでゆれるろう下を、走って教室の机の中に、かくれました。

ようやくゆれはおさまってきました。

ぼくは口では言わなかったけれど心の中では「もう死ぬんじゃないかな」と思いました。おさまったとたんみんな芝生に集まりました。でも体育館がたおれたりするときけんなのでグランドに行きました。

間もなく、保育所の先生がさけぶような声で「津波がもう少しで来るよう」と言ったのでみんな走って国道をこえ海の見える畑へ避難しました。

本当は島村先生を先頭に避難しなければならなかったのに、みんなあわてて、ただ走っていってしまいました。放送では何度も津波警報が出されました。

ようやく津波警報の解除が出されました。

学校にもどってから掃除を、やり直しました。学校の中はもうメチャクチャでした。

花びんが割れたり、地球ぎがこわれたりしていました。かべにも、ひびが何ヵ所にも入っていました。

家に帰ってからメモ帳に、今日のことを記録しておきました。

地震とは、とても恐しいものだと、つくづく思わせました。

『おそろしい地震の体験』

6年　大　屋　元　子

五月二十六日の十二時過ぎ、わたしは、直美さんと、トイレのそうじをしていました。

わたしは、地震がくるなんて思ってもいませんでしたから、いつもどうりほうきではいていて、直美さんも、ゴム手ぶくろをはいてバケツを置き、便器を洗おうとしていたときとても大きなゆれがきました。

今考えると、「あほか！」と、思うけれどその時は、てっきりトイレの前をそうじしていた五年生の男の人がいたずらをしているなどと考えていました。

けれども、直美さんは、すぐ気付いたようで、ゆれている中を、教室まで走っていきました。わたしも、なんだかわからないままに教室に行き、机の中にかくれてから、「あっ地震だ!!」と、やっと気が付きました。

ゆれがおさまってから、ほうきをけとばし直美さんもゴム手ぶくろをはいたまま、みんなと校庭にひなんしました。

しばらくして、海の様子を見に行った保育所の工藤先生が、「つなみくるよー！」とさけんだので、いそいで山にひなんしました。

つなみで、たくさんの人がなくなりました。船を流されて、これからの生活になやまされている人もいるようです。とくに、私といくつも年のちがわない小学生が、楽しみにしていた遠足で死んだのが、かわいそうです。

この、日本海中部地震の体験を、むだにしないようにしたいと思います。

『すごかった、じしん』

1年
さかい　みちこ

わたしの　うちは　すごかったです。

でんきは　おちてこわれたし　そして、わたしのへやは　ぐちゃぐちゃです。あるくところがありません。わたしの　しんせきのうちは、みずだらけです。うみのみずが、まどから　はいってきました。

『すごかった、じしん』

1年
きくち　ゆりこ

うちの　にかいは、テレビや　たんすや　ほんが　ふとんの　うえに　いっぱい　おちていました。

うちの　たんぼの　ほうを　みたら　きしゃが　とんねるの　ところで　とまって　いました。なんにちも　とまって　いました。

てっきょうを　なおしているところを　みました。

『こわかった　地しん』

2年　いずみや　あやこ

わたしは、地しんが　こわいと　思いました。地しんが、おこったとき　みんな　きょうとう先生に　つれられて　山に　にげました。山に　にげて　ついたとき、うみの方を、見たら　ふねが　ひっくりかえっていました。ようく　見たら　うずまきが、グルグル　まわっていました。ふねが　のみこまれそうに　なって、すこし　おさまったとき山からおりてきました。

すこしたって　おうちにかえることになって、校長先生が「かばんはおいて、じてん車に　のってきた人も、じてん車をおいて、かえって　ください」といったら　わたしは、「らくちんだなあ」と思いました。

おうちに　かえって　ようちえんに　いったら　にのみや金じろうが　おちて　首がもげていました。

わたしは、「にのみや金じろうが、かわいそうだなあ」と思いました。みせに行ったら、おかあさんが、「うっているもの、きれいにおじだ」といいました。わたしが見たら、ハミングの下のところが、もれていました。

びんでできているものは、われていました。

おうちにかえりました。そしたら、おばあちゃんが「コップ　三つも　われだ」といいました。

よるになってわたしは、おじいちゃんから「森山で地われしたど」と、ききました。

わたしは、ニュースを見ました。そしたら、つなみにのみこまれた人が　いたときました。わたしは、こわくなってけしました。

ごはんになって　わたしは、うれしくなって　食べようとしました。けれど、きゅうに、つなみに　のみこまれた人の　ことを思いだして　ひと口しか食べなかった。わたしは、おもしろい本をよんで、こわいことを、わすれようと思って　本をもってきてよみました。でも、なかなか　わらえませんでした。

わたしは、地しんのことを、思いだすだけで　こわくなってしまいます。

おにいさんは、地しんを「地しんのおかげで　しゅくだいねくなったじゃ」と、地しんをほめていました。わたしは、おにいさんのことを「ばあか」と思いました。

岩崎小学校

『どうして　地しんが　おきた』

2年　西　田　春　男

おっとい　ぼくたちが　体いくで　タイヤを　ころがして　いると、きゅうに　地しんが　おきました。

ぼくは、すぐ　とまると　思っていた。そしたらすぐに　とまらなかった。ぼくは、やっぱり　にげた。

外に出ると、まだ　ゆれていた。

ぼくは、しゃがんだ。でも　地めんは、うごいていたから　ころんだ。

こんど　山に　ひなんしたら　うみが　見えた。そしたら　つなみが　ふねを　ぐるぐると、ひっぱっていた。赤色の　ふねが　しずんで　いった。ぼくは、びっくりした。

もうーだいの　ふねは、たすかった。こんど　クレーン車に　にている　ふねが　ながされた。

かえるとき、さざない川に　ふねが　はんたいになっていた。

いえに　行ってみると　れいぞうこが　まん中にあった。

おじいさんと　おばあさんは、外に　にげて　いました。

『けっこん式は大地しん』

3年A組　平　沢　ま　き

わたしは、地しんが　おきる時、こうみんかんの二階に　いました。

その時は、ひろうえんが　もう少しで、はじまるところでした。

しんせきの　じゅん君と、みつゆき君と、じゅん君の　妹のなおみちゃんと、じゅん君の　お父さんといました。

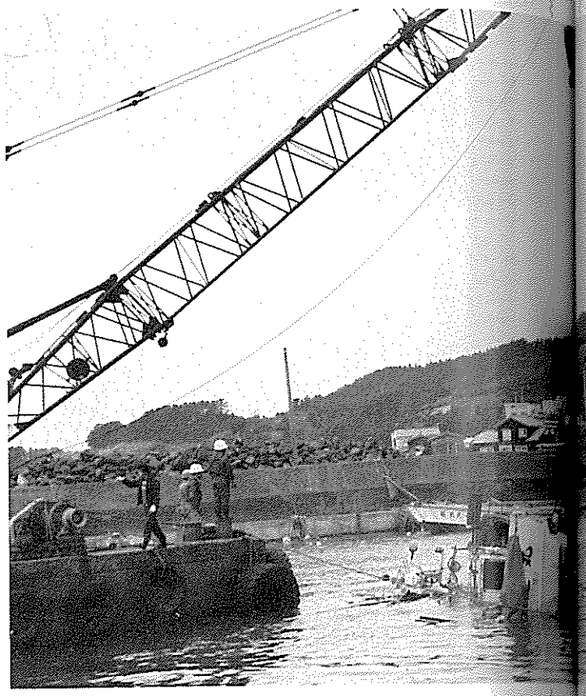
みつゆき君と、じゅん君が、紙ひこうきをとばそうとして　足を　一歩前に　出した時地しんがおきました。

ぐらぐらぐらー　ぐらぐらー、花びんや、はいざらが　テーブルからおちて、だんだん地しんが大きくなっていきます。じゅんくんのお父さんが「じゅん早ぐこい」といって、じゅんくんと、わたしと、みつゆきくんと、なおみちゃんと　いそいで下に走って　にげました。

げんかんから　みんないそいで出てから　二分くらいしたら　とまったので　こうみんかんに　はいったら　また　大地しんが　おこりました。

そしたら　つなみに　なりました。せんろを　こえ大きな　なみが　やってきた。

ふつうの　なみより　大きい大きい　なみで　すぐ



わたしたちは　にげたからしらないけど　どうろまできそうでした。

「山のおぐさにげれーつなみだどー」

と　だれかが　大きな声で　さけびました。

学校のところまで　車で　きました。

そのとき　南の方を　見たら　くずれ山がくずれてすごいけむりでした。

わたしは　本当に　びっくりしました。

なぜだというと　おばあちゃんも

「こんだ地しんみだごどね」

という地しんを　わたしが　みたからです。

大地しんを　みたときは　本当に　びっくりしました。

大地しんは　あとなければいいです。

そして　わたしたちの　ひなんしたところは　学校より　少しのぼったところの　しらとりさんの家で　コップが　たくさんわれていて　ガラスかけらが　たくさんちらばっていて　よしんがたくさんありました。

そして　つなみが　おさまったら　もどりました。

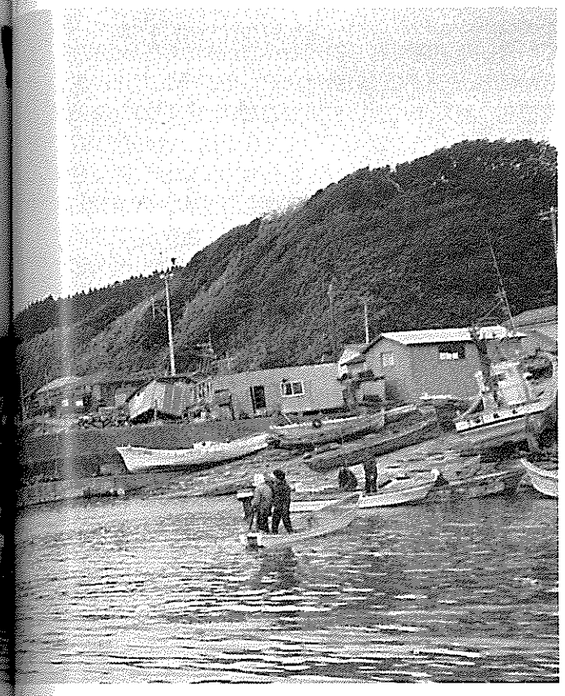
たべるものが　地しんでゆれたから　しょうゆが　こぼれたり　おかあさんたちは　ふくのに　たいへんそうでした。

それからひろうえんが　はじまりました。

そして時間がすぎてひろうえんが　おわりました。

家に　みんなで帰ってから　よその人が　たくさんきました。

おかあさんたちのへやは　がくがとれて　わたしのたんすが　うごいて　下のへやのテレビは　5㎝ぐら



いずれていて　家が　ぐちゃぐちゃになってしまいました。

なんで　あんな地しんがくるんだろうと思いました。

だからけっこん式は　大地しんだ。

『じしん』

3年B組　西　川　清　美

ガラスもわれ、テレビも、おちました。図書室の、本もたおれて、とってもこわかった。

かやもりさんの、畑も海の水が来て、川のようになっていました。

とってもびっくりした。

じしんのとき、おかあさんは、わたしをしんぱいしてくれたそうです。

わたしは、

「学校のふな、どうしたかな、かめ、どうしたのかな」

と、そればかり思って、いました。

はじめての、じしんとっても、こわかったです。

わたしの家の、まわりの土に、ひびが、はいって、いました。

しのぶちゃん、あき子ちゃん、はじめくんはふるえながら、

「こわい、こわい」

と、ないていました。

一、二、三、四、五、六年生は、山へ行きました。一人も、けがした人は、いなくて、よかったです。

上の木が、おちてきそうに、なっていました。

今日は、とっても、とっても、こわかった。海の、水が、うずを　まいてなみは、岩を　こして、いきました。

わたしは、だんだんこわくなり、ふるえて、きそうになって、しまいました。

中学生は、学校に、来ていました。

こんど、下へ、おりて行くと、少しなみが、やんで来て、いました。

わたしは、ほっとしました。

でも、まだ少し、じしんはとまって、いません。

ランドセルも、道具ももって、いかないで中のくつのままで、先生と、帰りました。

わたしは、じしんがなって、つなみがくると言うことが、わからなかった。

今日の、はじめてのじしんは、はじめてなのでとっても、おそろしかった。

けがとかは、しないけれど、とってもおそろしかった、たとえば、コップや、ハブラシ、テレビが落たこと、船が、しずんでいくこと、そういうのが　とっても、とっても、おそろしかったです。

「かべが、落て、こないかな」

「家が、つぶれないかな」

と、わたしは、思った。

つくえが、

「ガタ、ガタ、ガタ」

と、動いて、頭が、つくえにぶつかったりしました。

とっても、いたくて、こぶがでそうになって、しまいました。

電せんが、ななめになっていました。わたしは、電せんが今に、たおれると思っていました。

だけど、ななめになったままひとつも、たおれていなかった。

わたしは、びっくりした。

しゃだんきも、こわれて動いて、いません。汽車もと中で、止まっていました。

えきの人たちは、汽車が止った所へいって、何かをしていました。

ぜんぜんすすんでいきません。

トンネルを　ちょうど　ぬけたときに、

「ピタ」

と、止まっていました。

わたしは、お客さんたち、こまるだろうなと、思いました。

今日は、なみが、高くて、とっても、とっても、こわい、じしんでした。

家の、あとかたずけは、たいへんだった。けっこん式の人も、学校へ、いそいで来ていた。けっこん式の人たちは、とっても、こまるだろうな。

『日本海中部地震』

4年　境　　勇　次

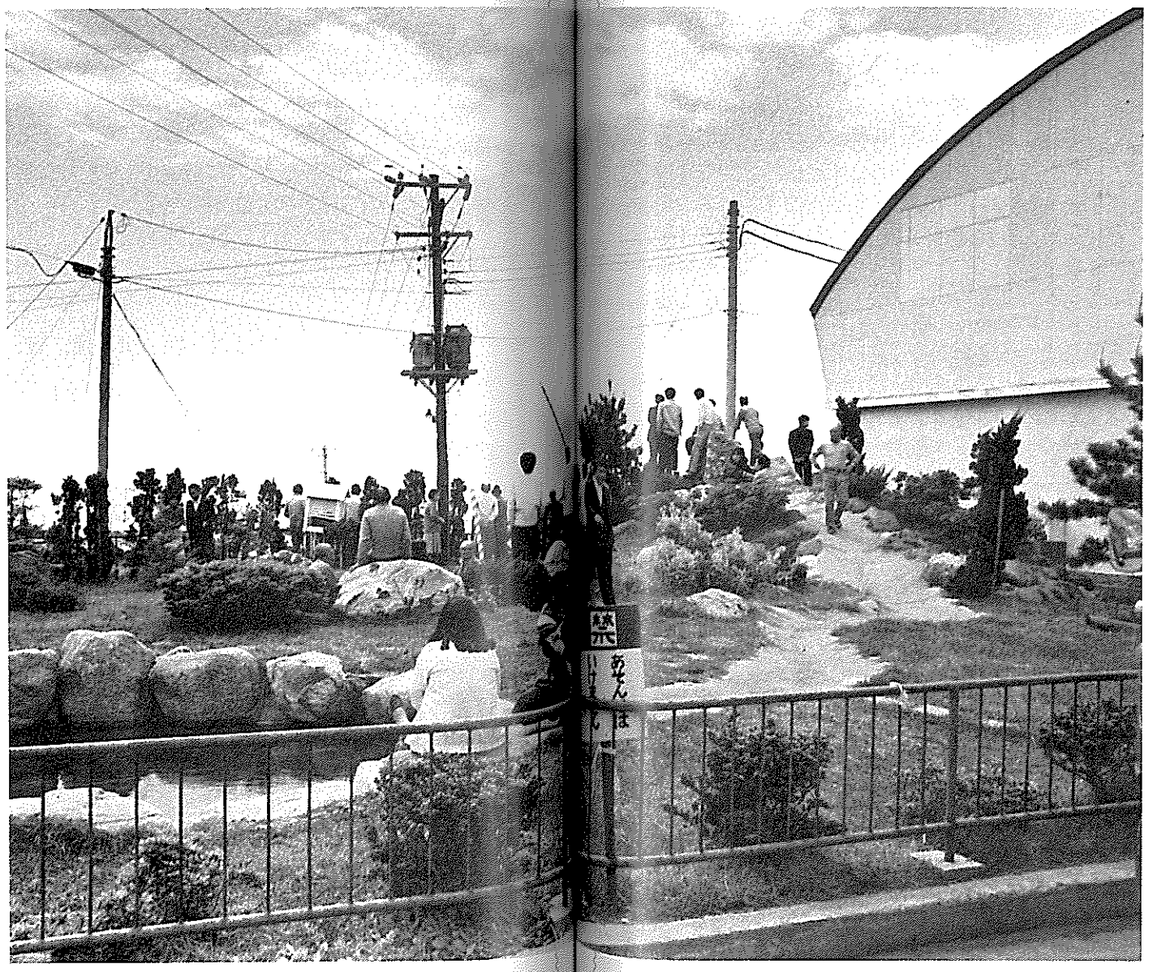
ちょうど、四時間目が、終わるころ、急に、大きな地震が来た。にいおか先生は、みんなに、「しゃがめ」と、いっしょうけんめいさけんだ。その時体育館のまどは、われるように、ゆれていた。学校に止まっていた車は、横に、たおれるみたいに、動いていた。ぼくは、いっしょうけんめいおがんだ。「かみ様ほとけ様どうか、地震が、止まるように、してください』

六年生の女でも、ないている人が、いました。ぼくたちの先生は、「ないても地震は、おさまらね』と、女を、おこった。でも、女は、まだないています。少したつと学校のグランドに、自動車が何十台も来た。しゅうげんに行く人だろうか着物を、きたまま　来た人もいた。間もなくつなみが来るという放送があったので一年生から、六年生まで山の方へひなんした。六年生の人は、「早ぐ行げえ早く行げ』と、ぼくたちを　ぬかしたり　おっつけたりして　とてもいたかった。山に行って、海を　見ると、大きな　うずまきを初めて、見ました。つなみも　初めて、見ました。ぼくは、お母さんと、お父さんと、おばあさんと、お兄さんと、おねえさんと、しんせきの人は、だいじょうぶかなあと、思いました。ががまの家の、一番大きな船も、かっぱになって、ずっと　ながされて、行きました。ぼくは、いたわしいなあと、思いました。ががまの、船は、いっぱいお金を、かけて、買ったんだろうなあと、思いました。つなみがかいじょになったので校長先生から、注意を聞てからならんで、家に、帰ることにした。家に、帰る途中、くらんど君の、近くの、浜は、あともう少しで、道路に、しお水が上ってくるところでした。くみあいを、見ると、しお水が、上に、上って来ていました。ぼくは、なんだか、家に帰るのが、いやに、なりました。道路は、どぶのにおいが、します。家に帰って、港を見ると、船が、二そうしか、いませんでした。こわれて、いない船は、まだ、あります。漁しの人が船に、乗って、ずっとおきの方に、にげている船も、あります。

それから、家に行って、お母さんに「ががまの船何ぼするの』と、きくと「二千万円』と言った。ぼくは、びっくりぎょうてんした。ががまの人は、とても、そんしただろうなあと、思いました。半田の船が止まる所の、セメントは、海に、しずんでしまいました。ぼくは、みなとを、なおすのに、何千万円も、するだろうなあと、思いました。空には、ヘリコプターや、飛行機が、何機も　飛んで、います。

ぼくの　家の小屋にも、三十センチぐらい、しお水が、入って来ました。ぼくは、とても、しんじられないほど、びっくりしました。お父さんの　自転車にはあおさなど、わかめなども、いっぱいタイヤに、ついていました。ぼくと、お兄さんと、おねえさんのには、なんにも、ついて、いませんでした。それから、家の回りを、見て歩くと、ちょっとだけ、ひびが、ある所が、ありました。ぼくのつくえの上は、えんぴつ立てと、あと、いろんな物が、ちらかっていました。台所に行くと、ちゃんと、コップなどが、いっぱいわれて、いました。ぼくは、こんな、地震は　初めてです。

ぼくは地震って、こわくないと、思ったけど、じっさいに、見ると、しんぞうが、ドキドキして、はらがいたくなりました。きのうの、地震は、二度と、わすれないだろう。



『日本海中部地震』

4年　泉　谷　純　子

組体そうが終っておうえんせきに　返ると急に　地面が　がたがたと　動いた。わたしは　なんだろうと思った。それは大地震だった。わたしは　地震がおさまるとなんとなく頭の中が　よってきたみたいだった。

校庭のあたりをみると　そう、動いていないと思ったのか　自分の考えていたより三倍も動いたようだった。

わたしは　こんな地震は　はじめてなのでにいおか先生が「校庭のまん中に　集まれ』と言った時に　祐子さんたちと　いっしょに走って校庭のまん中に行った。こわくて、こわくて　祐子さんを中心にして、わたしはふるえた。大きい地震がおさまると　すこし、こわかったのがおさまった。

その時です。三年生が　教室から　口を言わないでひじょうぐちを通って　校庭に　走ってきた。わたしは　三年生が　教室に　いるとは思ってもいなかった。だから、よく、教室、いや学校の中から　にげだしてきたもんだと心の中でかんしんしました。先生がたの方を見るとすごく、わたしたちを　守ってくれて、ひっしな顔をしていた。わたしは　その時、なんとなく先生方が　自分の　親のように　心配してくれたからとっても、たのもしく　とってもやさしい先生に見えた。先生方はとても、こまっているような顔をしていた。

一、二、三、四、五、六年生が　全員ならんでいると　校庭に　また、地震が来るといけないので　コカコーラを　店にもっていく車や　そう式や　けっこん式を　やっている人たちが集って来た。着物をきている人たちは　どうでもいいからというかんじで　きものを、つかんで、わたしたちの校庭に集まって来た。

わたしは　周りを見ると　こわいのもわすれて、こわれている所　はげている所を見まわした。するとじどう館の入口の所の　かべがはげていた。わたしはかべがはげるほどの地震だったので顔ではわらっていたけれども　心の中では　とってもこわかった。それからすこしたつと、山の上の方が　あんぜんだというので　手をつないで山へ行った。

海を見ると、うずがまいていた。そのうずに　船が引っぱられていた。海の水は　港から　とう台に　行く道をおいこすほどだった。わたしは　きけんだというのに　ささのはで　すこし遊んでしまった。山にのぼっても　ちょっとゆれるのでなんとなくこわかった。海を　ずっと見ていると　なんとなく　すいこまれていってしまうようだった。わたしは　いつもすいこまれたりしないのに　すいこまれるようにかんじるとだんだん　頭の中がふらふらする。わたしは　山から学校へ来るといくらかんがえても　こわくなくなった。二時四十五分ころになるとバスに乗った。すると、すこしゆれた。バスがはっしゃしないなあと思うと　ニュースをかけた。その、ニュースは地震のことだった。わたしは　耳をすましてきいた。

家に帰ると　お母さんと弟二人でニュースをみていた。わたしは　ニュースより、おじいさんとおばあさんがいないのでどこへ行ったかきいた。すると、からの田んぼに行ったと　お母は言った。わたしは　おじいさんとおばあさんが　心配になった。わたしは　お母さんと　いっしょに　ニュースを見た。すると　岩崎でのしろの人が　つりをしていて、津波に　さらわれたということが入っていた。わたしは　だんだんおそろしくなって来た。トイレにも　地震がおきるとだめだと思って、行くことがなかなかできないほどだった。

わたしは　日本海中部地震で、ほんとうにおそろしかったです。

『じしんと津波のこわさやひがい』

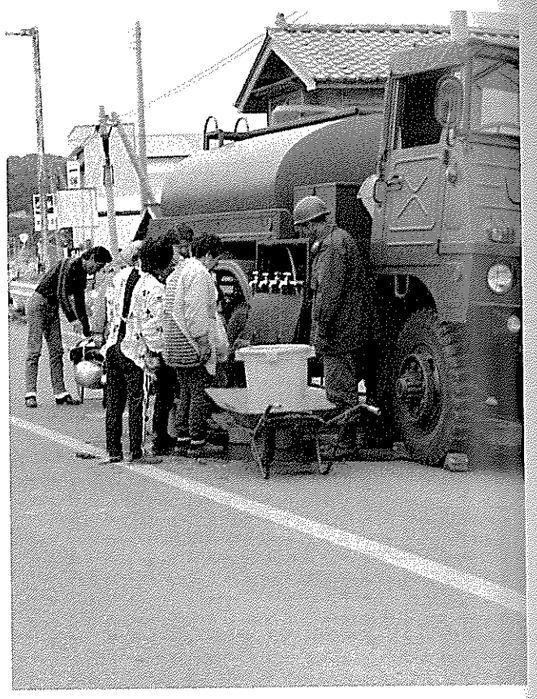
5年A組　早　坂　和　子

五月二十六日に、大じしんがきました。じしんのしんどは、5度です。私たちは、その時、運動会の練習をして、お昼になったので終ろうとしたら、急に「ゴオー」と言う音がして、体育館や、グランドや、みんなが「グラグラグラグラ」とゆれだしました。私は、先生たちに「じしんだ。こっちにこい」といわれるまで、じしんだとは、気がつきませんでした。体が、動かなくなって、しんぞうがとまったようにびっくりしました。みんな、せを低くしてすわって、女の人たちは、泣いていました。私も、家の中にいる、たった一人のお母さんが、心配で心配でたまりませんでした。そして、私はその時、お母さんが助かるなら、私が死んでも、どうなってもいいと思いました。私は、お母さんやお姉ちゃんが、心配で、むねがくるしくなってきました。

するとその時に、友達が、「かず子ちゃんの　お母さん来てらよ」と伝えてくれました。私は、むねがはずむようにうれしくて、暗い所から、明るくてあたたかい所に来たような気持ちになって、ひっしでお母さんをさがしました。でも私はあんまり急いで、お母さんをさがせませんでした。友達が、「あそこさいだべ」と言って指を差しました。その指の方を見ると、私の大事な大事なお母さんがさがしていて、私の方を見ました。するとお母さんは、目になみだをためて、「和子、生きでらな」と言って泣きました。私も、「お母さんが生きている」と思って自然になみだがたまってきました。でも私は、ぜったいに泣きませんでした。

そして少し時間がたって、放送が流れてきました。「みなさんは、高い所にひなんしてください」と言う放送でした。みんな近い山にひなんして、海の様子を見ました。海は、あちこちにうずがまいていて、船や、ボートが「クルクル」と回っていきました。そして黒っぽい波が、大きくもり上がって、津波になって村におしよせてきました。そしてとう台のぼうだけが、海の中にぽつかりつきでていて、後は、何も見えませんでした。そうしているうちに、じしんがおさまりました。みんな下におりてきて、自分の家にもどりました。

もどってみると、私の家は食堂なので、どんぶりやおさら、茶わん、コップなど、みんなおちてわれていました。テレビなどもおちていて、人形や、みんな、ガラスものばかりがわれていました。みんなで手わけしてそうじをしました。どんぶりなどは、使えるような物を少しでもいいから集めました。　ガラスなども、そうじ機ですいとって、みんないっしょうけんめいがんばりました。夜になって、私たちは、またくるといけないので服をきてねました。



私はもう、じしんなんてこなければいいと思います。じしんや津波なんてない、平和な所にいきたいと思います。

『日本海中部地震』

5年B組　塩　谷　雅　俊

組み体そうの練習をしていたときでした。突然グラッと来た地震と言うより、ゴーッと来たと言う方が合っていると思いました。児童館のかべが、はがれ落ちていました。それに体育館のまどが鳴っていました。女の子たちは、ワンワンとないていました。そんな避難現場でした。

そのとき、先生が「津波警報でだど」と言ったとき、なんか力がぬけていくような感じでした。なぜかと言うと、ぼくの家はとっても海に近いからです。ぼくは祈るように山を登って行きました。住吉先生のラジオの音を聞きながら、ふと海を見ると、ガバッと潮がひいてしまいました。このとき「ああ、もう絶望だ」と思っていたら潮がゆっくり、ゆっくり入って来ました。そのとき「ピンポンパンポン」となりました。津波の心配はありませんが、余震の心配があります。と言うのでした。しばらくしてラジオに、「男鹿半島で遠足に来ていた子供たちが津波にさらわれたと言う情報を耳にしました。

家に帰ると津波も入って来ていませんでした。このときやっときんちょうがほぐれました。

『とつぜんおそって来た日本海中部地震』

6年A組　笹　森　　寧

十二時をちょっとすぎた時だ。

ぼく達白組四、五、六年生がちょうど組体そうをおえて、体育館の前に来た時、

「ゴゴゴゴゴ……ガタガタガタ」

というふうにとつぜん体育館が平行四辺形にかたむきながら、ゆれ出しはじめた。ぼくは、

「何だ」

と思ったがすぐ地震だと分かった。新岡先生のさしずで校庭にしゃがんだ。体育館にいた一、二年生も校庭にひなんして来た。小学校の近くの家のブロックべいが右はしからドッとくずれてしまった。地震が少し弱まってきた時、三年生が非常階段をおりてひなんした。

全校生徒がさわいでいるまっ最中に、本村の人達が校庭にひなんしてきた。津波のおそれがあるからだ。リュックをせおってきた人、自動車できた人、仕事先からそのまま来たような人、さまざまだったが着物すがたの人達が目立つ。

ひなんして来た人にじゃまだというので山へ行く事になった。一年生を先頭にし、学年のじゅんで山へ登った。山へ登ると中、ぼくはいろんな事を考えた。山にいる父は大じょうぶか。同じく山へ山さいとりにいっているおばあちゃんは大じょうぶか。家が久田だから下の田んぼにくずれ落ちていないかなどと、いろいろな事を考えた。山から海を見ると、おきへ海水が波となってひいていくのが見えた。いや海水というよりどろ海だ。どろの海がうずをまいておきへおきへとひいていく。こんな光景を見たのは生まれてはじめてだ。

友だちは

「あっあの船いたわしな、新しい船だあら」

などと言い合っていた。ぼくはそんな事より家が心配だった。いや、みんなそんな気持ちだろう。

地震も津波も、もうおそれがなくなったというのでみんな学校にもどった。

バスで帰る事になってバスに乗ったら、ラジオがガンガンなり立てていた。

家に帰ると時計が十二時でとまっていた。テレビをつけると五時まで地震速報で、すごい被害があったという事を知った。夜、九時ごろにきゅう水車が来ると知らせがあったので、おばあちゃんと二人で友達の店の前まで行った。

陸上自えいたいのきゅう水車が来ていてぼくの父の知り合いの人も自えいたいで来ていたので、おばあちゃんといろいろと話をしていた。

その後も余震が続いていたのでぼくはハラハラソワソワしていた。いつまたあの大きな地震が来ると思うと夜もねむれないあり様だった。

数日後、「朝日グラフ」という本を見たら各地の被害を写真で、しかもカラー全ページで出していた。その中で合川南小学校の生との、死体を見たら、身ぶるいがした。苦しそうな顔、ひきつぱった目、カチカチにひえかたまった体。こんなふうに生徒を変えてしまった、大きな津波は思い出しただけでこわい。

この日本海中部地震は八道府県に被害をもたらした、大きな地震だという事が分かった。

『こしがぬけるようだった』

6年B組　萱　森　貴　子

組み立て体そうが終わろうとするときだった。

「グラグラガタ」

と地震が起きた。私は、いつもの簡単な地震だと思いわざと「キャーキャー」

とわめいていた。でも、いつまでもゆれている。びっくりしてしゃがみこむと登志子が泣きながらだきついてきた。先生が、

「ならびなさい」

といったのでならび、津波がくるというので山にひなんした。

山の道を進むにつれて高い所に行くので村の様子がはっきり見えてくる。燈台のまわりを海がくるりぐるりとまわっている。その中を二そうの船がうずまきと同じにくるりぐるりと、しずみながらまわっている。もし、あの船の中にだれかが乗っていたら……。と思うと、なんか　ぞくっとしたような気がした。しおがどんどんひいていく。岩はだがいつも見えないとこまで見えてくる。青空がくもってきた。いつも男の子のようにはしゃいでいる里也子さんも泣いていた。私は、泣いていなかったけど、真紀さんが

「お父さんとお母さんいねぐなれば、わっきゃ生きでいらいね」

というと、今はお昼なので食堂でガスを使っているので、店、大丈夫だべがなあ。と思うと、つい泣いてしまった。でも、と思い歯をくいしばって泣くのをやめた。海を見るとまだ、どんどんしおがひいていっている。深呼吸をして気をおさめたり、里也子さんと松に葉っぱをひっかける遊びをやったり、歌を歌ったりして気分を明るくしていた。そうすると、地震がこわくなくなるのだ。そんな調子で時が過ぎると、うづまきが小さくなくなってきて、ひいていたしおもだんだんおさまって来た。

「校庭にもどりなさい」といった鶴賀先生の言葉を聞くと、ホッ。として足どり軽く山を下って行った。

もう、あの地震から一日たった。私は、家へ帰ると、リュックサックに、でんとうや、菓子をつめて置いてある。いつ地震がきてもいいようにの準備だ。私は、絶対5月26日の日本海中部地震をわすれない。それほどびっくりしてこわかったからだ。

『日本海中部地震の被害』

1年B組　熊　谷　敏　博

ぼくはその日、能代の病院へ行って帰る汽車の中だった。十二時九分発なので、発車するのを待っていた。十二時になり、少したったと思ったとたん突然汽車がゆれだした。

汽車の中は急にザワメキだした。まどの外を見れば、バスが左右にゆれている。カン板が上下左右にゆれている。しばらくしてゆれがとまると、今度は線路が曲ったので汽車が走れないという。こまった。切符の払い戻しになったのはいいが、どうやって帰ればいいだろう。家に何度も電話をかけた。初めはベルが鳴っているが、だんだんおかしくなって、切れてしまう。二時間ほど待った。やっとのことで、自動車学校のマイクロバスに乗って帰ることができた。途中、岩館の人を、おろした。その時、海を見た。トラックが海のあさせにささるようにしておちていた。岩の上には、のり上げられた船もある。岩にぶつかり、くだけた船もある。こなごなになってちらばり波の上にういている船の破へんもある。

家も二、三げんつぶれている。「こわい。」と思った。家の事が心配でしかたがなく、一分でも早く、家に帰りたかった。家に帰り、中の様子を見て、ボー然としてしまった。

醤油はこぼれてるは、たんすの上の物は全部おちているし、テレビもずれているし、仏だんも、写真や、いはいがたおれていた。二階もそうだ。置物がおちてこわれているし、キジのはく製もおちて、しっぽがとれてだめになっていた。貯金箱ならぬ、貯金ビンもおちていて、大破。お金がちらばってガラスの破片といっしょになっていた。外にも裏のガラス戸がはずれてガラスが数枚われていた。つみかさねておいた薪もほとんどくずれ、大変だった。次の日友達から聞いたのだが、岩崎の場合もひどかったらしく、津波のために、笹内川が逆流して水田に水が入ってしまった所もあったそうだ。それから、一週間位、余震が続いて時々だが、グラついていた。でも岩崎は、外の所にくらべるといい方だと思う。いや、よかったかもしれない。今、考えるとゾッとする事だ。今度また、あれ位の地震がきたら、あれ以上の、地震がきたら、どうなるだろう。たぶん想像もつかないぐらいひどい被害だろうと思う。ゆれた、瞬間は非常にこわい気がする。ナムアミダブツといのりたくなるような、感じのする地震だった。

人もたくさん死んだ。
船もたくさんこわれた。
道路もこわれた所もある。
家のつぶれた所もある。

外の、色々な物もこわれた。ぼくは、もうこんなメにあいたくないと思った。でもそれは、ぼくだけじゃなくて外の人も、みんなそう思っていると思う。津波にさらわれて死んでしまい、何日もかかって、やっと死体があがって、その死んだ人もかわいそうだけど、何日も、死体のあがるのを、まっていた人も、かわいそうだと思った。津波なんかの事を、面白半分にぼくも言っていたけど、わらえるもんじゃないと、今になって、思っている。

『マグニチュード7.7』

1年B組　伊　藤　幸　子

いつもの、英語の時間でした。ところが、とつ然、グラッときました。みんな机の下にかくれ、私も、机の下で、早くやめばいいなあ、と思っていました。少し大きいなあ、と不安になってきて、そのうち大きくゆれだしました。机のあしを、しっかりつかんでも、机のあしが、10㎝ぐらいも、あがりました。

「神様、神様」とか、言う声が聞こえたりしました。地震が、おさまって、外へ出る途中落ち着くんだ！と思いながらも、あせって、転んでしまいました。外へでると、なんとか落ち着いてきたけれども、「津波だ！」だれかが、そう言ったのが聞こえたような気がして、「えっ！」と思って海を見ても、何もわかりません。しかし、川をみると、逆流しています。心配になってきました。もし津波がおそってきたら、チャボはどうしよう。避難しているうちに、涙が、出てきました。

学校の中に入って、かばんなどを持ってきた時も、余震が来やしないか、と、びくびくしていて、生きた心地がしませんでした。弁当を食べた後も余震が来ていたりして、落ち着いていられません。今日の事をメモ帳に、書いたりしました。その後地震の事を思い出してみても、なんとなく、夢の中で起こった出来事のような気がしました。でも、夢ではありません。現実に、地盤沈下などを起こしている所もあるし、道路など、幅が30㎝ぐらいに、ひびわれしています。幸い中学校のみんなは、無事だったけど、この地震で、いつもは、あまり、地震が起きた時のことなど、考えてなかったが、今回の地震で、真剣に考えるようになりました。日本海中部地震は、「油断してはいけないよ。」という警告だ、と思いました。

『地震のきた瞬間』

2年B組　神　林　友　広

あんな大きい、そして不意をつく地震にあったのは初めてだった。

また、あのような津波を見るのも、初めてだった。地震のきた瞬間、今までの経験から(たいしたことね、すぐやむべ)と、心の中で思っていた。ところがどうだろう。五秒・十秒たってもおさまらない。それどころか、だんだんゆれが激しくなってくる。ゆれが四十秒ぐらいも続いただろうか。ぼくはただ天井を見て死ぬことばかり考えていた。この天井が落ちてくると、どうやって死ぬのか、頭から血を流して死ぬのか、ぼくの頭の中には「生きる。」という文字がなかった。

成田先生は、教室の中をまるで泳ぐようにわたり歩いていた。最初は先生も笑っていた。しかし長く続いてくると、目がうるんでどうようしていたようだった。

地震がおさまった後、先生の「避難せよ。」という声で外へ出た。そして人数を確認し、校長先生の話を聞いていた。その時はっきりとした音は聞こえなかったが、津波が海水を真っ黒ににごらせ、笹内川をよじのぼってきた。まるで、アマゾン川の大逆流を間近に見たような気がした。

ぼくはこの地震で良いことを学んだ。それは、このような災害になると、すぐ家族のことが気になることだ。家族というものがやっぱりどこかでつながっているからであろう。

一・二・三年の大部分の女生徒も、家族のことを気付かってか、涙をこぼしていた。

今回は、とても良い経験になった。しかしさんざんで恐ろしい一日だった。

これだけは、心の中にはっきり刻み、忘れないようにしたいと思う。

- 日本海中部地震
- 昭和五十八年五月二十六日
- 時刻　正午前後
- マグニチュード7.7
- 震度　五

『日本海中部地震』

3年A組　布　施　則　昭

五月二十六日午前十一時五十八分ごろ、地震がきました。

その地震は、震度五という大きな地震でした。ちょうど、僕は弁当を開いているところに地震がきて、すぐやむだろうと思っていたが、ますます地震は大きくなるばかりで、棚の花びんは落ち、身を守る机は移動して、ただびっくりするばかりでした。

しばらくして、津波があるらしいというアナウンスがでたので、僕たち生徒は一応高台の方へ移動し、そこで生まれて初めて目に見たものは、津波の力、津波の速さ、津波のおそろしさでした。

一度は波はひき、海の中のテトラポットが見え、そこは一瞬、静かな砂漠のようでした。

するとひいた波は、民家の方へもどってきました。

その数分の間に、船は岸にもち上げられ、海で半分見えている船、道は所々に地割れがはいり、学校の中は言葉で言いあらわされないほど物が散らばりました。

僕は初めて地震がこんなにおそろしいものだと知らされました。

今も時々、余震がきていますが、今の気持ちは、もう二度と地震はきてほしくないということです。

『日本海中部地震』

3年A組　大　屋　節　子

―昭和五十八年五月二十六日(木)晴れ―

その日は、午前四時間の授業で、午後は、クラブと委員会、ちょうど報道委員の担当の相馬先生が出張していた日でした。わたしは報道委員長なので、相馬先生の代わり、委員会を進めなければならなくなって、いやだなあと思っていました。

午前三時間の授業が終わり、四時間目は体育、バレーボールをやって、着がえをしていました。その日は、少し早めに着がえていました。相変わらず更衣室の中はさわがしくてわたしが、セーラー服を着ようとして、首にかけた瞬間、グラグラッときたのです。はじめの数秒は軽い地震だと思っていました。ところが地震は、思いがけない強震だったのです。立っていられなくなり、更衣室の中の人達は、みんなしゃがみこみました。壁によりかかって、おさまるのを待っていましたが、更衣室は、せまいので、窓はすぐ近くにあります。

「窓危ね。」

とだれかが言いました。このままではと思って、みんな外に出ました。ドアはガタガタと鳴って、なかなかあけられないようでした。

まっさきに外へ出て、その時は、自分の事しか考えていませんでした。

すぐ、岩石園のクローバーの上に逃げました。落とした時計をポケットに入れ、少ししたらおさまりました。

思わず涙が出てきました。津波警報が出たのです。わたしは、はじめて、家族の事を思い出しました。わたしの家は、海のすぐ近くで、その向かいには、保育所があって、子供達の声が、いつも聞こえます。母や妹の事が気がかりでした。全校生徒が集まって、良い所へ逃げる事になりました。うでに時計をはめながら歩きました。

笹内川が逆流した事を聞きました。

「波ひいだあ。」

そうみんなが言っているのを聞くと、また悲しくなりました。なぐさめてくれる人が何人もいて、少ししたら、気もおちつきました。

津波の心配もなくなったので、わたし達は道路の方へまわって学校へもどりました。家の外に出ている人が多数いました。教室へ入ると、まず目についたのは、花びんがわれている事。ゴミやホコリが落ちていて、きたなくなっていました。全部の道具をかばんにまとめ、外へ持っていって、まだ食べていなかった昼食をとりました。腹が減ってはいけないと思って、たくさん食べようと思いましたが、地震が来るような気がして、すぐやめました。

大事なお金などを、さっき着がえた体操着に入れ、ラジオを聞いていました。すぐ近くの八森の被害の事、地震が秋田沖で、マグニチュード7.7、その付近、もちろん岩崎も含めたあたりは、震度5である事、鉄道が不通の事、津波の被害が続々出ている事など、いろいろ聞きました。地震の名前は、日本海中部地震と後で知りました。岩中の前のクローバーの所は、少し下がっていて、門までの道路は、わきが陥没していました。ちなみに、わたしの被害はネクタイ。更衣室にいってみたところ、わたしのネクタイがなくて、行方不明です。

大間越方面の人は、しばらく待ってから、バスで帰りました。バスの中でも、ラジオは流れていて、外には、鉄道を検査している人、消防団の人などが見えました。

家に帰ったら、母と妹は元気で居ました。保育所の子供達は、みんな家に帰って、保育所の中は静かでした。家の中の後かたずけもだいたいすんでいて、わたしは、自分の机の上などをかたずけました。

後で、今別に居る父から電話がありました。だいじょうぶだったそうです。東京の親せき、追良瀬の親せき、北能代の親せき、妊娠しているおばさんも、みんな無事でした。

うちの母は、地震がきてすぐ、テレビを消して、水の入っている大きなやかんを持って窓から逃げ、そして、その場にやかんを置いてすぐ、保育所へ駆け込み、スリッパをはいて、幼児を一人おんぶして逃げたそうです。妹も学校のみんなと逃げたそうです。

その夜は、非常用の物を用意して寝ましたが、なかなか眠れませんでした。

次の日から、しばらくバス通学が続きました。余震は何度もありました。ヘリコプターや、飛行機も何度も、わたし達の上を飛んでいました。

七月一日、余震はいまだに続いています。わたしのネクタイは、行方不明で忘れられようとしています。オッツブー(サオリ)の親せきを含めた、死者や行方不明を多数出した日本海中部地震は、まだ、その影を残しています。

『日本海中部地震』

3年A組　白　崎　美智代

5月26日正午、体育のバレーボールがおわったので着がえようと、こう衣室の中にいた時である。グラッときたので「地震だ地震だ」とみんなしゃがみこんでわめいている。〝なにすぐおわるさ〟と思っていたが、意外に長く、さすがにこわくなってきて、とっさに頭を守る物はないかと考えていた。窓はガタガタなっていて、今にもはずれそうである。ドアをあけて、避難しようと体育館へ出たら、大量のゴミが降っていた。岩石園の方へ行ったらおさまってきた。しばらくしてからカバンをとろうと数人で中へ入ろうとしたらまたゆれてあわててにげた。そのあとカバンを背負って学校のげんかん前に全校生徒が集合した。みんなが海を見てざわめいている。津波らしい。津波警報が出たので正道沢の山の方へ避難した。泣いている人がたくさんいる。家の人が心配なようだ。私も心配していたけれど〝そんな大きな津波はこないだろう〟と、なぜかそんなふうにひらきなおっていた。

津波警報も解除になり、余震もそんなに大きいのはこないだろうということで家へ帰った。母は公民館へ結婚式に行っていた。家の中に一人で居て地震が来るとこわいので、家の中へ入る気がしなかった。それでも入って家の中をみてびっくりした。台所の方のコップの大部分がおちてわれていた。仏だんの灰は、ぶっとんだのだろう半分ぐらいしか入っていなかった。

二階へ行ってまず姉の部屋をみた。本だなに物があまりあがっていなくて、机も動いている。オルガンからはまん中においたはずのラジカセがおちそうになっていた。次に自分の部屋のドアをあけた。ショックだった。机の上のものも、本だなのものも、ステレオの上のものも、ほとんどが床におちていた。足のふみ場もない。つま先で歩き、レコードを拾い集めた。全て無事だったので安心した。ふと、ステレオの方をみるとオレンジの電気がついていた。あけてみると、揺れのため針がとんで、レコードがかかった状態になっている。そのうち何度か余震がきたので家の中にいるのがいやになって外を出歩いた。電話がなった。深浦の祖母からであった。内容は能代の高校に行ってる姉が、汽車が動かないのでむかえにきてほしいと言ったということだった。母へ連絡しに公民館まで行った。母は結婚式を途中で来て車で私と能代へ行った。能代はすごかった。店はみんなしまっていた。市内から少しはずれた方になると道路にヒビが入ってたり、かんぼつしてたりするのが、めずらしくなかった。ひどくなると、アスファルトが、ぐしゃぐしゃで段々になってるところまであった。八森もひどかった。店内に水がはいってたり橋に津波のためゴミがつっかかってたりして、こんなにもひどかったのか……と地震の大きさにあらためておどろいた。

『日本海中部地震』

3年A組　堀　内　孝　子

「行ってまいりまぁす。」

去る五月二十六日の朝、私はいつもと同じように家を出た。天気は晴れていた。電線にスズメも止まっていたし見上げる空にはトンビが獲物を深す姿もあった。耳をすませば、山にいる鳥のさえずりも聞こえていた。

全くいつもと変わらぬ日だった。…でもこれが後になって、あんな事になるとは誰一人思っていなかったし、誰一人として予想する人もいなかった。

十一時五十八分、恐しいことが起こった。地の底からこみ上げる奇怪な音と共に大地は揺れ動きふりまわされた。私達は何が何だか分からないまま、足の先から頭の先、イヤ、体全体にのしかかって来る恐怖感におののいていた。

とにかく避難するのが先決、というのでガクガクの足を運び、なんとか外に出ることが出来た。その間約三分、その三分という時間、私は十倍にも百倍にも感じた。たった百八十秒の間、その間に感じた恐怖感、それは、一生涯忘れることの出来ない時間になってしまった。

村の臨時放送が流れた。

「ただ今の地震により津波警報発令、村民のみなさんは高台に避難して下さい。くりかえします……。」

津波なんて思いもしなかった。第一私達は津波を体験したこともないし、どんなモノだか考える余裕がなかった。

ほとんどの人が海岸ぞいに家がある。私もその中の一人だった。家には……犬のアロとコロと猫のチャコがいる。犬達は水が来ても泳いで逃げるとして……チャコ。

チャコだけは家の前が国道だし昼間家の中には誰もいないということから鎖でつながれていた。犬は逃げてもチャコは鎖がじゃまで逃げられない。

かわいそうでしかたがなかった。不安で心配でどうしようもなかった。そんな気持ちを裏切るかのように余震はまだ続いていた。

私達は、しばふの上にかたまってラジオの声に耳をかたむけていた。

〈男鹿半島へ遠足に来ていた子供達が津波にさらわれた。〉

とか、ラジオはこの地震のあった悲惨な事件を私達の頭の奥に次々とたたき込んでいった。その都度つのる不安と恐怖、余震が来るたびこのくりかえし、ぶじに家に行けるかも心配だった。ラジオの声はますます激しく心にたたき込む。……私達の心もますます深く沈んでいった。

今日もいつもと変わらぬ朝を向かえた。だけど今この時だって一分後、一秒後、何が起こるか分からない。私は二度とあんな悲惨な出来事が起こらないよう願いたい。

〝日本海中部地震〟と名ずけられた、恐しい自然現象に！。

『地震に遭遇して』

日本海中部地震の時は、大変お世話になり、ありがとうございました。

五月二十六日、中学校最後の遠足ということで胸をはずませながら、私達は十二湖へやってきました。昼近く、青く深く光る青池や、雄大な日本キャニオン資料館など、三百余名が四方に散らばり、見学していた時でした。

突然「グラグラグラ」という地響きと「ザワザワザワ」という木の揺れる音がしたかと思うと、立つことさえ出来ない揺れが私達を襲いました。足元から地割れが出来、大木は今にも倒れそうでした。土砂が崩れかかり「キャーッ」と悲鳴をあげ、友達同志体を寄せあう人、あわてて木にしがみつく人、その反面何事もなかったように平然と歩く人などさまざまでした。

私達のいた「落口ノ池」付近では、オームリの小屋が「ガタガタガタ……」と揺れていたかと思うと「ガッシャーン」というガラスの割れる音と共に崩れ去っていきました。

「私達もこのまま池に沈んでいくんじゃ」という恐怖感に身動きさえ出来ず、ただ友達と体を寄せあい、揺れがおさまるのを待っていました。揺れがおさまってから、私達は必死に集合場所へと走りました。何分もしないうちに四方から十人二十人と集まり、バスに乗りこんだものの、ふいに襲ってきた地震、はじめて体験する大地震に、これから先への不安で目に涙をため「帰りたい」とつぶやく人や何も言わず、うつむきかげんな人などさまざまでした。

ラジオから流れる事故の報道を聞いては自分の家を心配する人も何人かいました。

電話が通じなくて、一瞬のうちに〝陸の孤島〟と化した十二湖でした。「道路に亀裂が生じ、交通が遮断されている」ということを聞いた時は、「歩いてでも家に帰りたい」とつぶやく人さえいました。時おり続く余震におののきながら、車内に三時間程いたでしょうか。恐怖心や不安感もうすれてきて友達同志で話をしていたら、「復旧作業が整いました。バスから降りてください。歩いてふもとの入口まで行きます」と先生が言いました。「やっと帰れる」という安心感がありました。しかし、地震の時の地響きが耳にまだ残っていました。歩いていく途中、道路工事の道具を持って、黙々と作業している人達に出逢いました。その時「ごくろうさまです」と声をかけようかなあと思いましたが、心の底に恥ずかしさがあり、言葉をかけずにその場を急ぎ足で去りました。一言、声をかけたならどんなに快い思いをしたことか。今になって後悔しています。

入口まで歩き、各組ごとにバスに乗りこむと、もう心は家へと急ぎ出していました。疲れて眠る人、トランプで遊ぶ人と普通の遠足の帰りと同じでした。窓から広い海が見えました。ずうっと平らな水平線。海は何事もなかったようにおだやかに夕日をうつしだしていました。

しかし、おだやかだったのは海だけでした。崩壊してしまった家、〝く〟の字に曲がってしまった線路。舟が岸にうちあげられ、小屋につっこんでいたり、窓という窓、全てが割れてしまった家もありました。ブロックべいはこなごなになり、道路に断層ができデコボコでした。断水になってしまったのか、バケツなどを持ち、給水車を待つ人々の列が地震のものすごさを語っていました。

三百余名の生徒が誰一人として、ケガをすることなく、当日中に帰宅できたのは奇跡に近いことだと思います。それは、なんの面識もない、話をしたこともない村の方々が、こわれたかもしれない自分の家や、メチャクチャになったかもしれない自分の畑、自分の家族の安否よりも何よりも、私達の安否を気遣い、敏速に復旧作業をしてくださったおかげだと思います。

中学校生活最後の遠足――。それは地震という一つの災害によって心に強烈に焼きついて忘れないでしょう。しかし、そのおかげで村の方々の団結力とあふれる程の思いやりをひしひしと感じることができた貴重な体験だと思います。

あの地震は私達に「献身的な態度」「自分を犠牲にしてでも相手を思う心」とは、どういうことかを考えさせるためのものだったような気がしました。

あとから先生が教えてくれましたが村の方々は、復旧のメドがたたなければ公民館に宿泊できるように配慮していたとのこと。あたたかい心づかいとてもうれしかったです。

現在、私達は一学期の中間テストを終え最後の中体連へ向けて日が暮れるまで部活に励んでいます。

村の方々のおかげで地震という恐ろしい出来事があたたかい心づかいという素敵なオブラートで包みこまれ忘れることはないでしょう。新聞その他の報道で復旧作業がすすめられているということを知りましたが、被害がとてもひどかったとも聞きました。

一日も早く完全復旧することを祈っています。

村の方々に身をもって教えていただいた「思いやり」を私達が、これから先実践していかなければならないと思います。

私達の日常での心がまえの一つを教えていただき本当にどうもありがとうございました。

六月十五日

鶴田中学校三学年
代表　加賀谷　孝　子

岩崎村長
堀内　辰悦様

『津波に襲われた初めての釣り』

能代市上町
関戸　広司（43歳）

初めての釣りだった。それも船釣りをしていて津波に遭ったのが能代市上町の菓子店経営、関戸広司さん(43)。あの日、岩崎村沖でカレイ釣りをしていたのだが、秋田、青森両県の日本海沿岸部をひとのみした津波はほとんど感じなかった。しかし、岸からの返し波に船は山頂から谷底に落ちていくほど大きく揺れ、船から振り落とされないように必死でトモにしがみついた。そして、「これは津波だ!!」ということで、何んとか漁港に戻ったら停泊中の船や周辺の家はメチャクチャ。岸壁近くに駐車していた愛車は波にさらわれ、跡形もない。そのとき初めてゾッとするような恐怖感に襲われた。

友人にカレイ釣りに誘われ、休日だった二十六日早朝、五人で関戸さんの車に乗り出かけた。目的地は県境を越えた岩崎。午前六時半ごろ岩崎漁港に到着。五トンの漁船で岩崎沖約二キロの地点で短い船サオをおろした。

快晴に恵まれ、絶好の釣り日和、べたなぎだったが初めての釣りとあって船酔いし、青くなって吐いたりもした。それでも、二十センチ以上のカレイを五、六匹あげ「これはおもしろい」と、調子が出たころだった。

突然、下から突き上げられるような「ガタガタ」という激しい揺れ。エンジンは止めているのにおかしい。陸の方に目をやると十二湖の日本キャニオンの白い肌が数ケ所で白い土煙りをあげ崩れていくのがはっきりみえた。「これは地震だ」とみんなで話した。しかし、それほどとも思わなかった。

そのうち「ピーポ、ピーポ」と救急車は走り回る。備え付けのスピーカーは何かを叫び続け異様な雰囲気が次第に感じられてきた。

そんな思いが不安をさらにかきたてた。そして無線に「津波警報」が飛び込んできた。全員「ギョッ」とした表情。陸に上がろうと船頭に催促した。三十歳すぎの若い船頭は、判断に迷い五分間ほど考え込んでいたが陸へ向った。沖で津波をやりすごすか迷ったのだと思う。そこに岸からの大きな返し波がやってきた。沖からの津波を恐れていたのに、大波は岸から襲ってきたのだ。船が波の頂に持ち上げられ、谷底に一気に落ちる恐怖に包まれた。波間に船がすっぽりと入り込む。視界は波だけとなる。立ったままで、振り落とされないように船にぎっちりしがみついた。足が宙に浮き、ガタッと甲板に落ちる。「転覆する。岸に着けない」、怖さだけが先走った。

十回ほどの大波を乗り越えたろうか。やっと波が治りかけた。

早く帰りたい。船頭も全員そう思いエンジンを全開にして岸に向ったが、すぐ近くにいた漁船から「岸に近づくな！」と叫ばれ、釣りをしてた地点に戻り停泊した。

何度となく引いたり満ちたりする不気味な潮の流れに乗って、岸から廃材やゴミ、ムッとするにおいのするドス黒い重油が流れてくる。転覆したモーターボートも流れてきた。仲間のものと見えて船頭が船につないだ。ラジオでは能代港の惨状が次々と伝えられるうえ、無線では岩崎漁港に沈没船や浮遊物が多く入港できないということを連絡してきた。家の事も心配だが、これでは夜までは港に帰れないと覚悟を決めた。近くに漁船や港湾作業船三隻が停船しているのが心強かった。

その一隻の船頭が機転を働かせ、モーターボートなら港に入れる、といい、船をその場に停泊させ、四隻の全員がモーターボートに乗って港に向かい、無事に岸壁に到着した。午後五時半ごろだった。

しかし、漁港の漁船は転覆、沈没、大破。周辺の家もナギ倒され、廃材が海面に浮き、〝廃虚〟と化していた。

出発のとき見せた穏やかな漁村風景から、目を疑うような地獄の光景に変わっていた。

そして、岸壁から四十メートル離れた場所に駐車してあった買ったばかりの愛車は波にさらわれ跡形もない。返し波の怖さはあったが、沖にいてほとんど感じなかった津波がこれほどまでの破壊力をもっていたことに改めて身の毛がよだつ思いだった。

自宅に電話をかけ、五人を迎えにきてもらったが、友人宅では、てっきり遭難したと思い仏壇を掃除して待っていたといい、うれしさを通り越して大笑いした。

そして次の朝、新聞で、数多くの犠牲者を出した津波を知り、自らの幸運をいまかみしめている。

（北羽新報　S58・6・5より転記）

『忘れることのできない津波の恐怖』

大間越
蝦　名　理三郎（45歳）

県境近くの浜で午前中の漁獲を終って磯舟を波際に寄せて機関部の点検をしていた私は何か山鳴りを感じたのです。海を背にしていた私の目に映ったのは山峡の雑木林が大きく揺れていたのです。

北側も南側の斜面も山峡全体が動いている感じであったのです。瞬間的に時計を見たのです。時計は十二時０３分でした。

地震だなあと思ったのです。それでもまさか津波が来ることは予想もしませんでしたが何か胸騒ぎを覚えながら磯舟を陸に揚げる準備を続けていたのです。

海に背をむけていただけに津波のことは考えずにとにかく磯舟の始末だけを考えていたのです。

その間余り長い時間ではありません。ふと私の立っていた渚の波が静かにひけているのを見たのです。それでもまだ津波とは思っていなかったのです。

体験のないことは恐しいことです。津波の前ぶれだったのです。そのことが津波とわかれば逃げたのですがそのまま仕事をしていたのです。手を休めて後を振り返った時はすでに津波の第一波が私に襲いかかって来たのです。驚いた私は波に足元をとられるまま逃げ場を失ってうろうろしているうちに津波の中に呑まれていたのです。

それから数分間波に流されて意識を失い漂っていたのですが私の記憶はさだかでありません、海水を飲み流されていたのです。

ふと気がついたとき私は波の中にそして足の部分にロープが絡みついていたのです。

私はそのロープを夢中に掴んでいたことを覚えています。

そのロープは私の船揚機に使用していたもので普通はワイヤ・ロープなのですがその代用に麻ロープを使用していたのが津波に流されていた私の足に絡む結果になったのです。

これが不幸中の幸でした。第一波につづいての津波の動きにほんろうされながら私は助けを求める声も出せずにその波に何度か、もまれながら私の体は沿岸にある防潮堤を越えてその内側に打ち上げられたのです。附近に居合わせた漁師の仲間が駆けつけたときは私はただ呆然としていた様子です。仲間達が話した言葉もよく記憶していませんが私は津波に流され一本のロープのお陰で助かったのです。

私はあの時のことを想出すと、あの津波の瞬間の恐しさは今も肌寒さを覚えます。

海を仕事場にもつ、それが一つの生きる糧としている者の一人として、このいまわしい悪夢のごとき貴重な体験を祖先からうけついで来た自然をそのうけ継ぐ子らに永く記録し伝えねばと思う忘れることのできない津波の恐怖でした。

『日本海中部地震による体験記』

「おしん」で助かる人、救出寸前で流される人

岩崎
七　戸　　猛（61歳）

朝四時に起床、薪ストーブに火を入れ、お湯をわかし、コーヒーを飲みながらレコードをかけ、サブちゃんの懐かしのメロディーを聴き一服するのが私の日課の始まりです。その日は家内と山へタケノコ採りに行くことになっていましたので、その準備を済ませ五時半頃愛犬「純」を連れて海岸を散歩しました。

天候はよく絶好の釣り日和で、しかもベタナギでした。そこで、このなぎをのがしては海の幸は採れないと考え、家内と話し合い急遽海へ出かけることにしました。早めに朝食を済ませ海見器、ヤス、特長ぐつを持って港へ行き、家内と純を船に乗せ出発したのは七時ころでした。二十馬力のエンジンは快調。目的地の舳作、椿山方面へ突っ走りました。崩山、白神岳、十二湖のキャニオンまで雲一つなく実によい眺めでした。沖にはキス、カレイ釣りの船が見えました。立待岬と沢辺海岸の眺めもすばらしく、水の碧、わにロを通り椿山海岸へ着いたのは七時半ころでした。久し振りに見る椿山の全景と温泉の湧き出る湯煙をみて一服した気分は、実に壮快そのものでした。かつて、教職時代に剣道部の生徒を連れ夏休みにこの場所で毎年キャンプをしたことを思い出しました。二十年も前のことで当時は魚、サザエ、アワビ、海草類も豊富で、一時間ばかり子供達と潜れば沢山採れたもので朝から海の幸をふんだんに食べたものでした。特長ぐつをはき海見器とヤスを持って岩場づたいに魚やサザエを探し回りました。家内はコブのりを採っていましたが、なんだか急に帰りたい気持ちになって、一時間ばかりで椿山をあとにし岩崎の立待岬へと引き返しました。島の浅瀬に昔からの舟だまりがあるので、そこへ舟をつなぎ、九時過ぎから漁にとりかかりました。岬の東側つまり岩崎寄りの岩場を丹念に見てサザエやウニを採りました。

ウニはすぐ家内が貝を割り海水でよく洗い身をパックにつめました。十一時頃だったと思います。ウニ、サザエを採り尽くしたので裏側へ行こうと思って一服していたら、一人の釣り人が岬の方へ行き、島の先端で釣り始めました。私はお昼までもう少し採ろうと思い西側の岩場から漁をしました。

このころから磯波が荒くなり海見器で海中を見ていると顔や肩までしぶきがかかるようになり、いい場所まで入れなくなり、比較的波の穏やかな所を見て漁をしました。そうこうしているうちに、岬の最先端の釣り人の後方近くまで行ってサザエを採っていると釣り人がうしろを見て、人なつこく「だんなさん、何採っているの」と話しかけてきました。「サザエやウニですよ」と言ったら「いいですね」といって笑いかけていました。私がちょっと見ているうちに一・二匹アブラメを釣り上げて大変喜んでいました。背丈のすらっとした四十歳前後の日焼けした温厚そうな方でした。私がすぐ隣の岩場へ移動している間、家内ともなにか話していたようです。

潮の流れが多少速くなって、両足と腰に力をいれふんばって漁をしていました。穴場にサザエが七つ八つとかたまっていて、ヤスで突いてはビクに入れ、面白いほど採れました。

こんなことは最近珍しいことだと思っていた矢先です。グラグラッと岩場が揺れ出し、地震と気づいて海から岩場へあがると更にゆらゆらっと岩が動き出し、今にも岩が割れ、崩れていくのではないかと思うほどでした。家内は平坦な岩場に座り、すぐ向かいの釣り人は立ったままの状態で三人とも顔を見合わせて「地震ですね」と言いあいました。その間わずか二、三分だったと思うが実に長く感じられこの震度では陸の方は相当揺れがすごかったと思いました。

地震がおさまり家内が日課のＮＨＫテレビの「おしん」を見ようと促したので、釣り人と別れ、船まで四、五分歩く途中、岩の割れ目や水溜りの所がブツブツと異様な音をたてて泡だち、まるで火山が爆発するのではないかと思うほどでした。

船へヤス、海見器、ビクを入れ出発しようとしたら、船尾が岩にひっかかり動きません。家内と犬をおろし、ひと波がくれば船が離れ出発できると思い、ちょっと潮待ちをしていました。この間一、二分。その時でした。目の前が異様に高く一様になり、白煙をあげて波が押し寄せて来るではありませんか、とっさに家内を近くの岩壁へ登るよう命じ、私は船へ飛び乗りました。この間数秒。二メートル近くよじ登った家内の足元十センチぐらいまで、波が打ち寄せると同時に、第一波が船の真横から来襲、ロープは切れ、三、四十メートルは一気に流されたと思います。津波の高さは約二メートル、船の機械場にしがみつき、船と波とのバランスをとるのに無我夢中でした。この時、沖の方から「オーイ、助けて！」と叫ぶけたましい声が響きました。岬で見た釣り人が波にさらわれて、見えつかくれつ四、五十メートルほど先を流されているではありませんか。とっさにペラをおろしエンジンをかけ、救助に向かいました。どれくらい走ったろうか。突然「ガーン」という音がしてペラ軸が折れエンジンは空転するばかりです。船は進まずそのうちにまた波が来る。引く。私は船のともから中心部に移動し、ヤスのほこを持って船をあやつりました。そうこうしているうちに釣り人は波にまかれて見えなくなりました。岬をみれば、一番高い岩山が一、二尺ほど波間に見え、あたり一面波ばかりでした。（後日岬の一番高い所を実測したら七・二メートルありました。）さだかではないが三波、四波の津波の高さは七メートル近いものだったと思われます。陸の方からだれか叫んでいるがよく聞きとれません。そのうちに引き潮が始まり船は沖合いにどんどん流されました、あたかも飛行機で自爆して行くような早さでした。また立待岬の海底がすっかり見え、船もろとも吸い込まれて行く思いがしました。「どすん」というにぶい音とともに岩礁に船が乗り上がり、体が前のめりになりました。船から立待岬まで陸地化したのにはびっくり波は洪水のように流れ去り、あたり一面は岩と砂場だけになり、「逃げるのは今だ」と判断し、船から飛び降りて一目散に陸地へ。高台へ登ったら家内と純、友人の川口さんがいて、お互いに無事を確かめ合い九死に一生を得ることができました。

運、不運は紙一重である。助かって初めて津波の恐ろしさがひしひしとわかってきました。一息いれている所へ岩崎消防署、消防団の方々四、五名、救助にかけつけて下さいました。又、その後まもなく山をくだって松林喜之作さんが救助に来てくれました。有難いことです。紙面をかりて衷心より厚くお礼を申し上げます。尚、後日、わかったのですが遭難をのがれ、沖合いに避難した石戸谷毅さんが無線で今朝、でかけた冬の先生の安否をきづかい連絡をとって下さったとのこと、これまた厚くお礼を申し上げます。

ただ返すがえすも残念だったことは、釣り人の秋田県能代市の河内さんを救助することが私の力で出来なかったことです。

最後に釣り人、河内敏彦様の御冥福を心からお祈り申し上げますとともに御遺族の今後の人生に幸の多からんことを心から祈念します。

参考まで次のことをつけ加えておきます。

1．地震発生後、津波が来襲することは全然考えなかった。
2．立待岬では地震後七分前後で津波が来た。
　（干潮は十センチぐらいか）
3．釣り人も船で出かけた私自身も救命胴衣を着用していなかった。
4．経験がないので津波に流されても助かるまで津波とは思わなかった。
5．お互いラジオを持参してなかった。

『揚げ船よりも繋ぎ船、備えあれば憂なし、出漁に救命胴衣を持ちましょう』

沢辺
堀　内　和三郎（70歳）

㈠　揚げ船よりも繋ぎ船

当日は、本当に最近にない静かな磯まわり日和で私も八時頃海に出かけ、さざえ並にもずくを採り十時頃舟つけ澗に帰り舟を五メートル位仮揚げして家に帰り昼食を済ませ午後の出漁の為一休みする矢先でした。「グラグラッ」と動き出したのです。「ハッ」地震だ……。しかし、すぐ止むだろうと思い頭上からの落下物を防ぐために座布団を頭の上にのっけて座って居ましたが容易に止みそうもないので私も外へ出ましたら家内と向いの店の母さんが桜の大木に掴まって居り、まるで「セミ」が大木にくっつくような恰好に見え幾分滑稽のようでしたが私も傍にある柿の木につかまり難を忍んで居たのです。そしている内に隣の家の親戚の人が下町の方から避難して来たと言う。「何の為に」と聞いたら、「今津波が来そうだ。海の水が〝のり島〟まで引けてしまった」と言うではありませんか。「スワッ」大変だ舟がと思い「バイク」で走り出しましたが途中、カベ坂（中頃）まで行くと磯辺は流木やらチャッカーなど、ゴミその他の磯舟も入り混って沖へ流れてゆくではありませんか。私の磯舟に似た舟もまるで木の葉の如く沖の方に出てゆく様子を見て、もう駄目だと観念して私の舟揚場まで行ってみると私の舟はちゃんと幅四メートル程の川（地蔵川）を横ぎって護岸の外側にあるテトラポットの上にちゃっかり、人手でもって揚げたように船外機が付いたそのまま、しかも〝やす〟・〝かい〟等も元のまま舟に積まさっているではありませんか。全く運が良かったのです。

それにしても仮揚げした時使用した「ワイヤー」と「繋ぎロープ」ががっちり結ばれていたからだと思います。

何がともあれ古老の言う「揚げ舟よりも繋ぎ舟」とよく言う言葉をしみじみと感じさせられた体験でした。

㈡　備えあれば憂なし

「災害は忘れた頃にやって来る」とよく言われます。

今回の日本海中部地震（昭和58年5月26日午後零時18秒・マグニチュード7.7）は日本海側で発生した地震としては、最大級でかつてないと言う。比較的近い時点での地震地を列記すると、

1．関東大震災　大正12年　M7.7
2．三陸地震　昭和8年　M8.3
3．男鹿半島地震　昭和14年　M7.0
4．二ツ井地震　昭和30年　M5.9
5．男鹿沖地震　昭和39年　M6.9
6．新潟地震　昭和39年　M7.5
7．十勝沖地震　昭和43年　M7.9
8．宮城県沖地震　昭和53年　M7.4
9．日本海中部地震　昭和58年5月26日　M7.7

大体拾いあげてみても、これだけ地震があるとすれば、決して一日として油断すべきではないと思います。地震の発生があったら速ぐ津波来襲を連想すべきではないでしょうか。

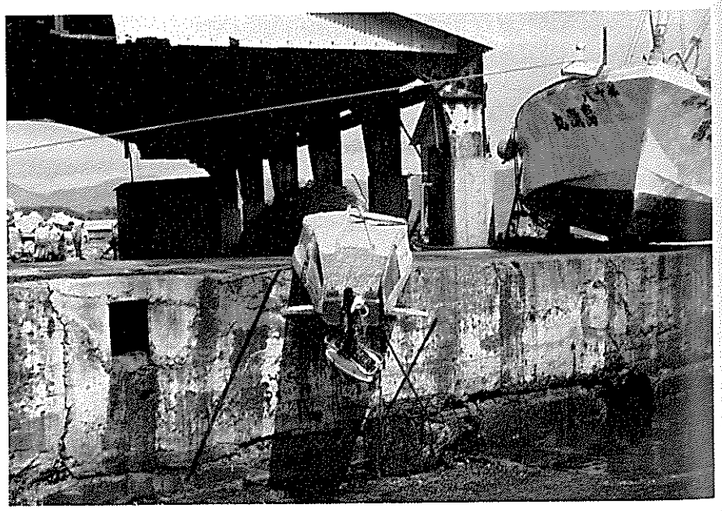
日本海の漁民は地震と言う言葉は知っていたでしょうが津波という言葉は私を始めとして忘れかけていたのだと思います。

㈢　出漁に救命胴衣を持ちましょう

私が下北の大間町にて在勤中の話しですが、大間町でも屈指の荒くれ漁師と言われた泉某が津軽海峡で四屯程のチャッカーに乗り鮪の一本釣中誤って海に転落した。舟は一人乗りの動力船。走って引き釣りしないと釣れない為、船頭が転落しても船はどんどん走る。転落した本人咄嗟に穿いていた長靴をぬぎ空気を入れ逆さまに浮かして「浮子」代わりにして漂流し約三十分程で僚船に助けられ命拾いをした話しを聞いたことがあるが、それも小さくとも「浮子」の為に助かったのだと思います。

此の度、秋田県だけでも死者八十三名と発表されております。秋田県つり連合会で編集した『釣り人が証言する。日本海中部地震大津波に襲われた』での証言記録を読んで、これが若し救命胴衣を各々が持参していてこれを使用していたなら恐らく半分は助かったのではなかろうかと思われました。

私は心から叫びたい、「出漁に救命胴衣を持ちましょう」と。



資料編

日本海中部地震によるわが村の災害状況調

被害総額 17億７千万円
（村財政の１年分を上回る）

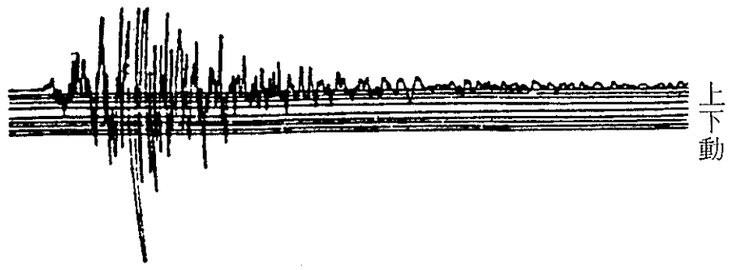
昭和58年６月６日　正午現在

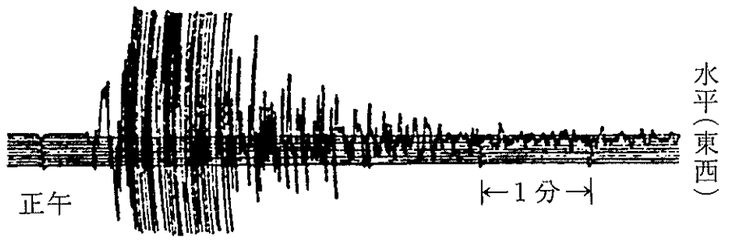
災害区分		件数	災害見積額(千円)	内容
人的被害		１人		死亡（能代市・釣人）
家屋	住家	42戸	104,790	半壊６戸、一部破損25戸、床上浸水１戸、床下浸水10戸
	非住家	11戸	120,214	全壊（農業倉庫２、製材所１）、半壊８
施設	公共建物(学校)	３校	8,071	岩崎小学校エントツ決壊、校舎亀裂、岩崎南小学校校舎亀裂、岩崎中学校校舎亀裂
	公共建物(その他)	17ヶ所	27,950	役場庁舎、各地区生活改善センター　外
	水道	３水源地	10,000	岩崎水源地本管破損、黒崎水源地送水管破損、沢辺水源地本管破損
	漁港	４ヶ所	220,000	堤防崩壊４ヶ所
	水産施設	３ヶ所	30,000	貯氷庫１、給油タンク１、荷捌所１
道路		12線	112,600	国道・県道６線崩壊、村道６線崩壊
河川		３ヶ所	5,000	護岸等崩壊
がけ崩れ		全域	70,000	急傾斜がけ崩れ
国鉄		１ヶ所	25,000	橋の亀裂１ヶ所
農道		３ヶ所	32,000	亀裂１ヶ所、陥没１ヶ所、落石１ヶ所
林道		３ヶ所	28,000	路肩決壊１ヶ所、土砂崩れ１ヶ所、崩壊１ヶ所
水路		６ヶ所	71,100	土砂崩れ１ヶ所、決壊３ヶ所、亀裂２ヶ所
水田		全域	4,180	冠水、浮苗、陥落 2.55ha
ため池		２ヶ所	110,000	亀裂２ヶ所
漁船		66隻	272,000	滅失16隻、流失20隻、破損30隻
漁具等		全域	376,870	カニカゴ、エビカゴ、網　外
商工被害		全域	92,709	商品、什器、備品
その他			5,500	自動車７台
自然休養林地内			51,140	遊歩道、えん堤　外
計			1,777,124	

青森地方気象台が とらえた５月26日の 12時00分22秒 地震

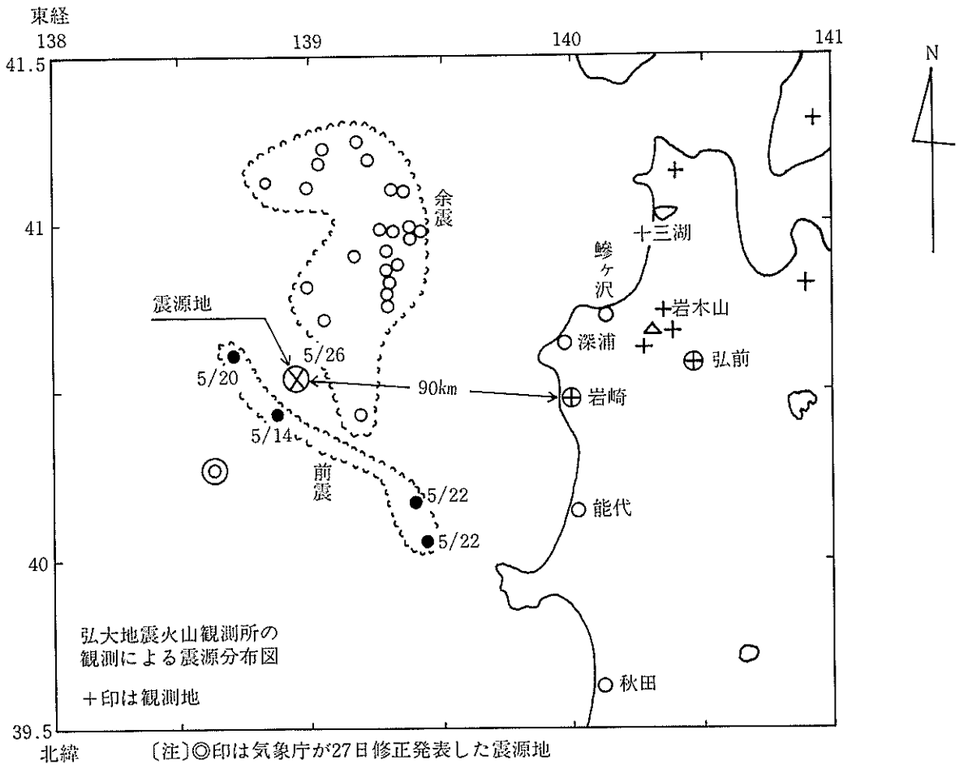
これがM7.7

地震計



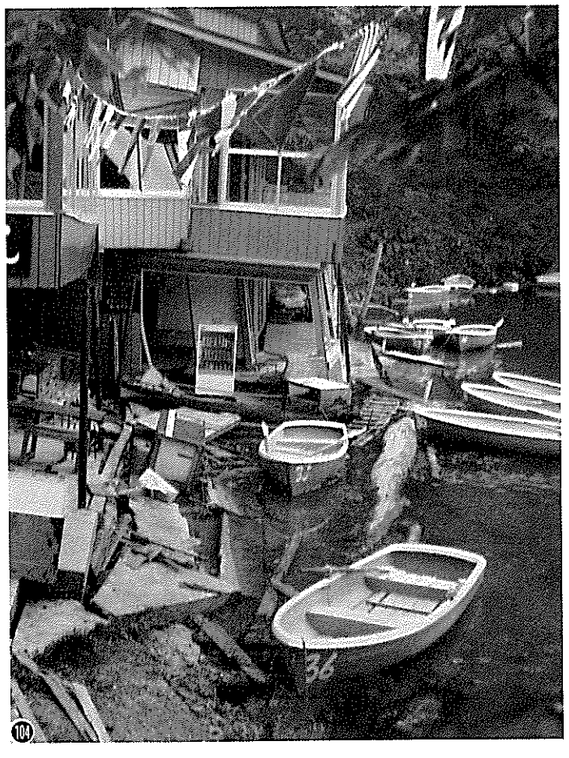


観測史上最大の規模

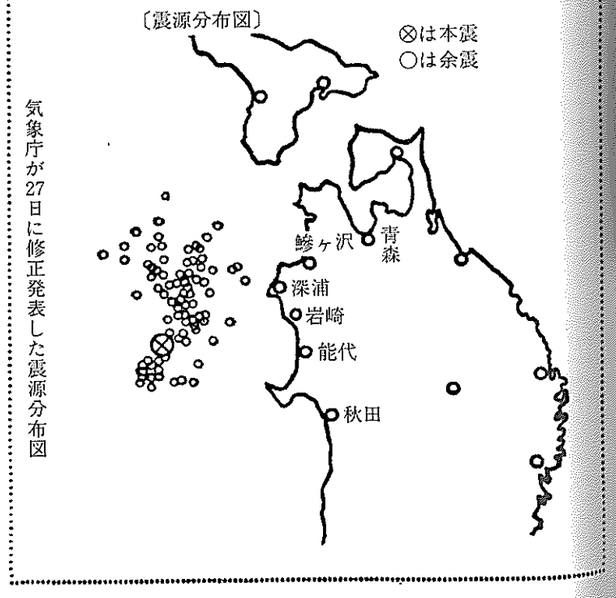


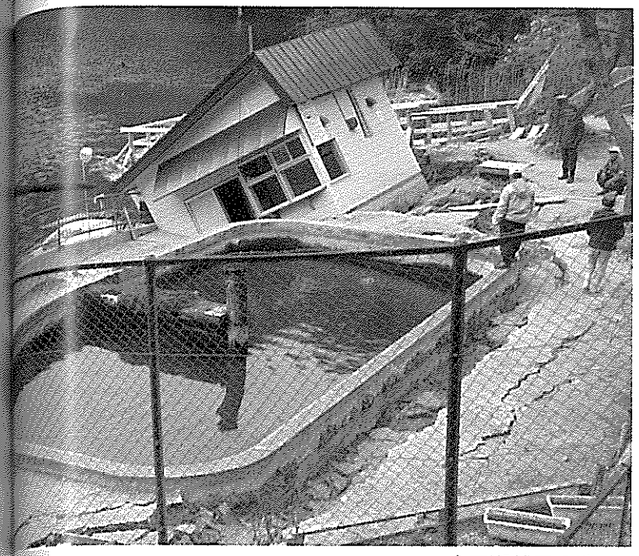
〔注〕◎印は気象庁が27日修正発表した震源地

余震の分布と震源地

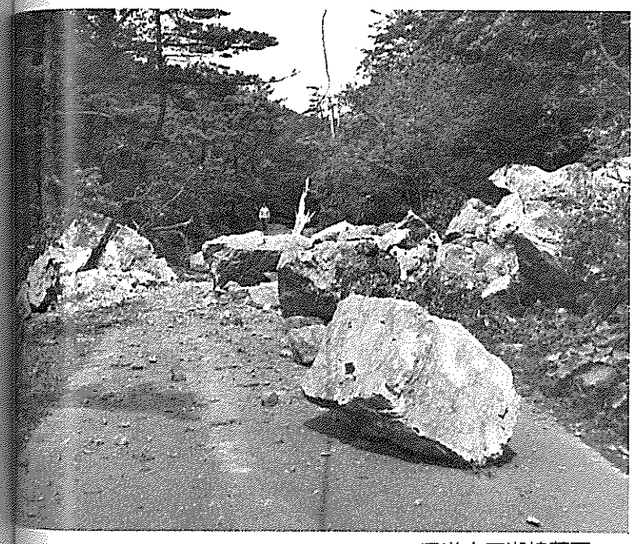


閑静な十二湖・一瞬のうちに荒廃した民宿

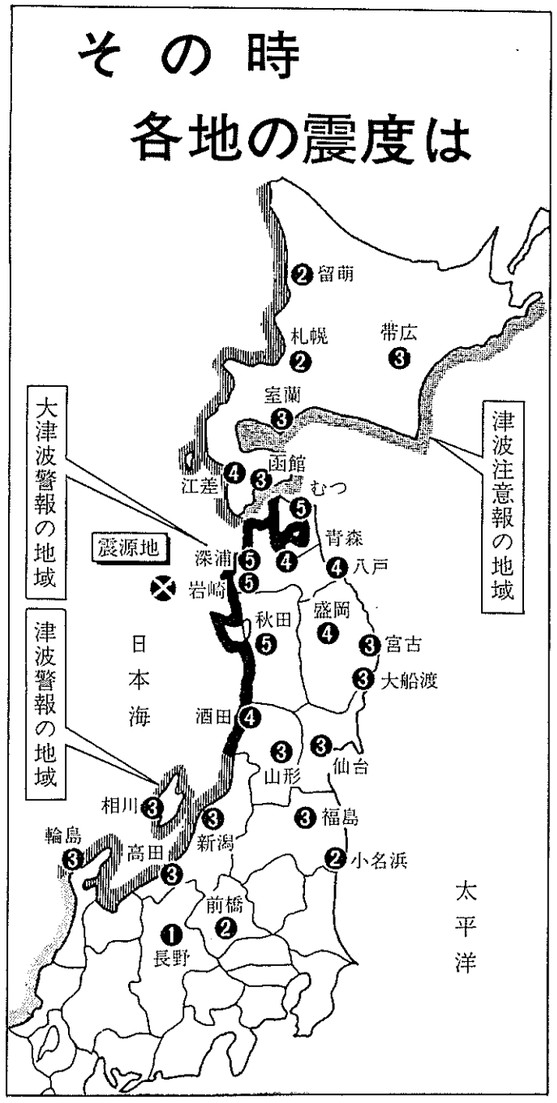




十二湖越口の池



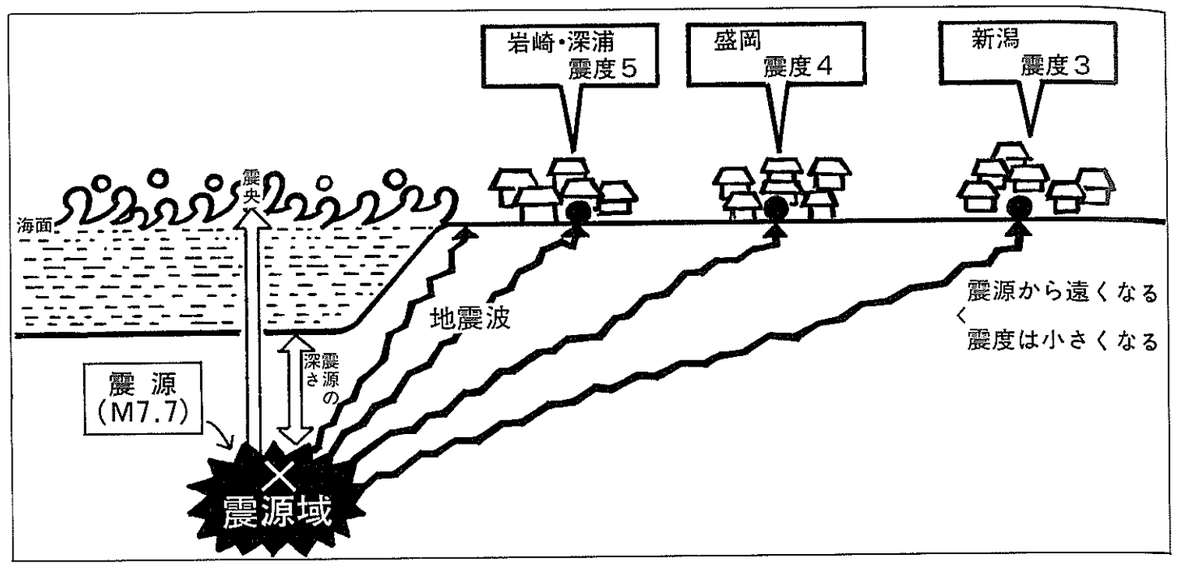
県道十二湖線落石



県道十二湖線
各所で寸断

マグニチュード(M)と震度の関係

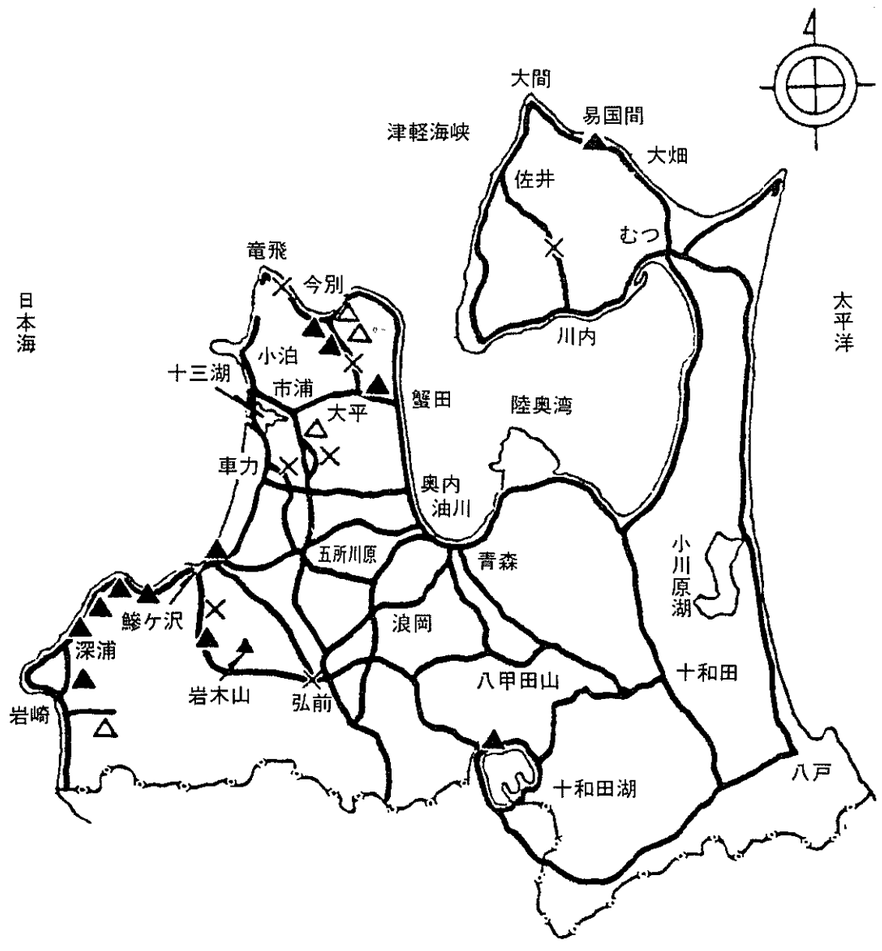
〈日本海中部地震の例〉



道路障害個所

（28日午後1時現在県道路維持課調べ）

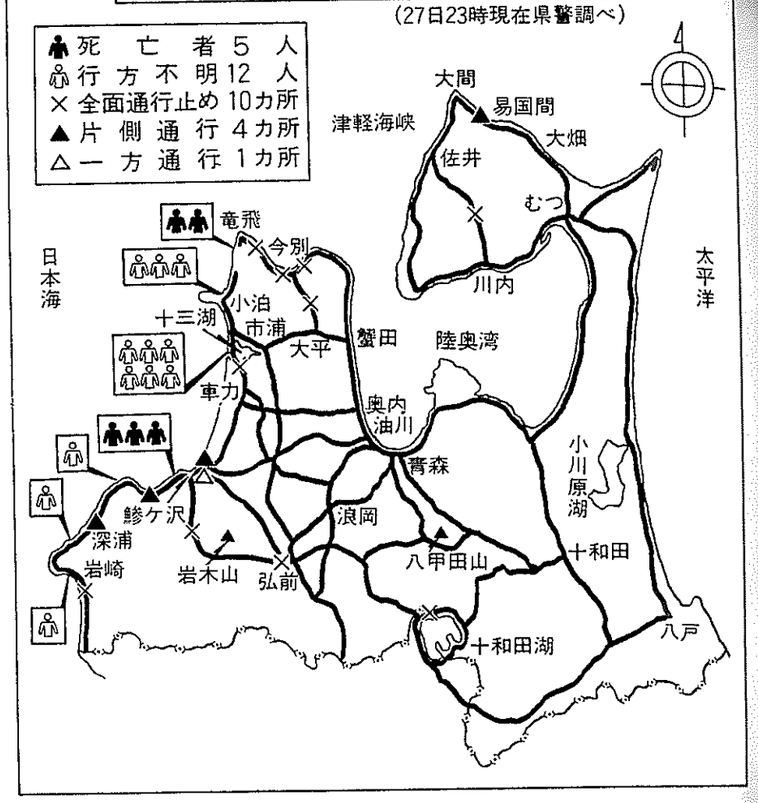
× 全面通行止め　6ヶ所
▲ 片側通行　13ヶ所
△ 大型車通行止め　4ヶ所



津波犠牲者及び道路障害個所

（27日23時現在県警調べ）

死　亡　者 5 人
行 方 不 明 12 人
× 全面通行止め 10カ所
▲ 片 側 通 行 4カ所
△ 一 方 通 行 1カ所



荒れ狂った地震の後の惨害を整理する村民

地震観測

日本は地震国といわれ、世界で発生する地震の約１割が日本とその周辺で起こっています。なかでも、東北地方の太平洋沿岸は津波の常襲地帯になっています。

地球の表面付近は、地殻と呼ばれる岩石の層によってできています。地殻のある部分に歪が貯えられ、限界に達すると破壊されて、その振動が四方に伝わります。これが地震です。

地震の被害は、直接地震によるものと火災や津波などによる二次的な被害があります。これらの被害を防止・軽減するため、東北では13の気象官署で地震観測・通報体制をしいています。また、これらの官署からは地震波形が常時仙台に送られています。地震が起これば、判定中枢（仙台）でこれらの資料を用いて震源や津波の有無を判定し、直ちに地震情報や津波予報を発表します。

火山観測と火山情報

東北地方には活動火山が14か所もあり、このうち吾妻山・安達太良山・磐梯山の３火山で常時観測を行ない、火山情報を発表し、噴火や異常現象による災害の防止・軽減に努めています。

その他の火山の監視のため、仙台管区気象台には東北地域火山機動観測班を置いて、平常時は巡回して基礎調査観測を行い資料を整え、噴火や活動が活発化した場合には直ちに緊急観測に出動します。また必要に応じて所轄地方気象台から火山情報を発表することになっています。

潮汐観測

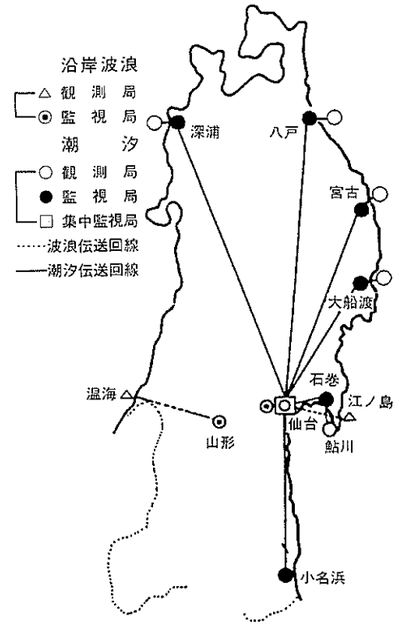
津波・高潮・異常潮位など異常現象による災害から沿岸住民や港湾施設を守るため、東北の沿岸６か所に検潮所を設備して、潮汐観測を行っています。

これら異常現象を常時監視できるよう隔測装置を設置し、仙台管区気象台で集中監視しています。

沿岸波浪観測

気象庁では、沿岸の予・警報の精度向上と波浪資料の収集のため沿岸波浪観測施設の整備を進めています。

東北では、江ノ島（宮城県）、温海（山形県）に超音波型波浪計を設置し、それぞれ仙台管区気象台および山形地方気象台で観測を行っています。



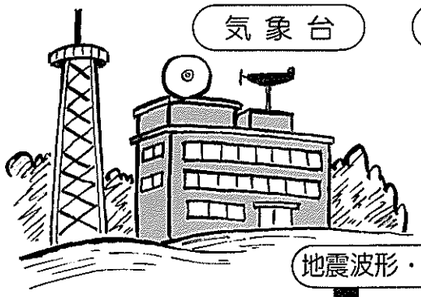
東北地方の火山活動

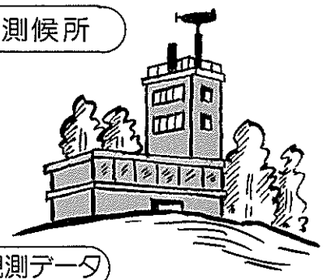
（昭和35年～57年）

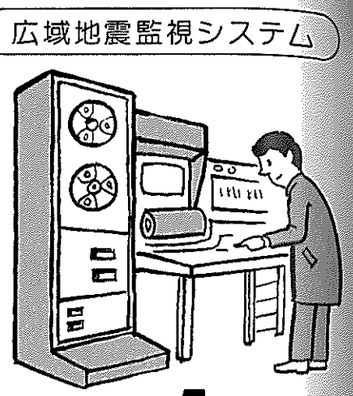
火山名	種別	35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57
恐山		●
岩木山		● ● ● ● ● ●
八甲田		
秋田焼山		
八幡平		●
岩手山		● ● ●
秋田駒ヶ岳		● ▲ ▲ ● ● ●
鳥海山		▲
栗駒山		●
鳴子		
蔵王山		● ● ●
吾妻山	常	● ▲ ●
安達太良山	常	
磐梯山	常	

注１：▲ 噴火　　● 火山性異常
注２：常 常時観測火山

地震情報や津波予報はこのように







地震波形・観測データ

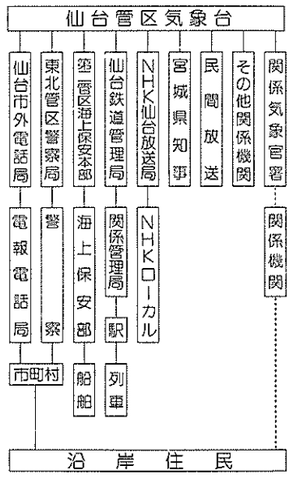
ＡＤＥＳＳ

震源判定作業(仙台管区気象台)

情報
- 津波情報
- 地震・津波情報
- 地震情報
- 津波警報
- 津波注意報

津波予報

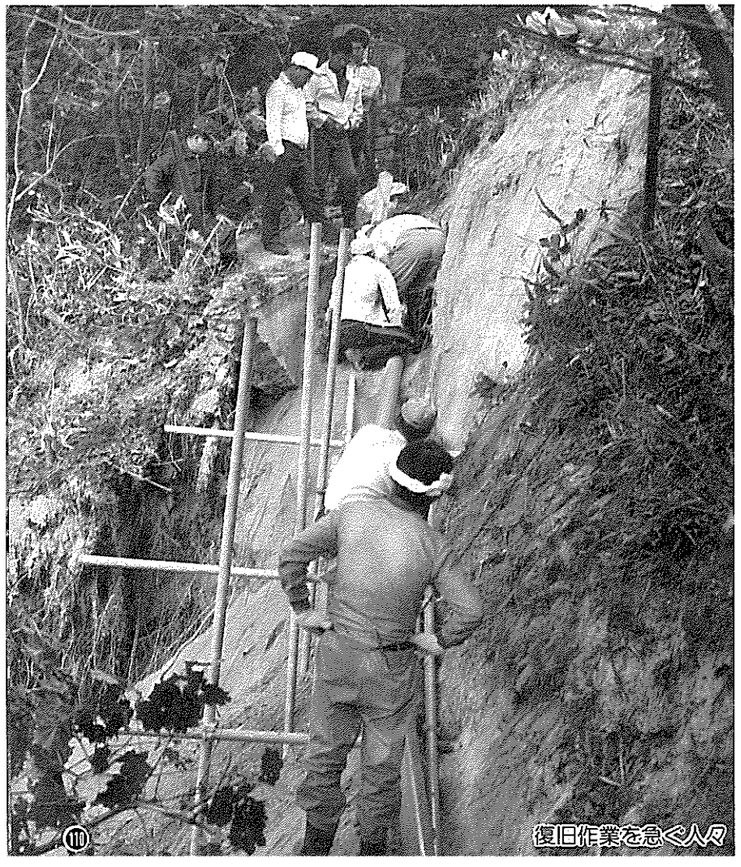
津波予報の伝達系統



東北地方に影響のあったおもな地震

(昭和31年～57年)

年月日	地名	マグニチュード
昭和31．9．30	阿武隈川下流(白石付近)	6.1
33．11．7	エトロフ島南方沖	8.0
35．3．21	三陸はるか沖	7.5
37．4．30	宮城県北部	6.5
39．6．16	新潟県沖	7.5
43．5．16	十勝沖	7.9
45．1．21	北海道南部	6.7
45．10．26	秋田県南東部	6.2
47．12．4	八丈島近海	7.2
48．6．17	根室半島南東沖	7.4
53．2．20	宮城県沖	6.7
53．6．12	宮城県沖	7.4
57．3．21	浦河沖	7.1
57．7．23	茨城県沖	7.0



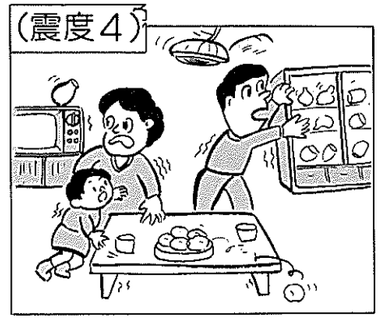
復旧作業を急ぐ人々

ぐらっ!! その一瞬、大きく傾いて倒壊寸前(大間越)

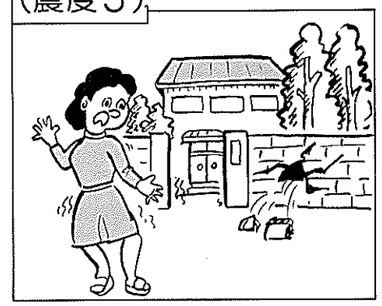
震度〔気象庁震度階級〕

気象庁震度階級		参考事項
階級	説明	
0	**無感。**人体に感じないで地震計に記録される程度	吊り下げ物のわずかにゆれるのが目視されたりカタカタと音がきこえても、体にゆれを感じなければ無感である。
I	**微震。**静止している人や、特に地震に注意深い人だけに感じる程度の地震。	静かにしている場合にゆれをわずかに感じ、その時間も長くない。立っていては感じない場合が多い。
II	**軽度。**大ぜいの人に感ずる程度のもので戸障子がわずかに動くのがわかる程度の地震。	吊り下げ物の動くのがわかり、立っていてもゆれをわずかに感じるが、動いている場合にはほとんど感じない。眠っていても目をさますことがある。
III	**弱震。**家屋がゆれ、戸障子がガタガタと鳴動し、電灯のようなつり下げ物は相当ゆれ、器内の水面の動くのがわかる程度の地震。	ちょっと驚くほどに感じ、眠っている人も目をさますが、戸外に飛び出すまでもないし、恐怖感はない。戸外にいる人もかなりの人に感じるが、歩いている場合感じない人もいる。
IV	**中震。**家屋の動揺が激しく、すわりの悪い花びんなどは倒れ、器内の水はあふれ出る。また、歩いている人にも感じられ、多くの人々は戸外に飛び出す程度の地震。	眠っている人は飛び起き、恐怖感を覚える。柱・立木などのゆれるのがわかる。一般の家屋の瓦がずれるのがあっても、まだ被害らしいものはでない。軽い目まいを覚える。
V	**強震。**壁に割れ目が入り、墓石・石どうろうが倒れたり、煙突・石垣などが破損する程度の地震。	立っていることはかなりむずかしい。一般家屋に軽微な被害が出はじめる。軟弱な地盤では割れたりくずれたりする。すわりの悪い家具は倒れる。
VI	**烈震。**家屋の倒壊は30%以下で、山くずれが起き、地割れを生じ、多くの人々が立っていることができない程度の地震。	歩行はむずかしく、はわないと動けない。
VII	**激震。**家屋の倒壊が30%以上に及び、山くずれ、地割れ、断層などを生じる。	

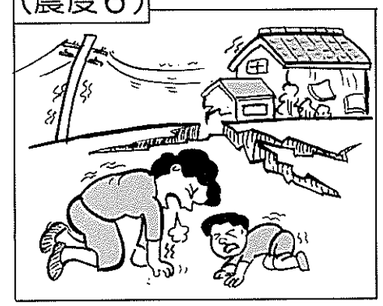
(震度4)



(震度5)



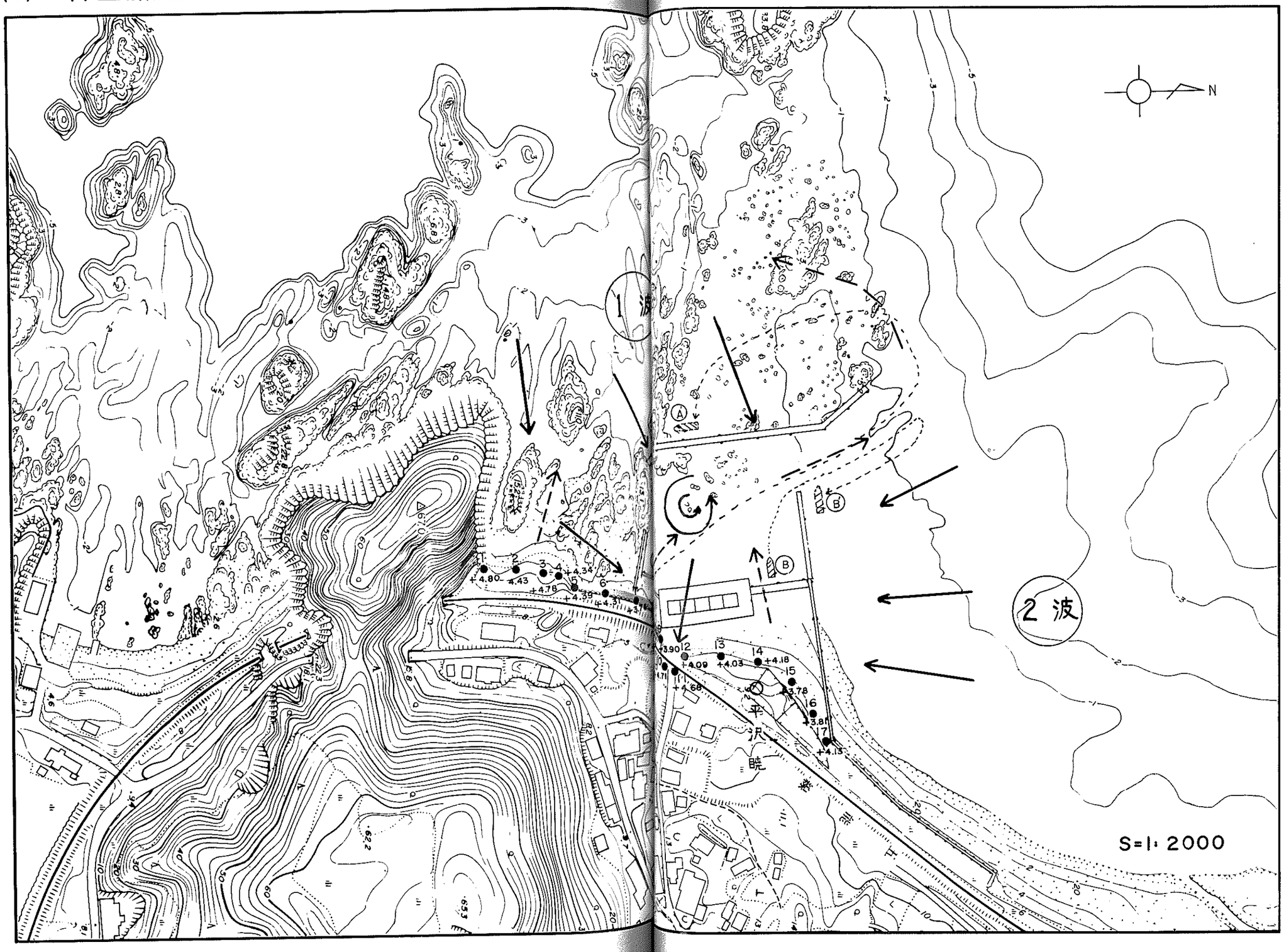
(震度6)



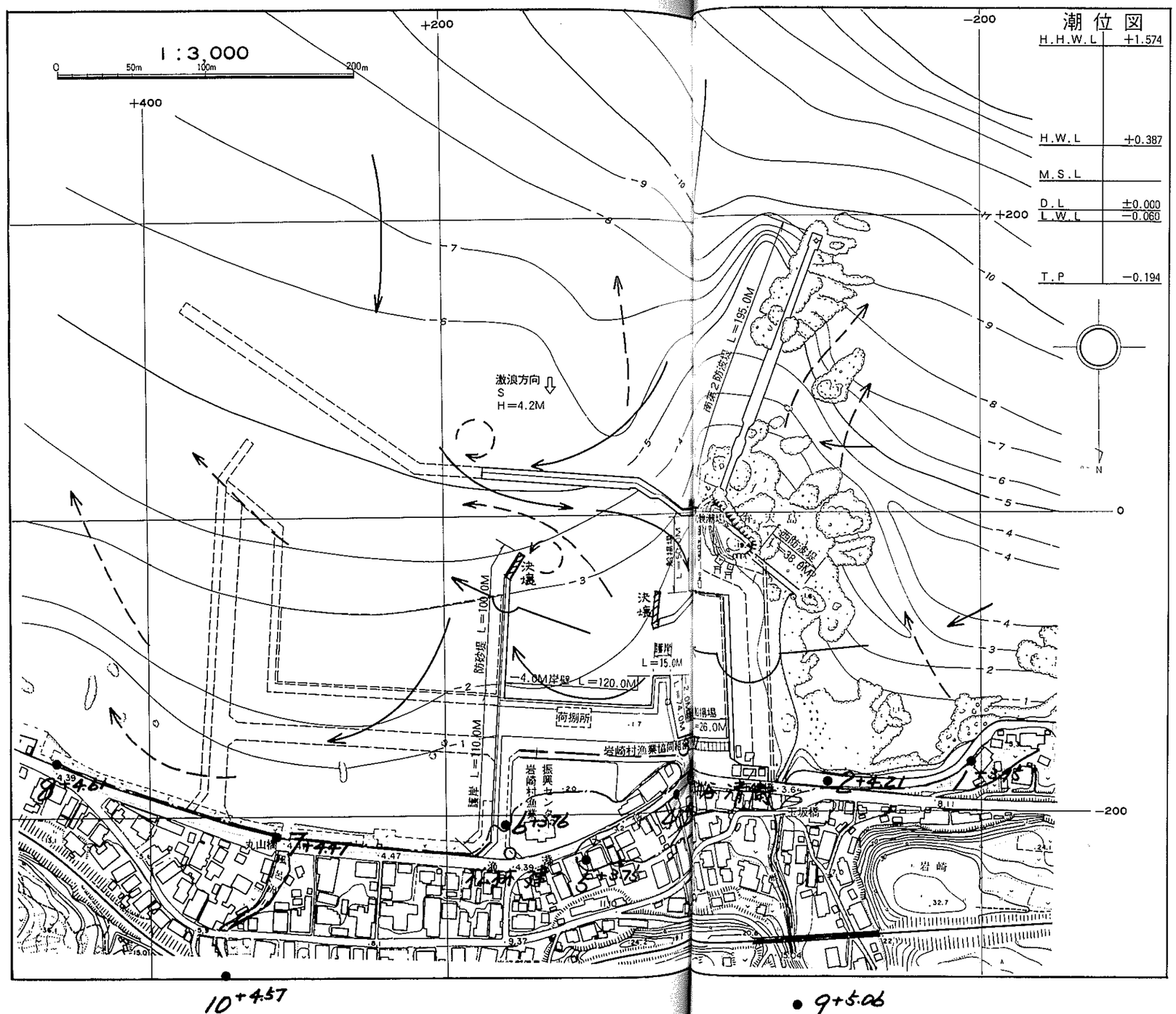
(震度7)

村内各漁港の津波の水位 （7月29日調査）

(1)　森山漁港



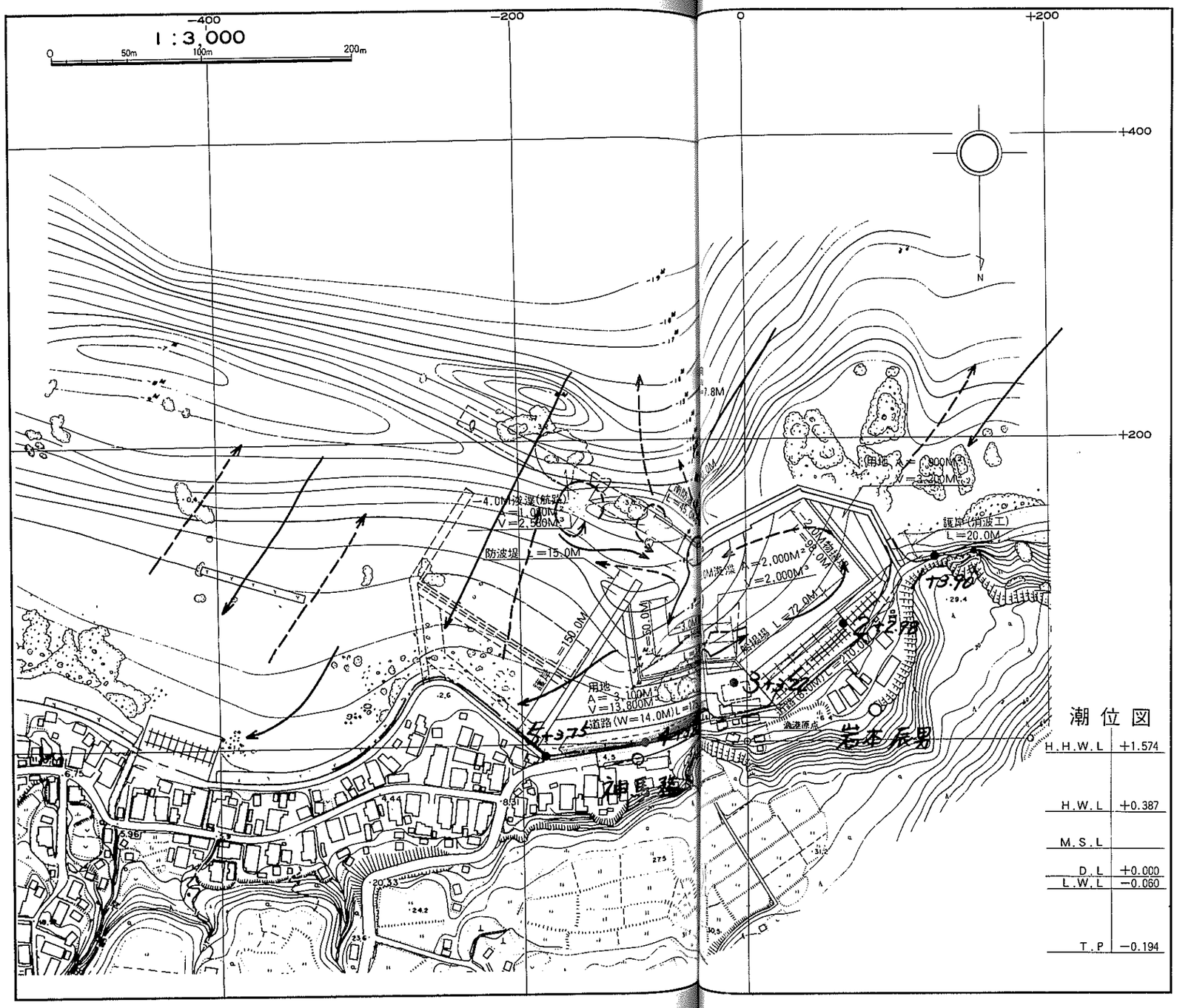
(2) 岩崎漁港



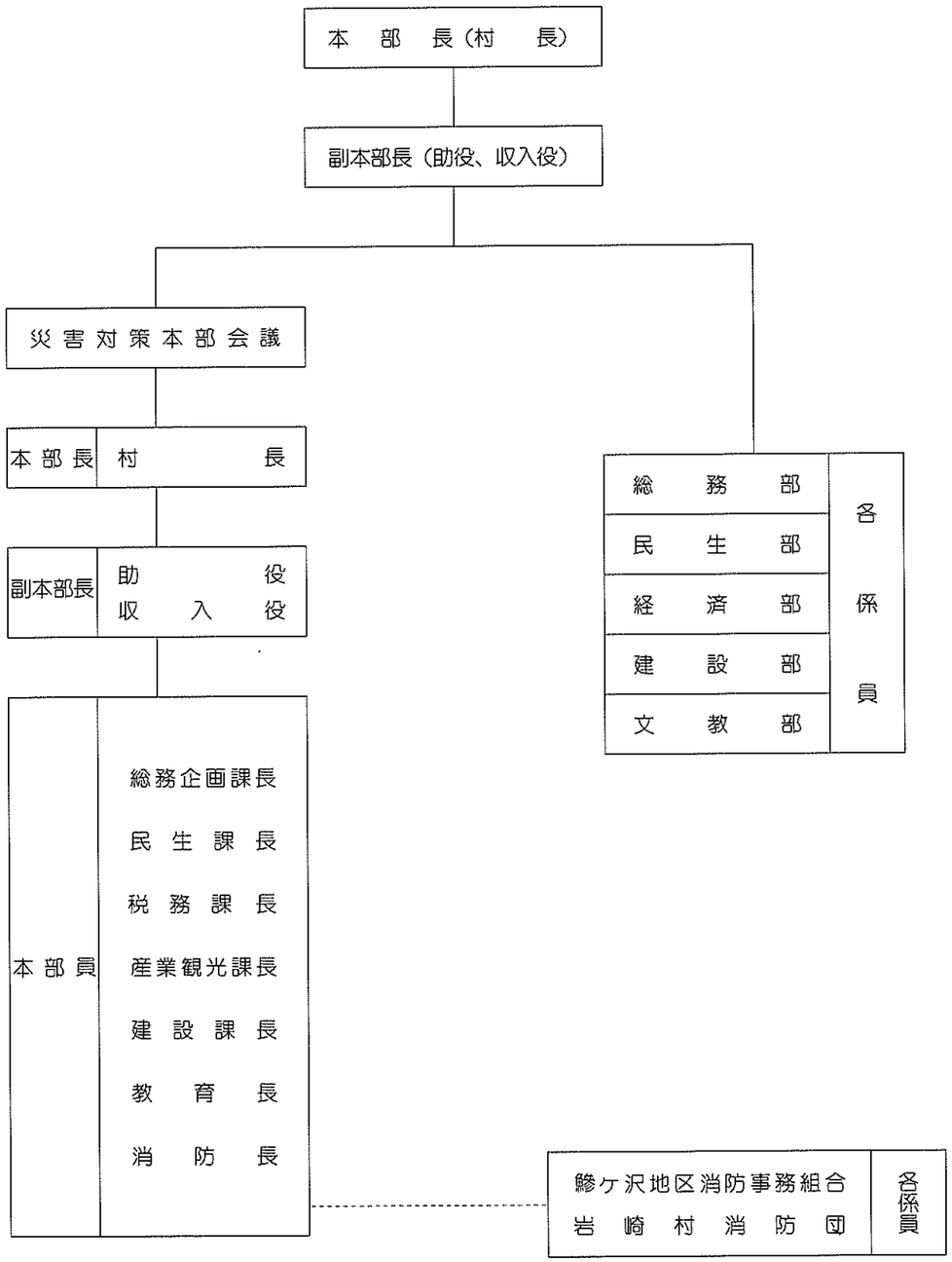
10+4.57

9+5.06

(3) 沢辺漁港


−400
−200
0
+200
+400
1：3,000
0
50m
100m
200m
N
+200
−4.0M消波堤(航路)
L＝100.0M
V＝2,500M³
防波堤 L＝15.0M
護岸 L＝150.0M
用地
A＝3,100M²
V＝13,800M³
道路(W＝14.0M)L＝
用地 A＝ 900M²
V＝3,500M³
護岸(消波工)
L＝20.0M
2.0M物揚場
L＝69.0M
2.0M消波堤 A＝2,000M²
V＝2,000M³
防波堤 L＝72.0M
道路(W＝14.0M)L＝240.0M
進港原点
+3.75
+3.90
潮位図
H.H.W.L +1.574
H.W.L +0.387
M.S.L
D.L +0.000
L.W.L −0.060
T.P −0.194

岩崎村災害対策本部組織図



業務分担表

1．岩崎村災害対策本部別業務分担表

部	係名	業務分担	要員
総務部	庶務係	1．災害対策本部の運営及び総括に関すること。 2．防災会議に関すること。 3．他の部に属さない一般庶務に関すること。	総務企画課職員 議会事務局職員
	連絡情報係	1．被害状況の連絡調整に関すること。 2．気象情報及び災害情報の総括に関すること。 3．災害の広報宣伝に関すること。 4．災害記録に関すること。	
民生部	民生係	1．人的被害の調査及び応急対策に関すること。 2．住宅被害の調査及び応急対策に関すること。 3．社会福祉施設の被害調査に関すること。	民生課職員 （各保育所を含む） 税務課職員 （出納室を含む）
	福祉係	1．救援物資の受付及び配分に関すること。 2．災害救助に関すること。 3．防疫及び衛生保持に関すること。	
経済部	農林商工係	1．農地、農作物の被害調査及び応急対策に関すること。 2．水産及び商工業の被害調査及び応急対策に関すること。 3．観光施設の被害調査及び応急対策に関すること。 4．各集会施設の被害調査及び応急対策に関すること。	産業観光課職員 農業委員会職員
建設部	建設係	1．道路、橋梁等の被害調査及び応急対策に関すること。 2．河川、農用施設等の被害調査及び応急対策に関すること。 3．漁港、海岸等の被害調査及び応急対策に関すること。	建設課職員
	水道係	1．水道施設の被害調査及び応急対策に関すること。 2．飲料水の確保及び供給等に関すること。	
文教部	災害係	1．災害対策本部との連絡調整に関すること。 2．学校施設の被害調査及び応急対策に関すること。 3．社教施設の被害調査及び応急対策に関すること。 4．罹災児童生徒の調査及び保健衛生に関すること。	教育委員会職員 （各学校、公民館を含む）

2．鰺ケ沢地区消防事務組合岩崎分署、岩崎村消防団業務分担表

鰺ケ沢地区消防事務組合 岩崎分署 岩崎村消防団	指導係	1．災害対策本部との連絡調整に関すること。 2．署員、消防団員の非常招集及び配置に関すること。 3．災害の情報収集、記録、警報に関すること。 4．被災者の救出、救護及び捜索に関すること。 5．避難の勧告、指示、誘導に関すること。 6．各災害の応急対策に関すること。	岩崎分署員 （本部を含む） 岩崎村消防団員
	作業係	1．行方不明者及び死体の捜索に関すること。 2．災害の拡大防止に関すること。 3．水防工作の実施に関すること。	

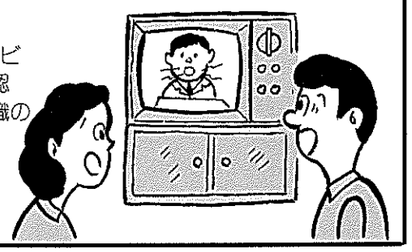
（備考）（1）災害対策本部長は、必要に応じて各部に対し、他の実施事項への応援を命ずることができる。
（2）災害対策本部長は、必要に応じて分担業務を一時的に変更できるものとする。

警戒宣言が発令されたら

普段の日にできることはやっておきましょう

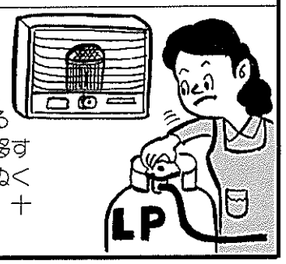
1 情報を確かめる

●ラジオ・テレビで情報を確認
●自主防災組織の情報を確認



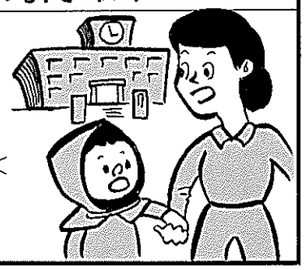
2 火の始末

●火を消す
●ガスの元栓、プロパンガスのボンベのバルブを閉める
●危険物を安全なところに移す
●電気器具のコンセントをぬく
●火を使う時はそばにいて、十分注意する



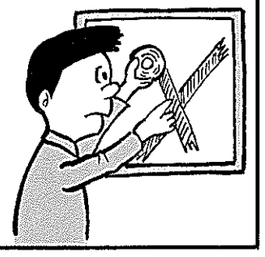
3 学童などの引き取り

●あらかじめ決められた方法で引き取る
●保護者がむかえにいく
●集団下校をむかえにいく
●安全を確かめ、自分たちで帰る



4 家の整理

●家族で決められた役割に従って行動
●棚の上から物をおろす
●家具などを倒れないようにする
●窓ガラスなどにガムテープをはる
●出入口を確保する



5 水と消火の準備

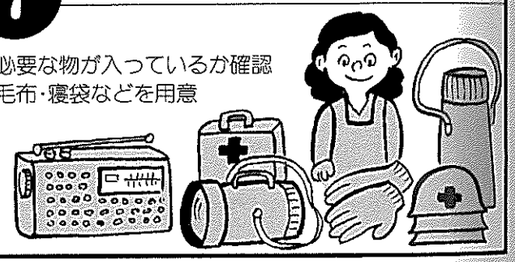
●消火器・バケツの用意
●飲料水を確保

6 身軽な服装に着がえる

●活動しやすい服や靴にする
●頭を保護する防災ずきんなどをかぶる

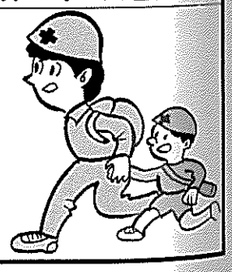
7 非常持出品の確認

●必要な物が入っているか確認
●毛布・寝袋などを用意



8 危険のある地域はすぐ避難

●津波、がけ崩など危険地域の住民はすぐに避難する
●避難は徒歩で



9 一般の地域は避難の準備

●主な出入口をあけ、逃げ道を作っておく
●すぐに戻ってこれない家族への伝言があれば書いておく

5月26日の村内の状況

12:00 地震発生　震度５　(M7.7)
12:05 県消防防災課へ状況報告。
12:10 全村民へ行政無線により避難命令伝達。広報車による村内ＰＲ（火の用心を重点に行った）。
12:15 立待岬で魚釣り中の１名が波にさらわれ行方不明（本人のものと思われる乗用車を発見一能代）。
12:30〜12:40 ガス・電気取扱い注意の無線放送。
12:55 避難命令解除。
13:25 十二湖二ツ目〜玉池間の道路200ｍにわたって亀裂、鶴田町から遠足のバス７台が足止め、鰺ケ沢土木事務所と協議の上、応急復旧作業を行なった。
13:45 ガス・ストーブ使用注意の無線放送。
14:00 道路被害調査開始。
14:00 各地区被害調（公共施設も同じ）。
14:40 被害漁船は組合に被害届けを出すよう無線放送。
14:50 岩崎小学校の27日臨時休校を無線放送。
15:05 水道断水予告無線放送。
16:00 秋田沖地震災害対策本部設置。
16:00 大間越〜増田作一、大滝芳吉、増田輝昭に避難命令。
16:50 鶴田町中学校遠足バス通行可能となり帰途につく。
17:15 県環境衛生課へ給水車要請（762世帯断水）。
17:30 県より電話あり『昭和58年日本海中部地震』と呼称。
18:00 能代商業学校、バスで生徒を帰宅させてくれた。
18:10 黒崎地区水道26日中の補修不能の旨通知あり。
18:25 岩崎水源地貯水量調査。
18:30 五所川原市役所(総務課長)へ給水車派遣要請す。
18:40 床上浸水、「菊池ヤス宅」。
19:00 県知事一行「岩崎漁港視察」。
19:20 陸上自衛隊給水車派遣の連絡あり。（1トン2台、5トン1台）
19:50 大間越〜赤坂キエ、上杉武久、砂子田藤吉に対して、行政連絡員を通して避難命令を出した。
20:00 給水車到着一黒崎、正久、森山、松神を廻る。
20:00 増嘉商店倉庫附近水道本管破裂。
20:10 沢辺地区より注水。
20:30 沢辺、早稲田橋附近、本管破裂。
21:03 大津波警報解除。
22:00 給水車給水終了。

その後の村内の状況

5月27日(金)
9:00〜9:45 ・全員協議会開催。
10:00 ・全員協議会村内被害調査。
12:50 ・北村知事ヘリコプターにて来村。
12:50 ・加藤国土庁長官ヘリコプターにて来村。
13:50〜14:20 ・役場にて陳情（受理）。
14:20 ・岩崎漁港を視察。
14:45 ・黒崎簡易水道給水バルブ開放。
・沢辺簡易水道復旧。

5月28日(土)
・水産庁・海岸防災課長、漁港災害状況調査のため来村。
・村長、助役全村巡回。
20:00 ・松神簡易水道復旧。

5月29日(日)
12:55 ・行方不明者捜索のため陸上自衛隊ヘリコプター出動。
13:20 ・黒崎配水地付近本管破損。18時に復旧。
14:00 ・松神本管破損。19時15分復旧。

5月30日(月)
9:00 ・社会党調査団被害視察のため来村。
・赤十字より被害（破損）家屋へ救援物資納品。

5月31日(火)
・赤十字救援物資配給。

6月1日(水)
・国鉄五能線、岩崎〜岩館間復旧。
・県知事及び県議会陳情。

6月2日(木)
・国鉄五能線復旧のため脇ノ沢川に工事施設を設定(秋鉄局)。

6月3日(金)
・行方不明者捜索ヘリコプター出動。
9:50〜10:15 ・自民党地震調査団来村、岩崎村中央公民館で陳情。
10:30〜13:30 ・全員協議会開催、鰺ケ沢・木造方面各庁に陳情。

6月4日(土)
・県知事及び関係部課へ災害対策のため陳情。

6月5日(日)
・行方不明者遺体で発見される。

6月8日(水)
9:00〜10:00 ・衆議院災害対策特別委員一行来村。

6月9日(木)
・青森県知事、町村会の合同中央陳情に参加。
・余震　震度3、3回記録。

6月11日(土)
・余震あり。

6月12日(日)
・余震あり。

6月13日(月)
・村県民税、固定資産税、国保税の減免について告示。

国に対する陳情項目

1．陳情の要旨

昭和58年５月26日に発生しました「日本海中部地震」は、その震度の強さと範囲の広さは、かつてないほどの規模であり、想像に絶する激甚な被害を受けました。
損害額も当村だけで約17億円に及び、人心の動揺も計り知れぬものがあります。

当村におきましても、これが災害復旧に最大の努力をいたす所存でありますが、ご案内のとおり過疎地域でもあり、財政力も誠に弱少で、自力のみでは到底これが復帰はなし得ぬ状態にあります。

何卒、以上の事情をご賢察くださいまして、国の速やかな対応と特別の助成措置を賜りますよう陳情申し上げるものであります。

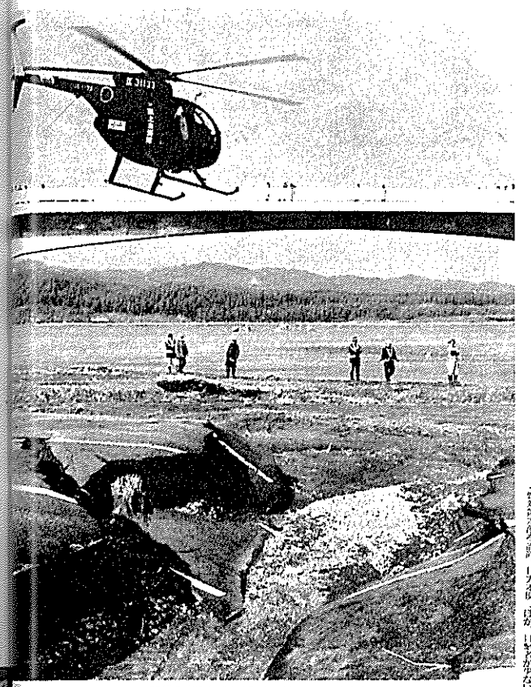
1．激甚災害特別財政援助法の適用。
2．天災融資法の早期発動。
3．農林漁業金融公庫の融資枠の拡大及び借入金の償還延期措置。
4．漁船保険金の早期支払いをはかること。
5．住宅金融公庫の融資枠の拡大及び借入金償還期間の延長。
6．災害復旧事業の事前着工を含め早期着工の促進と財政上の助成をはかること。
7．公立学校施設災害復旧費国庫負担法の適用。

断水のため水がなく、給水車から水をもらう村民

2847号　東奥日報　1958年（1983年）5月27日（旧4月5日）　金曜日　（日刊）

M7.7 日本海沿岸に津波

32人死亡、69人不明 ８道府県で被害



悪夢の捜索　不明の釣り人捜索に陸自ヘリコプターも加わる。手前の崩れた個所からも釣り人が収容された＝十三湖岡口で

日本海中部地震

4人死亡、13人不明

県内 作業員ら犠牲に

釣り人、依然不明

十三湖 早朝から再び捜索

3日公示 参院選の日程決まる

東奥日報
発行所 青森市新町二丁目三番四号
東奥日報社
電話 青森 (0177)23-1111(代表)
©東奥日報社 1983

今日の紙面

2面 遠足の小学生に大津波
3面 警報、すぐ津波が襲った
4面5面 写真で見る県内の惨状
12面 県内各地にツメ跡残す
13面 高層住宅、その時の恐怖
14面 空と陸からの現地ルポ
15面 3人の遺族 釣り人のむ

日本海中部地震の県内被害
（58年5月26日22時現在）

	死亡	行方不明	負傷者	全壊	半壊	一部破損	浸水	非住家被害	道路被害	橋りょう被害	崖くずれ	鉄道不通	船舶被害	漁船被害	計
青森県	3	3	23	1	9	30	33	1	16	1	1	1	3	1	127
秋田県	2	2	1	9	103	2	1	1	1	1	1	1	2	9	136
山形県	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	30
北海道	3	3	23	1	9	30	33	1	16	1	1	1	3	1	127
新潟県	1	1	9	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	30
合計	10	10	57	12	123	34	69	5	35	5	4	4	10	13	450

30日は
者の日
よくみて
てから
のトラブルが増
かかわる苦情や
な近くの消費生
面庁
野草の効用 [通信講座]
自然に親しみ 事に没頭つ 野草と実益の技能！ 野草に関する知識と技能を習得して、あなたの名前が楽しく実益に！
行政管理庁指定通信講座 統計資格
●行政管理庁指定 統計士・統計主事 資格が取れる。有資格者&方は行管庁に報告、証書発行。
●統計入門、図解統計、統計解析、推定検定、多変量解析、品質管理など統計の基礎から通信講座開講。
●昭和58年度 第19期生新会員受付中／今すぐ！
第2種情報処理受験講座 国家資格
●通産省国家試験「情報処理技術者」試験に通信講座で開講中！
●実力判定問題の採点と個人指導／やさしく学べるテキスト
●講座名を記入してハガキか電話で下記へ／
●資格資料を無料で急送中！
〒160 東京都新宿区大京町4の13
(財)実務教育研究所 受験部
☎03(357)8153
これからの人生を…「公的」自力を手中に!!
大卒の人生づくりにスタートを
国家公認 公的資格
司法書士
土地家屋調査士
宅地建物取引主任
不動産鑑定士
行政書士
●高給与力発揮と全職業
●独立開業、自営の夢も
●資格を取ると会社から一目置かれる存在に
●自営・独立開業も自在。あなたの人生の大きな経済支柱に
話し方 通信講座
NHK元アナウンサー 津島宣長が完全個人指導!!
学文社カルチャーセンター ことばの研究室
〒102 東京都千代田区富士見2-10-16
現代ボールペン習字
日本ペン習字研究会
美しい文字は一生の財産！
●もう文字で悩む必要はありません
●上達スピードとやさしさは一番！
総合 日本書道学院 書道 通信講座
●格調高い趣味・教養として
●パイト・老後対策の高収入特技として書道は人気
日本書道学院

発刊にあたって

昭和58年5月26日正午に発生した「1983年日本海中部地震」は岩崎村全域に、マグニチュード：7.7という強震と津波を併発し、一瞬にして尊い人命を奪い、船や建物等に大打撃をもたらしました。

これらの被害者の皆さんに心からお悔みとお見舞を申し上げますと共に故人に対してご冥福をお祈りいたします。

この度の地震、津波による被害額は、実に17億7千万円にも及び、当村初まって以来の大災害でありました。

村では即時、災害対策本部を設置し、行政機構の総力をあげて調査に、救済に、復旧対策にと、国・県・村議会を始めとする各関係機関、各団体等の強力なご指導ご支援のもとに各般にわたって努力を傾注いたしました。

また、村民の多くの人達がそれぞれの立場でご尽力くださいましたことに、深く感謝を申し上げます。

将来いつまた、このような天災が襲来するかも知れません。その時のためにも、今回の体験を教訓とすることの意義を考え、ここに写真並びに作文を中心とした記録集を作成することにしました。ご協力くださいました沢山の方々に厚くお礼を申し上げます。

この記録集が末永く防災に役立つことを願い、村民憲章にうたわれている、「たくましい力をもって豊かに発展する村づくり」を一段と進展させてゆく上での資料となることを望んでお礼と発刊のことばといたします。

昭和59年3月

岩崎村長　堀　内　辰　悦

被害概要と編集後記

昭和58年５月26日午後零時零分18秒、岩崎沖西方約90km、北緯40度24分、東径138度54分、深さ５kmを震源とするマグニチュード7.7という日本海で発生した地震としては最大級の巨大地震が発生。

岩崎・深浦・むつ・秋田は震度５の強震、青森・八戸・盛岡・酒田では震度４の中震と激しい揺れが東北六県を中心に広い地域に及びました。

地震発生と共に急襲した７m前後の大津波は、漁港を埋め尽くし、漁船を呑み込み、釣り人を浚(さら)い、そして民家を打ち砕いて、地震の被害をさらに大きなものとしました。

落石は住宅、道路に襲いかかり数十ケ所で住民の行く手を阻み、住家は亀裂が入り、そして倒壊し、避難を余儀なくされた地域もありました。

国鉄五能線は鉄橋に亀裂が生じ、さらにはまくら木が浮いたりして運行不能となり、地震直後現場附近を走行中の気動車は間一髪のところで停止、大惨事を免れ数日間立往生しました。

「日本海中部地震」と命名された今回の地震のマグニチュードは、巨大地震と呼ばれる値である7.7であり、日本海側では最近にない最大級の規模のものでありました。

この地震によりこうむったわが岩崎村の被害は大きく、昭和58年６月６日正午現在、岩崎村災害対策本部がとりまとめた被害総額は昭和58年度岩崎村一般会計予算（当初）14億7,412万１千円を20％以上も上回る実に17億7,712万４千円にも上りました。

６月６日現在の調べでは死者１人(他県人)、住家半壊６戸、一部破損25戸、床上浸水１戸、床下浸水10戸、非住家全壊３戸、半壊８戸の53戸、公共施設としては、岩崎中学校・岩崎小学校・岩崎南小学校の３校が校舎に亀裂が生じ、水道は３水源地で本管等が破損し大間越部落を除く全ての地域で断水となりました。

漁港は４ケ所で堤防等が崩壊し、岩崎漁港では貯氷庫・給油タンク・荷捌所が損壊、道路は国道県道村道12線が崩壊、河川は３ケ所で護岸等が崩壊、がけ崩れは村内いたるところで発生しました。

農業用施設としては、農道３ケ所、林道３ケ所、農業用水路・ため池８ケ所、水田は全域にわたって被害が発生しました。

また商工被害も全村におよび、自動車の滅失７台、漁船は滅失16隻・流失20隻・破損30隻の合わせて66隻に上り、被害額も２億7,200万円と特に大きなものとなりました。

村でも日本海中部地震災害対策本部を設け被害調査と被害者救済、災害復旧に全力をあげたところであるが、岩崎村を直撃した地震や津波を記録すると共に記録集を発行し、この記録集が今後の災害時の一つの参考・教訓になれば幸いです。

なお、最後に本記録集発行にあたってたくさんの方々から貴重な写真や体験談をお寄せいただいたことに対しここで厚くお礼を申し上げ、被害概要と編集後記といたします。

写真提供者

境　　喜美雄
平　沢　　暁
古　田　教　男

編集委員

西　巻　正　治
菊　池　真　臣
菊　池　雄　司

昭和59年3月発行(1984年)

発行　青森県・岩崎村
青森県西津軽郡岩崎村大字岩崎字松原44の７
ＴＥＬ01737－7－2111㈹
編集　岩崎村役場・総務企画課
制作　㈱あるてす　　印刷　川口印刷工業㈱